

図116 遺構外出土遺物(縄文時代・53)

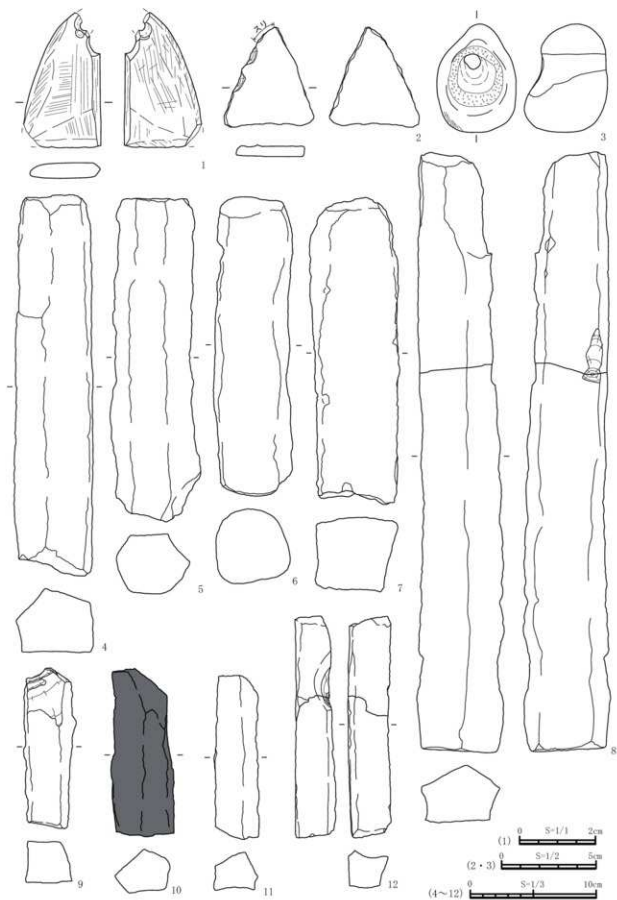


図117 遺構外出土遺物（縄文時代・54）

第3節 古代以降の遺構・遺物

1 遺構

焼土遺構(SN01・SN02) (図118、写真32)

焼土遺構を2基検出した。この2基は隣接しており、一連の可能性もある。SN02における放射性炭素年代測定では、14世紀後半頃の測定結果が得られており、屋外カマドの一部が残存したものの可能性がある。

第1号焼土遺構(SN01) (図118、写真32)

【位置・確認】調査区南端近くの落ち際のH-54グリッドで、被熱した粘土を検出した。

【重複】SN02と隣接している。

【規模・平面形】南東側を欠するが、直径60cmの半円形を呈する。

【堆積土】明黄褐色土の中に炭化物粒や焼土粒をを多く含む。

【出土遺物】無し。

【まとめ】隣接するSN02とは一連のもの可能性はある。

第2号焼土遺構(SN02) (図118、写真32)

【位置・確認】調査区南端近くの落ち際のH-54グリッドで、被熱した粘土と焼成面を検出した。

【重複】SN01と隣接している。

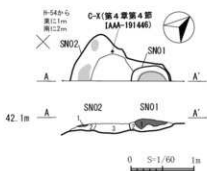
【規模・平面形】南東側を欠するが、直径90cm程の不整の半円形を呈する。

【堆積土】明黄褐色土や黄褐色土の中に炭化物粒や焼土粒を多く含む。

【出土遺物】縄文土器が9,995g、剥片石器が2点・4gが出土したが、詳細時期を示す出土状況ではない。剥片石器は、微細剥離のある剥片1点(2.1g)・剥片1点(2.1g)である。

【まとめ】隣接するSN01とは一連のもの可能性はある。SN02における放射性炭素年代測定では、14世紀後半頃の測定結果が得られている。

(永嶋)



SN01

- 1層 10YR7/6 明黄褐色 しまり強 粘液中 炭化物粒(φ3~5mm) 3% 焼土粒(φ1~5mm) 3%
 2層 10YR6/6 明黄褐色 しまり中 粘液中 炭化物粒(φ1mm) 1% 黄褐色ローム粒(φ10~15mm) 20%

SN02

- 1層 10YR7/6 明黄褐色 しまり中 粘液中 焼成面
 2層 10YR5/6 黄褐色 しまり弱 粘液中 炭化物粒(φ1~3mm) 3% 黄褐色ローム粒(φ5~10mm) 15%
 3層 10YR5/4 に近い黄褐色 しまり強 粘液中 炭化物粒(φ1~2mm) 1% 黄褐色ローム粒(φ10~20mm) 5%

図118 焼土遺構

2 遺物

縄文時代以外の遺物は、古代の土師器・須恵器、近世以降の陶器・磁器・ガラス製品・金属製品が出土している。これらはQ～T-27～36や38グリット以南の標高40m以上の平場部分から出土しており、斜面から出土したものや遺構に伴うものはない。

(1) 古代の遺物(図119-1～4)

古代の遺物は、平安時代の土師器・須恵器が出土している。

土師器(図119-1)

土師器は甕の底部片が1点出土した。調整は、外面がケズリ・内面はナデ・底部は砂底である。小片であるため詳細な時期は不明であるが、後述する須恵器の存在から勘案し、10世紀中葉と推測される。

須恵器(図119-2～4)

須恵器は3点出土した。甕の頸部(2)・肩部(3・4)で、2の頸部には刻書と思われる刻みが見られる。いずれも五所川原産と推測され、10世紀中葉の時期が推定される。

今回の調査で古代の遺構は確認されなかったものの、平安時代の土師器・須恵器が4点とごく僅かであるが出土していることから、遺跡の所在するこの丘陵にも平安時代の集落が展開していた可能性が高い。

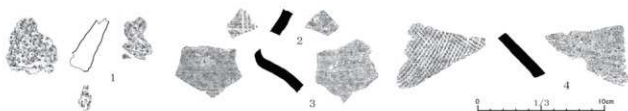


図119 遺構外出土遺物(古代)

(2) 近世以降の遺物(図120-1～37)

近世以降の遺物は、陶器・磁器・ガラス製品・金属製品が出土している。

陶器(図120-1～13)

碗・徳利・甕・播鉢が33点出土し、うち13点を図示した。

1～3は碗である。1は小片であるが銅緑釉の口縁部、2は唐津の三鳥手の胴部、3は青磁の底部である。3の高台内は露胎で、付高台の可能性もある。年代は、1・2が肥前IV期(1690～1780年代)、3が肥前III～IV期(1650～1780年代)と考えられる。

4・5は袋物である。4は青磁の壺の頸部片と思われ、肥前IV期の年代が考えられる。5a・5bは同一個体で、越後産焼酎徳利である。欠損しているため口径および口縁部形状は不明であるが、

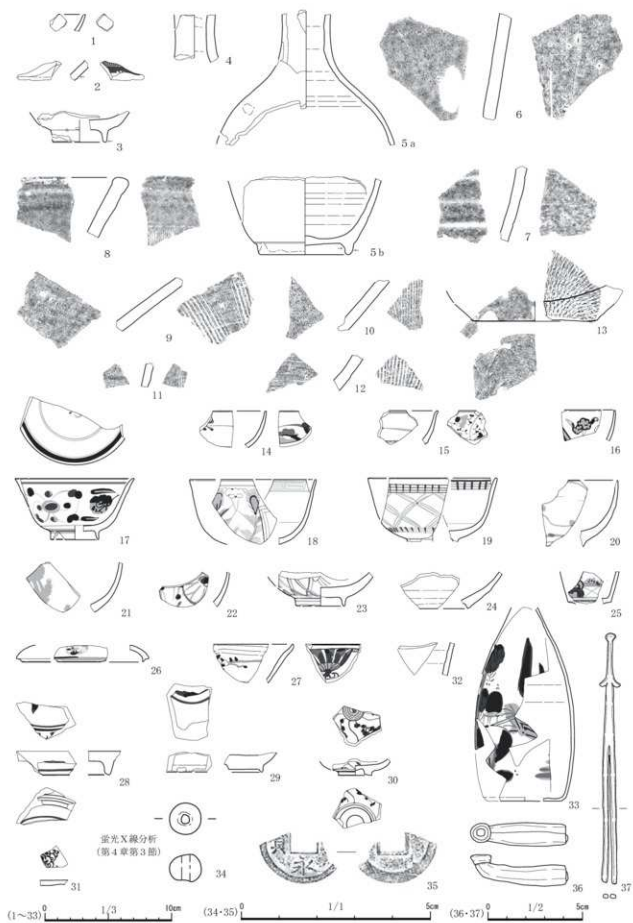


図120 遺構外出土遺物(近世・近代)

高台は露体で、胴下半は直線的に立ち上がり、最大径が胴部上半にあるラッキョウ型を呈すると推測される。ロクロ成形で、外面には灰白色・内面には褐色の釉が施されている。窯印は確認されなかったものの、阿賀野市五頭山西麓地域の笹岡焼と考えられ、ほぼ明治期のものと推測される。なお、接合しなかったが同様の釉調の破片が3点出土している。また、図示しなかったが、これとは釉調が異なる破片が18点出土しており、釉の特徴からもう5個体遺存していた可能性もある。

6・7は甕である。共にロクロ成形の胴部片で、6には光沢のある釉が施されている。7は肥前IV期の年代が考えられる。

8～13は播鉢である。8は口縁部・13は底部、その他は胴部である。12・13以外は内外面にぶい褐色釉が施されている。9は瀬戸、13は唐津と推測されるが、それ以外ははっきりとしない。13は肥前III期(1650～1690年代)の年代が考えられるが、それ以外は判然としない。

なお、図示しなかったが、近代から現代と思われる陶器片が14点出土している。

磁器(図120-14～33)

磁器は碗・小杯・合子・皿・袋物が62点出土し、うち20点を図示した。

14～24は碗である。外面は花卉・草木等の植物が、内面は圏線が描かれているものが多い。14～16は口縁部、17は略完形、18～20は上半部、21・22は腰部、23・24は底部である。15・17・18・19は端碗である。24の高台は基筈底状で、底部は露胎となっている。19は内外面に摺文が、18は内面に雷文が、23は二重網目文が描かれている。21はコンニャク印判である。14・16・20・21・23・24は肥前IV期、22は肥前IV～V期、15・17・18・19は肥前V期(1780～1860年代)の年代が考えられる。

25は小杯の腰部である。圏線の他に花卉や樽と思われるモチーフが描かれている。肥前IV期の年代が考えられる。

26は合子の蓋である。圏線の他に草と思われるモチーフが描かれている。肥前V期の年代が考えられる。

27～31は皿である。見込みや高台内に圏線が描かれているものが多い。27は口縁部、28～31は底部である。27は多角形の皿の口縁部で、口唇部には口紅が施されている。29は蛇の目凹形高台・30は畳高台である。31の見込みには五弁花が描かれている。28・31は肥前IV期、27・29・30は肥前V期の年代が考えられる。

32・33は袋物である。32は円柱状の器形をしたものの胴部、33は徳利の胴下半である。共に内面は無釉でロクロ痕が観察される。32はコンブラ瓶の可能性もある。33は外面に草木と思われる模様を描かれている。いずれも肥前V期の年代が考えられる。

なお、図示しなかったが、近代から現代と思われる印判手の碗と装飾の無い磁器片が47点出土している。

ガラス製品(図120-34)

玉が1点出土した(34)。淡青色の丸玉で、大きさは外径8mm・厚さ7mm程である。器面の観察から巻き付け技法によるものと推測される。自然科学分析の結果から、カリ石灰ガラスであることが判明し、また、銅(Cu)で淡青色に着色されたと推定される(第4章第3節参照)。

金属製品(図120-35~37)

銭貨・煙管・簪が各1点出土した。

銭貨(35)は寛永通寶一文銭の銅貨で、寛永通寶1期の通称古寛永である。寛永13年(1636)以降の年代が考えられる。

煙管(36)は雁首で、錆の様相から銅製と推測される。ラウが僅かに残存する。火皿の径は1.1cmで、火皿の一部には金色の物質の付着が確認される。脂返しの形状から古泉氏編年の第五段階(18世紀後半)の年代が考えられる。

簪(37)は松葉簪である。これも錆の様相から銅製と推測される。

(平 山)

第4章 自然科学分析

第1節 古野(2)遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

株式会社 パレオ・ラボ

1 はじめに

下北郡風間浦村大字易国間古野に所在する古野(2)遺跡から出土した縄文時代前期後葉の黒曜石製石槍について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象は、縄文時代前期後葉の黒曜石製石槍1点(92-27)である(表1)。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の洗浄を行った。

表1 分析対象

分析No.	遺物番号	出土位置	S番	層位	器種	備考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	時期
1	92-27	L-16	S-x	III	剥片 石槍	大	(71)	27	12	21.8	縄文時代前期後葉

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{Rb分率} = \text{Rb強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$2) \text{Sr分率} = \text{Sr強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$3) \text{Mn強度} \times 100 / \text{Fe強度}$$

$$4) \log(\text{Fe強度} / \text{K強度})$$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 \times 100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸 $\log(\text{Fe強度} / \text{K強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺



図1 黒曜石産地分布図(東日本)

物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ の値が減少する(望月 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、試料の石槍は八森山群(青森県、深浦エリア)の範囲にプロットされた。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

4 おわりに

吉野(2)遺跡より出土した縄文時代前期後葉の黒曜石製石槍1点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、深浦エリア産と推定された。

(竹原弘展)

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県/エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白濁1	赤石山山頂(43)、八号武蔵頭(15)	
	白濁2	7の沢川支流(2)、18武蔵頭(10)、7の勢川武蔵頭直下河床(11)、アジサイの滝露頭(10)	
	赤井川	南川・土木川(24)	
	上土幌	十勝三鼓(4)、タクシュベツ川右岸(42)、タクシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)	
	蘆川	蘆川山(5)	
	豊浦	岸山(5)	
	豊浦	豊島(10)	
	旭川	宮又右(9)、雨籠台(2)	
	名寄	名寄 忠烈布川(19)	
	秩父野1	秩父野1	
	秩父野2	秩父野2	
	秩父野3	秩父野3	
	遠軽	遠軽 社名湖川河床(2)	
	生田原	生田原 仁田布川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1 留辺蘂2 ケンヌマツ川河床(9)	
網走	網走 網走市宮スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)		
青森	木古	出来島 出来島海岸(15)、鶴ヶ坂(10)	
	深浦	八森山 八森山(7)、八森山公園(9)	
	青森	大田川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎 金ヶ崎海岸(10)	
	男鹿	藤本 藤本海岸(4)	
岩手	北上川	北上川原1 北上川原2 北上川原3	
	北	北上川(9)、真城(33)	
	宮崎	湯ノ倉 湯ノ倉(40)	
宮城	色麻	根岸 根岸(40)	
	仙台	秋保1 秋保2	
	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽月	月山荘前(24)、大越武(10)	
	柳町	たるのき代(19)	
新潟	新発田	板山 板山段場(10)	
	新津	金津 金津(2)	
熊本	高原山	高原山 高原山(4)	
	和田	甘湯沢	甘湯沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
		西無瀬	菅野マールライト土砂壱植場(30)
		廣山	廣山(14)、東新屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土壇橋1	土壇橋西(10)
		土壇橋2	和田町トンネル北(20)、土壇橋北西(38)、土壇橋西(1)
		古跡	和田町トンネル上(29)、古跡(30)、和田町スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
牧ヶ沢		牧ヶ沢下(20)	
高松沢	高松沢(19)		
諏訪	星ヶ石(33)、星ヶ塔(20)		
豊科	冷山(20)、妻岩峠(20)、妻岩峠東(20)		
神奈川県	箱根	青ヶ島 伊ノ浦(20)	
	箱根	箱根 御宿(5)	
静岡県	天城	網治原 網治原(20)	
	天城	上多賀 上多賀(20)	
東京都	神津島	神津島 神津島(20)	
	神津島	思地島 思地島(27)	
島根	隠岐	砂嶋崎 砂嶋崎(20)	
	隠岐	久見 久見マールライト中(6)、久見段原現場(5)	
		寛浦 寛浦海岸(3)、加茂(4)、岸田(3)	

表3 測定値および産地推定結果

分析No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn/100 Fe	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア	分析No.
1	234.1	95.7	3113.3	474.0	63.6	443.6	3105.9	11.60	3.07	1.56	1.12	八森山	深浦	1

引用文献

望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—』大和市教育局委員会編：P172-179

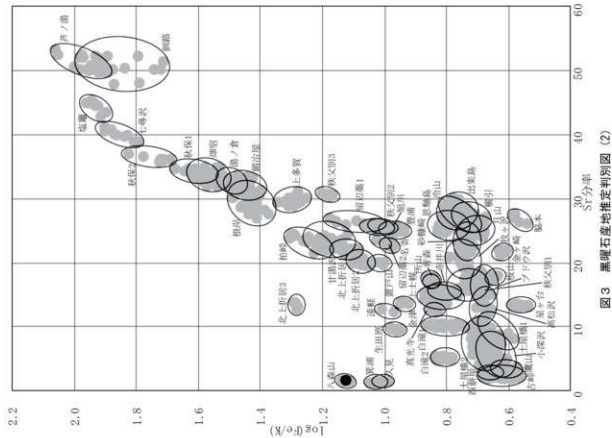


図3 黒曜石産地推定判別図(2)

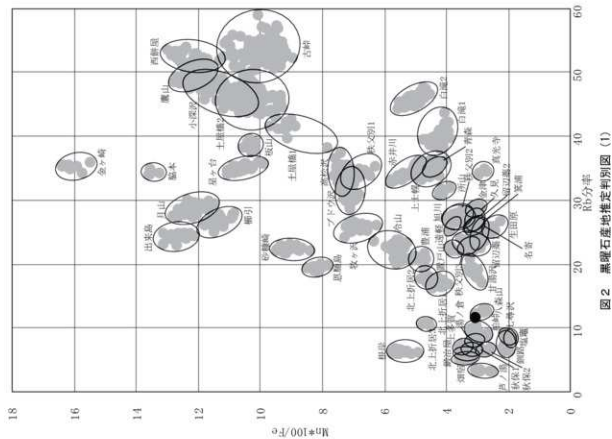


図2 黒曜石産地推定判別図(1)

第2節 古野(2)遺跡出土微細遺物(種子・骨)同定分析

バリノ・サーヴェイ 株式会社

1 はじめに

古野(2)遺跡は、青森県下北郡風間浦村大字易国間古野に所在する。下北半島北部の海成段丘上に位置し、縄文時代前期後葉～後期前葉の竪穴建物跡、土坑、溝状土坑などが検出されている。

本分析調査では、遺構内から出土した種実遺体、骨について、その種類を明らかにして動植物利用に関する情報を得るため、種実遺体同定および骨同定を実施する。

2 試料

種実同定試料は、SI04(No. 1～13)、SI05(No. 14～18)、SI08(No. 19、20)、SI09(No. 21～28)、SK05(No. 29、30)の主に炉覆土の水洗選別より抽出された種実遺体30点162個である。試料は全て乾燥した状態で、チャック付ポリ袋に入っている。種実同定は全点を対象に実施する。各試料の詳細は、結果とともに表1に示す。

骨同定を実施する試料は、SI09で採取された3試料(No. 1、2、6-2)、SK05で採取された3試料(No. 3、4、5)、SK18で採取された1試料(No. 6)の合計7試料である。試料の詳細は、結果とともに表2に示す。

3 分析方法

(1) 種実遺体同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実を抽出する。種実の同定は、現生標本および椿坂(1993)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付する。また、保存状態が良好な種実を対象として、デジタルノギスを用いて炭化種実の長さ、幅、厚さを計測し、イネ(炭化米)の「粒大(長さ×幅)、粒形(長さ/幅)」（佐藤 1988）、ヒエ属の「穎果のサイズ(長さ×幅)」（那須 2018)を求める。種実以外は、種類と個数を一覧表に併記する。

分析後は、種実を分類群・部位別に容器に入れ、残渣とともに返却する。

(2) 骨同定

試料に泥・砂分が付着する場合は、乾いた筆、あるいは竹串等で除去する。試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から珠・部位を同定する。

4 結果

(1) 種実遺体同定

結果を表1に示す。種実は、4試料より、木本のヤマブドウ1個、草本のイネ1個、ヒエ属2個、タデ属1個、ナス属1個の、計6個が同定された。26試料からは種実が確認されず、炭化材6個、菌核

137個、菌核2個、不明6個、樹皮1個、虫類1個、土粒2個、計155個が確認され、菌核が多い。

種実遺体の保存状態は、SI04の石囲炉焼土層(No. 9)より確認された栽培植物のイネ、炉1層(No. 3)より確認された栽培の可能性のあるヒエ属、SI09炉より確認されたタデ属、ナス属は、いずれも不良で炭化しており、黒色を呈す。一方、SI05石囲炉焼土層(No. 17)より確認されたヤマブドウは、極めて良好で炭化していない。遺跡の立地を考慮すると、ヤマブドウは混入の可能性が高いことから、考察より除外する。

炭化種実の写真を図版1に示し、各分類群の形態的特徴等を以下に記す。なお、学名は、北村・村田(1961)、佐竹ほか編(1981、1982)に依拠した。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

玄米(炭化米)は長さ3.05mm、幅1.82mm、厚さ1.05mmのやや扁平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、内外穎の縫合部痕の縦隆条がある。佐藤(1988)による粒大(長さ×幅)は5.55で極々小型、粒形(長さ/幅)は1.68で短粒に該当する。

・ヒエ属(*Echinochloa*) イネ科

穎果は長さ1.37mm、幅1.11mmと、長さ1.61mm、幅1.18mmの扁平な半楕円体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上は、背面に長さ1.1mm、幅0.8mm程度の馬蹄形、腹面に長径0.4mm程度の半楕円形の胚の凹みがある。表面は粗面。「穎果のサイズ(長さ×幅)」(那須 2018)は1.52 mm²と1.90 mm²であり、いずれも現在の野生種の上限值(2.6 mm²)より小さい。

・タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実は長さ1.49mm、径1.26mmの三稜状偏球体。頂部は尖り、基部は切形で径0.4mm程度萼片が残る。果皮はやや厚く表面は粗面。

・ナス属(*Solanum*) ナス科

種子は長さ1.09mm、幅1.32mmの扁平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、僅かにくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細で浅い星型状網目模様か臍から同心円状に発達する。

試料記載情報		炭化程度			非炭化			種葉以外		
イネ	イヒノミ	タネ	ナス	ヤマブドウ	炭化材	炭化材	炭化材	炭化材	炭化材	炭化材
No.1 19(古野2)										
		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.2 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.3 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.4 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.5 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.6 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.7 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.8 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.9 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.10 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.11 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.12 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.13 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.14 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.15 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.16 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.17 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.18 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.19 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.20 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.21 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.22 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.23 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.24 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.25 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.26 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.27 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.28 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.29 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
No.30 19(古野2)		石炭炉 伊1層								
		石炭炉 伊1層								
合計										

注) 計測はペンタシタノギスを使用した。

表1 種葉同定結果

(2) 骨同定

結果を表2に示す。No.6-2は、焼けていない骨である。破片のため、種類、部位等を明らかにすることができない。試料とされたものは、白～灰色を呈し、極めて微細な粒子である。No.1、3、5、6が礫・土壌、No.2が植物遺体、No.4が礫・土壌と植物遺体である。なお、植物遺体は、現生の可能性もある。

表2 骨同定結果

番号	遺構	層位等	種別	状態等	数量	備考
No.1	SI09	炉堆積土	土壌サンプル	礫・土壌	5	
No.2	SI09	炉		植物遺体	破片	3 現生?
No.6-2	SI09	炉		骨	破片	1
No.3	SK5	P-2	底面7層	礫・土壌	40	
No.4	SK05		底面7層	礫	2	
				植物遺体	破片	10 現生?
No.5	SK05		底面7層	礫・土壌	16 +	
No.6	SK18	P-1	底面(土器内)	礫・土壌	1	

5 考察

種実同定の結果、SI04の石囲炉焼土層より栽培植物のイネ、炉1層より栽培の可能性のあるヒエ属、SI09炉より草本のタデ属、ナス属の炭化種実が確認された。穀類のイネは短粒・極々小型(佐藤 1988)、雑穀類のヒエ属は、現在の野生種の上限值(那須 2018)より小型のサイズであった。イネ、ヒエ属は遺跡周辺で利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。その他、SI09炉より確認された草本のタデ属、ナス属は、遺跡周辺の草地に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。

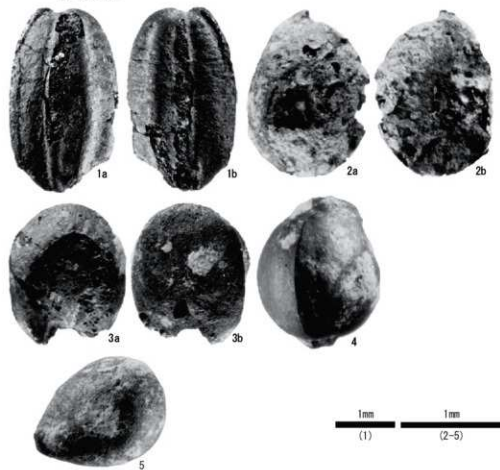
ただし、イネについては、遺構の時期を考慮すると、後代に由来する可能性が高いため、出土炭化米自体の放射性炭素年代測定を実施する等、時代を慎重に検討する必要がある。ヒエ属は縄文時代でも出土例があり、前期から中期にかけて大型化した可能性が指摘されているが(那須 2018など)、イネ同様、出土ヒエ属の年代測定が望まれる。

また、骨同定の対象とされた7試料の内、骨はSI09炉から採取されたNo.6-2の1点のみである。微小な破片で種類、部位を明らかにできず、動物利用に関する情報は得られない。なお、No.6-2は焼けておらず、比較的新しいものが後代に混入した可能性も否定できない。

引用文献

- 北村四郎・村田 源 1961 『原色日本植物図鑑 草本編Ⅱ』保育社 390p
 中山至大・井之口秀希・南谷忠志 2010 『日本植物種子図鑑(2010年改訂版)』東北大学出版会 678p
 那須浩郎 2018 「縄文時代の植物のドメスティケーション」『第四紀研究』57(4) 109-126p
 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・互理俊次・富成忠夫 1981 『日本の野生植物 草本Ⅲ 合弁花類』平凡社 259p
 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・互理俊次・富成忠夫 1982 『日本の野生植物 草本Ⅰ 単子葉類』平凡社 305p

- 佐藤敏也 1988 「弥生のイネ」『弥生文化の研究2生業』雄山閣 p.97-111
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 2018 『草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂—ネイチャーウォッチングガイドブック』誠文堂新光社 303p
- 椿坂恭代 1993 「アワ・ヒエ・キビの同定」『吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」』p. 261-281



1. イネ 玄米 (No. 9: S104 石圍炉 焼土層)
 3. ヒエ属 穎果 (No. 3: S104 石圍炉 炉1層)
 5. ナス属 種子 (No. 25: S109 炉)
2. ヒエ属 穎果 (No. 3: S104 石圍炉 炉1層)
 4. タデ属 果実 (No. 25: S109 炉)

図1 種子試料



1. 礎・土塊 (No. 1: S109炉堆積土土塊サンプル)
 3. 骨 (No. 6-2: S109炉)
 5. 礎 (No. 4: SK05底面7層)
 7. 礎 (No. 5: SK05底面7層)
2. 植物遺体 (No. 2: S109炉)
 4. 礎・土塊 (No. 3: SK5P-2底面7層)
 6. 植物遺体 (No. 4: SK05底面7層)
 8. 礎 (No. 6: SK18P-1底面(土器内))

図2 骨試料

第3節 古野(2)遺跡出土ガラス小玉の蛍光X線分析

筑波大学人文社会系 村串 まどか

1 はじめに

ガラスの成分(化学組成)は、色など見た目の特徴に加えて、別の角度からそれぞれのガラスを特徴づけるものであり、ガラスの生産地域や流通、変遷を考察するための有用な情報となる。これまで古代ガラスを中心に多数の科学的な調査が実施されており、弥生時代から古墳時代にかけて列島内に流通したガラスの理解が深まっている。

青森県内で出土したガラスを対象とした科学的な調査についても、すでに複数の研究者によって行われている(小笠原・市田 1997、藤沢 2004、関根 2007、村串ほか 2017、村串ほか 2019など)。これらの成果をまとめると、末期古墳が築造された時期(7世紀頃から9世紀頃)までに青森県内で見られるガラスの多くは、弥生時代から古墳時代にかけて列島内で流通したカリガラス(K_2O-SiO_2)、ソーダ石灰ガラス($Na_2O-CaO-SiO_2$)、アルミナソーダ石灰ガラス($Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$)とよばれる種類のガラスが多数を占める状況にある。それより後の時代となると、11世紀前半の向田(35)遺跡をはじめ、十三湊遺跡(14~15世紀前半)や浪岡城跡(16世紀)などでもガラス玉が発見されており、科学的な調査が実施されている。これらは鉛Pbを10 wt%以上含む鉛ガラスと、鉛があまり含まれない低鉛ガラスの2タイプがあったことが報告されている(関根 2007)。

本稿では、古野(2)遺跡から出土したガラス玉に対して、ガラスの調査で広く活用されている蛍光X線分析を行った結果を報告したい。

2 分析資料と方法

資料は、図に示した淡青色不透明のガラス玉1点で、古野(2)遺跡R-38グリッドの第1層から出土した。

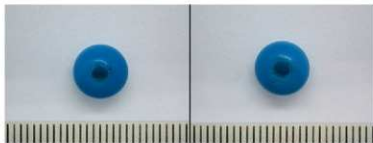


図 古野(2)遺跡出土ガラス玉

分析方法は蛍光X線分析を採用し、測定は可搬型蛍光X線分析装置OURSTEX100FA-IVを用いて行った。本装置は複数のパーツに分割して持ち運ぶことができ、主に電源部、コントローラ部、測定ヘッ

下部、制御用コンピュータで構成される。測定時は試料室を真空にし、照射X線が異なる二つのモードで、3カ所測定を行った。1測定点あたりにかかる測定時間は10分から15分程度である。測定は非破壊で行い、表面の研磨等はせず、測定前にアルコールで表面のふき取りを行った。定量値はガラス標準試料を基に作成した検量線を用いて算出した。

3 分析結果と考察

分析対象資料は、不透明淡青色のガラス玉1点である。このガラス玉は巻き付け法で成形されたものと考えられる。

分析の結果、表に示したように、鉛Pbが少なく、カリウムKやカルシウムCaを含む点から、カリ石灰ガラス($K_2O-CaO-SiO_2$)であることがわかった。カリ石灰ガラスは中国において宋代以降に生産され始め、元代の中国で生産されたガラスの多くはこのガラスだったと考えられている(Gan 2009)。近い時期の例として、北海道松前町福山山下町遺跡から出土したガラス玉がある(佐藤ほか 2018、中井・新井 2018、関根 2020)¹⁾。福山山下町遺跡から出土したガラス玉は計15点の分析報告があり、すべてカリ石灰ガラスで、緑色と桃色の2点を除いて本稿報告資料と同様に淡青色不透明のガラスが多くを占める。これら淡青色のガラス玉はどれも銅Cuを用いて着色されたものと考えられる。なお、同様な淡青色(銅Cu着色)のカリ石灰ガラスは同時期のサハリン島でも出土しており(新井 2019)、このような淡青色のカリ石灰ガラスは北方世界に広く流通していたと考えられる。

表 古野(2)遺跡出土ガラス玉の定量値(単位wt%)

No.	PbO	SiO ₂	Na ₂ O	HgO	Al ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	As ₂ O ₃	Rb ₂ O	SnO	ZnO ₂	SnO ₂	Sb ₂ O ₃
(1)	0.078	77.3	3.9	tr.	1.94	9.75	5.48	0.03	n.d.	0.30	n.d.	0.429	0.189	n.d.	tr.	0.018	0.011	0.06	tr.
(2)	0.075	79.2	2.4	tr.	1.79	9.56	5.31	0.04	n.d.	0.32	n.d.	0.437	0.201	tr.	tr.	0.019	0.010	0.07	tr.
(3)	0.076	79.6	3.5	tr.	1.56	8.86	4.98	0.03	n.d.	0.30	n.d.	0.424	0.191	tr.	tr.	0.018	0.011	0.06	n.d.
Ave.	0.076	78.7	3.3	-	1.76	9.39	5.26	0.03	-	0.30	-	0.430	0.194	-	-	0.018	0.011	0.07	-
Std.	0.001	1.2	0.8	-	0.19	0.47	0.25	0.00	-	0.01	-	0.006	0.006	-	-	0.0002	0.001	0.004	-

SiO₂は100 wt%からの値を引いて算出。n.d.: not detected (検出限界以下) tr.: trace amount (定量下限以下)

4 まとめ

本稿では、古野(2)遺跡から出土したガラス玉1点の蛍光X線分析を行い、その結果としてカリ石灰ガラスであることが明らかになった。また、周辺地域の類例との関連については、北海道松前町福山山下町遺跡やサハリン島などで出土しているものと同様なタイプであることがわかった。近年、北海道以北のガラス玉の調査が継続的に実施されており、どのようなガラスが流通していたか明らかになりつつある。青森県も含めた北方世界におけるガラス玉の流通については、今後注目される内容である。

謝辞

本稿の調査は、弘前大学人文社会科学部の関根達人先生のご協力のもと行いました。また、筑波大学人文社会系の谷口陽子先生には、本稿をまとめるにあたりご助言をいただきました。記して謝意を表します。

註

- 1) 佐藤ほか(2018)では「アルカリ石灰ガラス」と報告されているが、本稿報告例と同様にカリウムKやカルシウムCaを多く含んでいるため、本稿では同様なタイプ(カリ石灰ガラス)として捉えている。

引用参考文献

- 新井沙季 2019 「中近世極東ロシア・北海道の遺跡出土ガラスビーズの考古化学的研究」東京理科大学修士論文
- 小笠原正明・市田健治 1997 「亀ヶ岡遺跡出土のガラス玉の成分分析」『青森県考古学』第11号 p. 35-38
- 佐藤雄生・竹内孝・中村和之 2018 「北海道松前町の福山城下町遺跡から出土したガラス玉の成分分析」『函館工業高等専門学校紀要』52巻 p. 61-65
- 関根達人 2007 「平泉文化と北方交易(1)北奥出土のガラス玉」『平泉文化研究年報』第7号 p. 1-13
- 関根達人 2020 「松前城下出土のガラス玉」『月刊考古学ジャーナル』No. 737 p. 16-20
- 中井泉・新井沙季 2018 「福山城下町正行寺北側地点出土ガラス玉の化学組成分析」『松前藩福山城下町の考古学的研究1—福山城下町遺跡馬形地区正行寺北側地点の発掘調査—』 p. 91-96
- 藤沢敦 2004 「CR法を活用したエミシのガラス玉の研究」『財団法人福武学術文化振興財団歴史学・地理学助成報告書』2004年度 p. 53-57
- 村串まどか・中澤寛将・中井泉 2017 「亀ヶ岡遺跡出土ガラス玉の考古化学的分析とその意義」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第22号 p. 21-33
- 村串まどか・澤村大地・柳瀬和也・馬場慎介・高橋信雄・高橋文明・小笠原善範・中井泉 2019 「可搬型分析装置を用いた東北地方北部出土古代ガラスの化学組成分析」『文化財科学』78号 p. 1-20
- Gan, F. X. 2009 「Origin and evolution of ancient Chinese glass」『Ancient glass research along the Silk Road』 p. 1-40, World Scientific

第4節 古野(2)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

古野(2)遺跡は、青森県下北郡風間浦村大字易国間字古野に所在する。測定対象試料は、竪穴建物跡や土坑等の遺構から出土した炭化物18点である(表3)。試料の時期は、発掘調査時の見解では、SI04、SI05出土試料が縄文時代中期後葉(榎林式)、SI07、SI08、SI09出土試料が縄文時代前期後葉～中期初頭(円筒下層d式～円筒上層a式)、SK05出土試料が縄文時代後期前葉、SK10出土試料が縄文時代後期、SK14出土試料が縄文時代前期後葉～中期後葉(円筒下層d式～榎林式)と推定され、SN02出土試料については中近世の可能性が指摘される。

2 測定の意義

試料が出土した遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する(表1「処理前試料量」)。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する(表1「処理後試料量」)。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 必要量を採取、秤量(表1「燃焼量」)した試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する(表1「精製炭素量」)。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

表1 試料の処理状況(1)

測定番号	試料名	処理前試料量 (mg)	処理後試料量 (mg)	燃焼量 (mg)	精製炭素量 (mg)
IAAA-191429	C-1 SI04 石囲炉	40.78	22.11	4.67	3.16
IAAA-191430	C-2 SI04 石囲炉	40.47	19.38	4.43	2.97
IAAA-191431	C-3 SI04 石囲炉	41.47	22.10	4.49	3.01
IAAA-191432	C-1 SI04	41.49	15.99	4.65	2.95
IAAA-191433	C-1 SI04Pit2	42.00	21.94	4.50	2.87
IAAA-191434	C-1 SI04Pit4	31.32	3.60	1.83	1.20

表1 試料の処理状況 (2)

測定番号	試料名	処理前試料量 (mg)	処理後試料量 (mg)	燃焼量 (mg)	精製炭素量 (mg)
IAAA-191435	C-1 SI05 石囲炉	40.10	18.68	4.59	2.99
IAAA-191436	C-2 SI05 石囲炉	41.95	3.64	1.96	1.27
IAAA-191437	炭化物サンプル SI07 地床炉	36.14	17.44	4.49	3.01
IAAA-191438	C-1 SI08	33.08	21.41	4.50	2.98
IAAA-191439	C-3 SI08Pi3	39.86	25.38	4.42	2.93
IAAA-191440	C-1 SI09 炉	41.73	14.25	4.60	3.15
IAAA-191441	C-1 SI09 炉 3	31.06	18.35	4.50	2.83
IAAA-191442	C-1 SI09Pi3	36.56	3.71	2.01	1.36
IAAA-191443	C-X SK05	35.59	14.05	4.55	2.90
IAAA-191444	C-1 SK10	28.05	14.12	4.69	3.24
IAAA-191445	C-1 SK14	42.17	23.86	4.61	2.86
IAAA-191446	C-X SN02	30.01	18.50	4.71	3.10

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 (Hox II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数、¹⁴Cカウント数、¹³C/¹²C比を表2に示す。

表2 試料のAMS測定状況 (1)

測定番号	試料名	測定回数	¹⁴ C カウント数	¹³ C / ¹² C 比 (%)
IAAA-191429	C-1 SI04 石囲炉	15	114551	1.1093
IAAA-191430	C-2 SI04 石囲炉	15	119886	1.1090
IAAA-191431	C-3 SI04 石囲炉	15	113940	1.1102
IAAA-191432	C-1 SI04	15	120655	1.1112
IAAA-191433	C-1 SI04Pi2	15	119312	1.1139
IAAA-191434	C-1 SI04Pi4	15	120712	1.1143
IAAA-191435	C-1 SI05 石囲炉	15	126738	1.1109
IAAA-191436	C-2 SI05 石囲炉	15	130348	1.1134
IAAA-191437	炭化物サンプル SI07 地床炉	15	140351	1.1108

表2 試料のAMS測定状況(2)

測定番号	試料名	測定回数	¹⁴ C カウント数	¹⁴ C/ ¹³ C比(%)
IAAA-191438	C-1 SI08	16	126411	1.1118
IAAA-191439	C-3 SI08Pit3	15	120871	1.1133
IAAA-191440	C-1 SI09 炉	15	110593	1.1140
IAAA-191441	C-1 SI09 炉3	15	121486	1.1144
IAAA-191442	C-1 SI09Pit3	16	124839	1.1140
IAAA-191443	C-X SK05	15	112898	1.1123
IAAA-191444	C-1 SK10	15	126011	1.1144
IAAA-191445	C-1 SK14	15	121707	1.1122
IAAA-191446	C-X SN02	15	195841	1.1180

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表3)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。なお、暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表3、4に示す。

SI04から出土した試料6点の¹⁴C年代は、4410±20yrBP (C-1 SI04) から4280±30yrBP (C-1 SI04石囲炉) の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料C-1 SI04が3092~2943cal BCの間に3つの範囲、最も新しい試料C-1 SI04石囲炉が2908~2890cal BCの範囲で示される。縄文時代中期中葉から後葉頃に相当し(小林編 2008、小林 2017)、推定される時期を含む結果である。

SI05から出土した試料2点の¹⁴C年代は、試料C-1 SI05石囲炉が4340±20yrBP、試料C-2 SI05石囲炉が4400±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、試料C-1 SI05石囲炉が3010~2904cal BCの間に2つの範囲、試料C-2 SI05石囲炉が3089~2935cal BCの間に3つの範囲で示される。縄文時代中期中葉から後葉頃に相当し(小林編 2008、小林 2017)、推定される時期を含む結果である。

SI07から出土した試料1点、SI08から出土した試料2点の¹⁴C年代は、試料炭化物サンプル SI07地床炉が4410±20yrBP、試料C-1 SI08が4290±20yrBP、試料C-3 SI08Pit3が4300±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、試料炭化物サンプル SI07地床炉が3093~2945cal BCの間に3つの範囲、試料C-1 SI08が2911~2891cal BCの範囲、試料C-3 SI08Pit3が2914~2893cal BCの範囲で示される。縄文時代中期中葉から後葉頃に相当し(小林編 2008、小林 2017)、推定される時期より新しい値となった。

SI09から出土した試料3点の¹⁴C年代は、4680±20yrBP (C-1 SI09Pit3) から4630±30yrBP (C-1 SI09炉) の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古い試料C-1 SI09Pit3が3516~3376cal BCの間に3つの範囲、最も新しい試料C-1 SI09炉が3496~3363cal BCの間に2つの範囲で示される。縄文時代中期初頭から前葉頃に相当し(小林編 2008、小林 2017)、推定される時期と重なる値である。

SK5、SK10、SK14から出土した試料各1点の¹⁴C年代は、試料C-X SK5が4730±30yrBP、試料C-1 SK10が4410±20yrBP、試料C-1 SK14が4670±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、試料C-X SK5が3628~3383cal BCの間に3つの範囲、試料C-1 SK10が3091~2943cal BCの間に3つの範囲、試料C-1 SK14が3509~3373cal BCの間に3つの範囲で示される。試料C-X SK5は縄文時代前期後葉から中期前葉頃、試料C-1 SK10は縄文時代中期中葉から後葉頃、試料C-1 SK14は縄文時代中期初頭から前葉頃に相当し(小林編 2008、小林 2017)、試料C-X SK5とC-1 SK10は推定時期より古く、試料C-1 SK14は推定時期に含まれる年代値となった。

SN02から出土した試料C-X SN02の¹⁴C年代は630±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は1297~1388cal ADの間に2つの範囲で示され、推定される時期に含まれる値である。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian analysis of radiocarbon dates」『Radiocarbon 51(1)』 p.337-360
- 小林謙一 2017 『縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—』同成社
- 小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 「IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP」『Radiocarbon 55(4)』 p.1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 「Discussion: Reporting of 14C data」『Radiocarbon 19(3)』 p.355-363

表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
I AAA-191429	C-1 SI04 石囲炉	SI04-石囲炉 堆積土	炭化物	AAA	-29.97 ± 0.22	4,280 ± 30	58.69 ± 0.18
I AAA-191430	C-2 SI04 石囲炉	SI04-石囲炉 堆積土	炭化物	AAA	-30.26 ± 0.18	4,330 ± 20	58.36 ± 0.18
I AAA-191431	C-3 SI04 石囲炉	SI04-石囲炉 堆積土	炭化物	AAA	-29.15 ± 0.22	4,350 ± 30	58.17 ± 0.18
I AAA-191432	C-1 SI04	SI04 床面直上	炭化物	AAA	-28.27 ± 0.19	4,410 ± 20	57.75 ± 0.18
I AAA-191433	C-1 SI04Pit2	SI04-Pit2 堆積土	炭化物	AAA	-25.90 ± 0.18	4,340 ± 20	58.23 ± 0.18
I AAA-191434	C-1 SI04Pit4	SI04-Pit4 堆積土	炭化物	AaA	-25.50 ± 0.21	4,370 ± 20	58.06 ± 0.18
I AAA-191435	C-1 SI05 石囲炉	SI05-石囲炉 堆積土	炭化物	AAA	-28.57 ± 0.17	4,340 ± 20	58.27 ± 0.17
I AAA-191436	C-2 SI05 石囲炉	SI05-石囲炉 堆積土	炭化物	AAA	-26.34 ± 0.18	4,400 ± 20	57.80 ± 0.17
I AAA-191437	炭化物サンプル SI07 地床炉	SI07-地床炉 堆積土	炭化物	AAA	-28.62 ± 0.19	4,410 ± 20	57.73 ± 0.17
I AAA-191438	C-1 SI08	SI08 床面	炭化物	AAA	-27.75 ± 0.18	4,290 ± 20	58.63 ± 0.18
I AAA-191439	C-3 SI08Pit3	SI08-Pit3: 堆積土	炭化物	AAA	-26.41 ± 0.17	4,300 ± 20	58.57 ± 0.18
I AAA-191440	C-1 SI09 炉	SI09-炉 堆積土	炭化物	AAA	-25.82 ± 0.20	4,630 ± 30	56.20 ± 0.18
I AAA-191441	C-1 SI09 炉 3	SI09-炉 3 床	炭化物	AAA	-25.44 ± 0.18	4,670 ± 20	55.92 ± 0.17
I AAA-191442	C-1 SI09Pit3	SI09-Pit3 堆積土	炭化物	AAA	-25.79 ± 0.23	4,680 ± 20	55.84 ± 0.17
I AAA-191443	C-X SK5	SK5 底部(7層) 図 50-1内	炭化物	AAA	-27.34 ± 0.18	4,730 ± 30	55.52 ± 0.18
I AAA-191444	C-1 SK10	SK10 5層底面	炭化物	AAA	-25.40 ± 0.17	4,410 ± 20	57.75 ± 0.17
I AAA-191445	C-1 SK14	SK14 3層	炭化物	AAA	-27.37 ± 0.18	4,670 ± 20	55.94 ± 0.17
I AAA-191446	C-X SN02	SN02 3層	炭化物	AAA	-22.24 ± 0.19	630 ± 20	92.43 ± 0.23

[IAA 登録番号: #9920]

表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
I AAA-191429	4,360 ± 20	58.09 ± 0.18	4,281 ± 25	2908calBC - 2890calBC (68.2%)	2919calBC - 2881calBC (95.4%)
I AAA-191430	4,410 ± 20	57.73 ± 0.18	4,326 ± 24	3007calBC - 2989calBC (13.0%) 2931calBC - 2898calBC (55.2%)	3012calBC - 2895calBC (95.4%)
I AAA-191431	4,420 ± 30	57.68 ± 0.18	4,352 ± 25	3011calBC - 2978calBC (29.7%) 2966calBC - 2951calBC (10.0%) 2943calBC - 2912calBC (28.5%)	3024calBC - 2905calBC (95.4%)
I AAA-191432	4,460 ± 20	57.36 ± 0.17	4,410 ± 24	3092calBC - 3011calBC (58.2%) 2978calBC - 2966calBC (5.7%) 2951calBC - 2943calBC (4.3%)	3261calBC - 3256calBC (0.8%) 3098calBC - 2924calBC (94.6%)

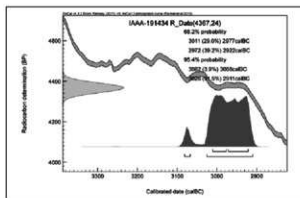
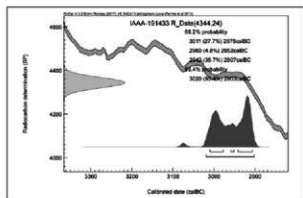
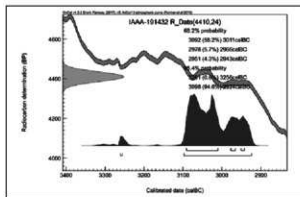
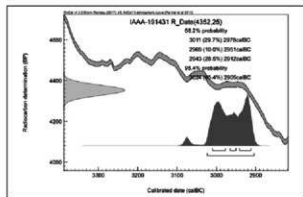
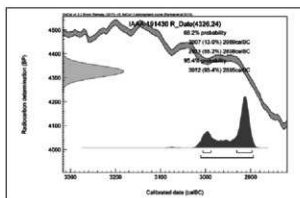
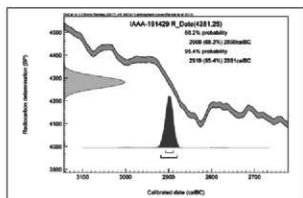
表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (2)

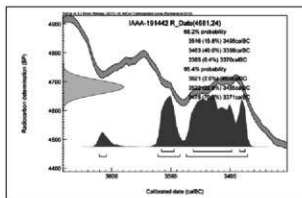
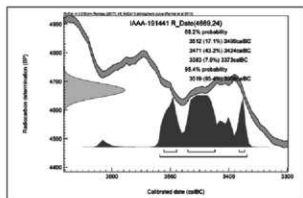
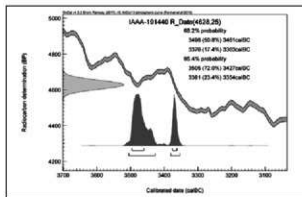
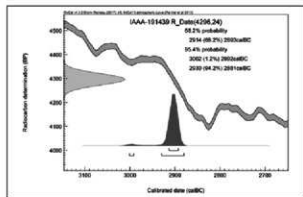
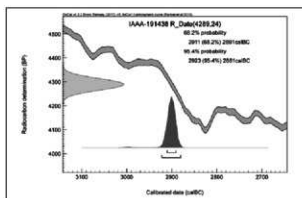
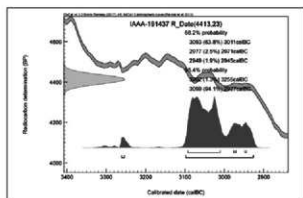
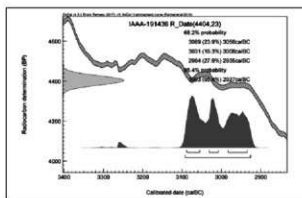
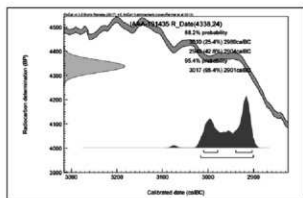
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
I AAA-191433	4,360 \pm 20	58.12 \pm 0.18	4,344 \pm 24	3011calBC - 2978calBC (27.7%) 2960calBC - 2952calBC (4.8%) 2942calBC - 2907calBC (35.7%)	3020calBC - 2903calBC (95.4%)
I AAA-191434	4,380 \pm 20	58.00 \pm 0.18	4,367 \pm 24	3011calBC - 2977calBC (29.0%) 2972calBC - 2922calBC (39.2%)	3082calBC - 3068calBC (3.9%) 3026calBC - 2911calBC (91.5%)
I AAA-191435	4,400 \pm 20	57.85 \pm 0.17	4,338 \pm 24	3010calBC - 2980calBC (25.4%) 2940calBC - 2904calBC (42.8%)	3017calBC - 2901calBC (95.4%)
I AAA-191436	4,430 \pm 20	57.64 \pm 0.17	4,404 \pm 23	3089calBC - 3056calBC (23.9%) 3031calBC - 3008calBC (16.3%) 2984calBC - 2935calBC (27.9%)	3093calBC - 2927calBC (95.4%)
I AAA-191437	4,470 \pm 20	57.30 \pm 0.16	4,413 \pm 23	3093calBC - 3011calBC (63.8%) 2977calBC - 2971calBC (2.5%) 2949calBC - 2945calBC (1.9%)	3262calBC - 3255calBC (1.3%) 3099calBC - 2927calBC (94.1%)
I AAA-191438	4,330 \pm 20	58.30 \pm 0.17	4,289 \pm 24	2911calBC - 2891calBC (68.2%)	2923calBC - 2881calBC (95.4%)
I AAA-191439	4,320 \pm 20	58.41 \pm 0.18	4,296 \pm 24	2914calBC - 2893calBC (68.2%)	3002calBC - 2992calBC (1.2%) 2930calBC - 2881calBC (94.2%)
I AAA-191440	4,640 \pm 30	56.11 \pm 0.18	4,628 \pm 25	3496calBC - 3461calBC (50.8%) 3376calBC - 3363calBC (17.4%)	3505calBC - 3427calBC (72.0%) 3381calBC - 3354calBC (23.4%)
I AAA-191441	4,680 \pm 20	55.87 \pm 0.17	4,669 \pm 24	3512calBC - 3490calBC (17.1%) 3471calBC - 3424calBC (43.2%) 3383calBC - 3373calBC (7.9%)	3519calBC - 3369calBC (95.4%)
I AAA-191442	4,690 \pm 20	55.75 \pm 0.17	4,681 \pm 24	3516calBC - 3495calBC (15.8%) 3463calBC - 3398calBC (46.0%) 3385calBC - 3376calBC (6.4%)	3621calBC - 3609calBC (2.6%) 3522calBC - 3485calBC (22.6%) 3475calBC - 3371calBC (70.2%)
I AAA-191443	4,760 \pm 30	55.26 \pm 0.17	4,726 \pm 25	3628calBC - 3587calBC (30.8%) 3530calBC - 3512calBC (12.1%) 3424calBC - 3383calBC (25.3%)	3634calBC - 3557calBC (42.4%) 3539calBC - 3497calBC (20.8%) 3437calBC - 3377calBC (32.2%)
I AAA-191444	4,420 \pm 20	57.71 \pm 0.17	4,409 \pm 24	3091calBC - 3011calBC (57.7%) 2978calBC - 2966calBC (6.0%) 2951calBC - 2943calBC (4.5%)	3261calBC - 3256calBC (0.8%) 3098calBC - 2924calBC (94.6%)
I AAA-191445	4,710 \pm 20	55.67 \pm 0.17	4,666 \pm 24	3509calBC - 3489calBC (16.3%) 3472calBC - 3426calBC (44.1%) 3382calBC - 3373calBC (7.8%)	3517calBC - 3395calBC (84.3%) 3386calBC - 3369calBC (11.1%)

表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (3)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-191446	590 \pm 20	92.96 \pm 0.23	632 \pm 19	1297calAD - 1315calAD (25.0%)	1290calAD - 1325calAD (37.9%)
				1356calAD - 1388calAD (43.2%)	1345calAD - 1394calAD (57.5%)

[参考値]





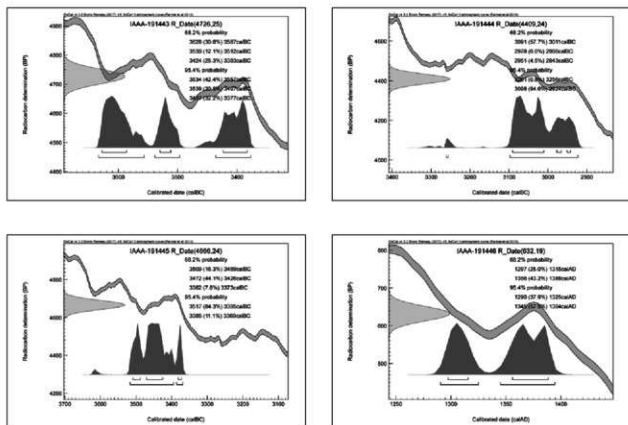


図1 暦年較正年代グラフ(参考)

第5章 総括

第1節 縄文時代前期後葉の土器

今回の調査で最も多く出土した遺物は、縄文時代前期後葉、円筒下層 d 1～d 2 式土器である。本調査で得られた資料は、捨て場のものがほとんどのため、良好な出土状況を持つものが少ない。また、明確に細分できる属性を持たない個体が多くを占める。このため、当該期の土器を型式学的に分析し、本遺跡での時期的な特徴を明らかにしたい。分析の結果、円筒下層 d 式は3段階に分類し、1段階の円筒土器下層 d 1 式（以下、d 1 式）で集落が形成され、最も出土量が多い2段階の円筒下層 d 2 式（以下、d 2 式）で、捨て場が使われ、3段階の円筒土器 d 2 式新段階（以下、d 2 式新）に集落は終息する。

1 分析の方法と対象

学史上、円筒下層 d 式は円筒下層 d 1 式と円筒下層 d 2 式に細分されている。円筒下層 d 式土器の属性は、先行研究により時期差を明確に反映するものと、そうでないものに分けられる。本調査で出土した資料の多くは、後者の属性をもつものが多く、完形個体も少ない。このため、土器の様相をより細かく捉え、集落の変遷等を把握するために、属性分類により土器を型式学的に分類した。まず、先行研究で明らかとなっている属性の変遷を整理し、その他の属性の変遷との相関関係を把握する。次にそれを軸に、他の属性との組み合わせで土器群を分類した。対象とした土器は、本報告で掲載した当該期の土器 306 点である。出土した全ての口縁部片を分析対象としているわけではないが、復元個体は全点掲載、破片資料については、図 121 の属性を持つ個体の多くを掲載しているため、分析の蓋然性は高いと考える。

対象の属性は、ある程度普遍的かつ型式学的に変化するものである必要がある。当該期これを満たすのが、「口縁部形態」、「口縁部文様」、「器形」、「地文」、「貼付」の5種類である。区画部の微隆帯については、重要な属性と考えられるが、隆帯の有無を判別することが困難なものも一定数あることから今回は除外した。各属性と分類基準を図 121 に示した。

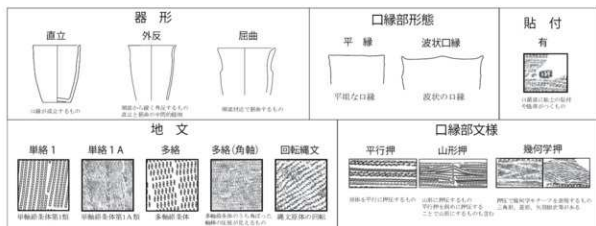


図 121 各属性の分類基準

2 各属性の新旧関係

(1) 変遷が明らかな属性

先行研究を参考に、変遷が明らかな属性を整理し、それを軸に他の属性の変遷を捉えていく。対象とする属性は貼付と口縁部形態である。濱松優介・折登亮子(2020)では、青森県域の円筒下層d1～上層a1式土器(以下、a1式)の属性を網羅的に分析しており、特定の属性の変遷を捉えることができる。そこで示された「表2 属性表(濱松・折登 2020)」から、時期ごとの個数を比較した。また、茅野嘉雄(2018)は、当該期土器の変遷を各地域で分析し、その特徴を各属性でとらえており、併せて参考にした。

①貼付

濱松・折登(2020)では、口縁部文様(隆帯、伏状貼付とボタン貼付に分類されているが、本遺跡では該当する個体数が少ないため一括して扱う。「表2 属性表(濱松・折登 2020)」によると、d1式は5点、d2式は55点、d2式～a1式は167点である。この属性がd2式から増加することがわかり、その傾向は青森県域全体で捉えられるとしている。茅野(2018)でも同様の傾向が述べられている。

②口縁部形態

濱松・折登(2020)では、平縁、突起口縁、波状口縁(2種類に細分)しているが、本遺跡では、平縁と波状口縁(突起口縁を含む)、2種類に分類したため、併せて集計した。「表2 属性表(濱松・折登 2020)」によると、d1式は平縁が248点、波状口縁が119点、d2式は平縁が92点、波状口縁104点、d2式～a1式は平縁が93点、波状口縁が158点である。新しくなるにつれ波状口縁が増加し、新相の属性と捉えられる。

(2) 各属性の変遷

設定した属性のうち、地域差が認められたり、時期差を表しにくい属性の変遷を把握する。ここでは、①貼付、②口縁部形態に伴う他の属性の数をカウントし、その多寡で、変遷をとらえる。

①貼付(図122)

貼付有りの個体に伴う各属性の個体数をカウントした(図122)。貼付有りは、d2式から増加する属性であり、伴う個体数が多いほど新相の属性と考えられる。器形は直立→外反→屈曲の順、地文は多絡→一回転縄文の順、口縁部文様は平行押→山形押の順で伴う個体数が多く、その変遷が想定できる。

②口縁部形態(図123)

口縁部形態は、平縁→波状口縁の変遷が考えられる。口縁部形態

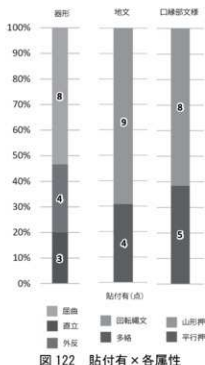


図122 貼付有×各属性

に伴う各属性の数をカウントした。なお、口縁部文様は口縁部に沿って押圧されるため、形態に規定されやすく、波状には山形、平縁には平行が多く用いられる傾向があるため、この属性間の相関関係は対象外とした。

器形は、平縁では直立が70%以上を占めるのに対し、波状口縁では48%と減少し、外反と屈曲の割合がともに増える。直立→外反・屈曲の変遷がわかる。

地文は、平縁では、単絡1・1A類が37%、多絡（角軸含）は54%、回転縄文は9%である。波状口縁は、単絡1が14%に大幅に減少し、多絡（角軸含）が55%と若干減り、回転縄文は31%と大幅に増加する。ここから、単絡1→回転縄文の変遷を捉えることができ、多絡は変化しないため、長期間を通じた属性と考えられる。

④口縁部文様（図124）

地文との相関関係からは、単絡1には平行押が72%、山形押が25%、幾何学押が3%が伴う。多絡には平行押58%と減少し、山形押34%、幾何学押31%と増加する。回転縄文は平行押が70%、山形押が25%ある。

地文は貼付の分析で多絡→回転縄文、口縁部形態の分析で単絡1→回転縄文の変遷を捉えている。地文との相関関係では、単絡1と多絡に比べ回転縄文の個体数が極端に少ないことに注意が必要であるが、この分析から平行押→山形押・幾何学押が変遷が想定できる。

器形との相関関係からは、直立には、平行押75%、山形押21%、幾何学押4%が伴う。外反には平行押36%、山形押50%、幾何学押14%が伴う。屈曲には平行が44%、山形押50%、幾何学押6%が伴う。器形は、これまでの分析から、直立→外反→屈曲の変遷が想定されており、これを踏まえ、平行押→山形押・幾何学押の変遷が想定できる。

文様は、器形、地文との相関関係から、平行押→山形押・幾何学押の変遷が想定できる。幾何学押の位置づけについては、点数が少なく不明確だが、多絡地文や外反器形に伴うものが若干多い。

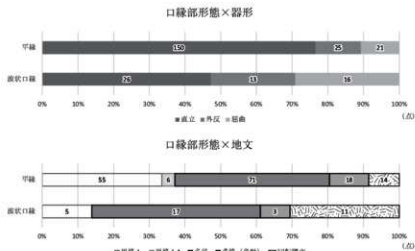


図123 口縁部形態×器形・地文

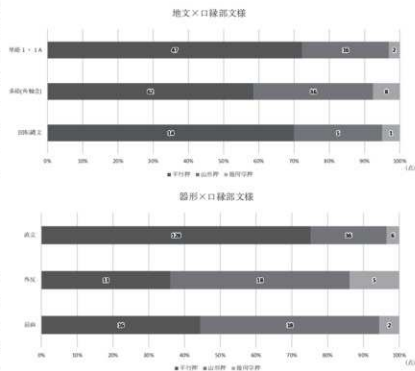


図124 器形・地文×口縁部文様

3 まとめ

(1) 属性の変遷と段階の設定 (図 125)

上記の分析を踏まえ、器形は、直立→外反→屈曲、口縁部形態は平縁→波状口縁、口縁部文様は平行押→山形押・幾何学押、地文は単絡1・1A→多絡(角軸含)→回転縄文、貼付は無→有の順で新しいことが確認された。各属性の変遷を図 125 に示し、1段階～3段階に分類した。1段階は、直立、平縁、平行押、単絡1が主体的で、山形押、多絡が伴う。

2段階は、直立、平縁と波状口縁、平行押と山形押、多絡が主体的である。1段階の特徴を引継ぎながら、新しい属性の外反・屈曲、多絡、山形押、波状口縁が加わる様相である。

3段階は、屈曲、波状口縁、平行押・山形押、回転縄文、貼付文が主体的である。1段階の様相は消え、新しい属性に変化する。貼付文や回転縄文といった属性が増加する。

土器型式との併行関係については、上記の特徴を整理すると、濱松・折登(2020)の1～3段階に併行し、1段階は円筒下層 d1 式、2段階は円筒下層 d2 式、3段階は円筒下層 d2 式新段階に位置づけられる。なお、3段階は、濱松・折登(2020)では、d2 式→a1 式に位置づけられているが、今回の発掘調査では、明確な a1 式の土器が出土していないため、2段階(d2 式)より新しい d2 式新に位置づけたい。

	器形			口縁部形態		口縁部文様				地文		貼付	型式	古野(2)遺跡	
	直立	外反	屈曲	平縁	波状口縁	平行押	山形押	幾何学押	単絡1・1A	多絡(角軸含)	回転縄文	有		遺物集中区	捨て場
1段階	↓	⋮	⋮	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓		円筒下層 d1式	遺物集中区 SK03 SK21	↓
2段階	↓	⋮	⋮	↓	↓	↓	↓	⋮	↓	↓	↓		円筒下層 d2式	SI03 SI09 SK16	↓
3段階	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	↓	円筒下層 d2式 新段階		⋮

図 125 各段階とその属性

(2) 古野(2)遺跡における縄文時代前期後葉の土器様相 (図 126)

今回の調査で検出した当該期の土器を前述した3段階に型式分類した(図 126)。1段階(1～10)は、円筒下層 d1 式に帰属する。2段階の次に出土量が多く、遺構は遺物集中区、SK02、SK21 が本段階に帰属し、捨て場からは次段階の次に多く検出されている。器形は直立が主体的だが、緩く外反する(3・7)のものもある。口縁部は平縁がほとんどである。口縁部文様は、平行押(4・6・7～10)が主体的で、山形押(1～3)もある。口縁部が次段階より狭く、山形押圧文様も山が低い。地文は単絡1(1～4・8～10)の方が多絡(6・7)より多く、単絡1A(4)もある。区画部は微隆帯がつくものが多いが、細いものや、上から原体を押圧するためわかりにくいものもある。胴部が四角い器形(5)は2点出土しており、本段階が想定できる。

2段階(11～22)は、円筒下層 d2 式に帰属する。出土量が最も多い。遺構は SI03、SI09、SK16 が本段階に帰属し、捨て場から最も多く出土した時期である。器形はバリエーションが増え、直立

(13・16・17・20・21)の他に、外反(11・12・14・19・22)や、屈曲(15・18)もある。1段階より大型の個体が増える。口縁部は平縁のほか、波状口縁が出現(19～21)する。口縁部は、幅が広がり、平行押(13・17・20・22)のほか、山形押(12・14・15・19)の割合が増え、幾何学押(16)も施文される。口縁部に押圧や刺突(13・17)といった付加文様がつくものもある。区画部は微隆帯が多く、前段階より幅広になる。地文は、多軸が増加し、単絡1(12・18・22)が客体的になり、回転縄文(17)は少数である。

3段階(23～37)は、円筒下層d2式新段階に帰属する。出土量は最も少ない。帰属遺構はないが、捨て場からも出土している。器形は、屈曲(23・24・26・27・30～33)や、外反(28・29)が主体的で、直立(25・34～35)もある。2段階より小型のものが多い。属性の斉一性が弱まる。口縁部はより幅広になり、貼付や隆帯(27・28・30～33・35・37)が付くものが現れる。文様は、平行押(24・27・30・32・33)、山形押(23・29・35・37)、幾何学押(25・26)とバリエーションが増えるため分類が難しい。透かし穴が入る(36・37)ものもある。地文は多軸(24・25・29・35・32)のほか、回転縄文が多くなる。波状口縁、無文の小型個体(34)もある。

異系統のもの(38・39)は2点出土した。いずれも鋸歯文が特徴的で南東北に分布する大木6式系が想定できる。

本調査で検出された遺構を1～3段階に分類すると、1段階は遺物集中区、SK02、SK21、2段階はSI03、SI09、SK16が位置づけられる。捨て場は、1段階から使われ、2段階がピーク、3段階は低調になる。このことから、本遺跡の活動は2段階が最盛期を迎えることがわかる。

下北半島では、同時期の集落遺跡として、沢ノ黒遺跡や熊ヶ平遺跡などがある。それを対象とした分析である、茅野(2018)や濱松・折登(2020)と比較しても、分析結果は概ね親和的であり、本資料は、下北半島の円筒下層d1～d2式のまとまった量の出土例として評価できる。

(長谷川)

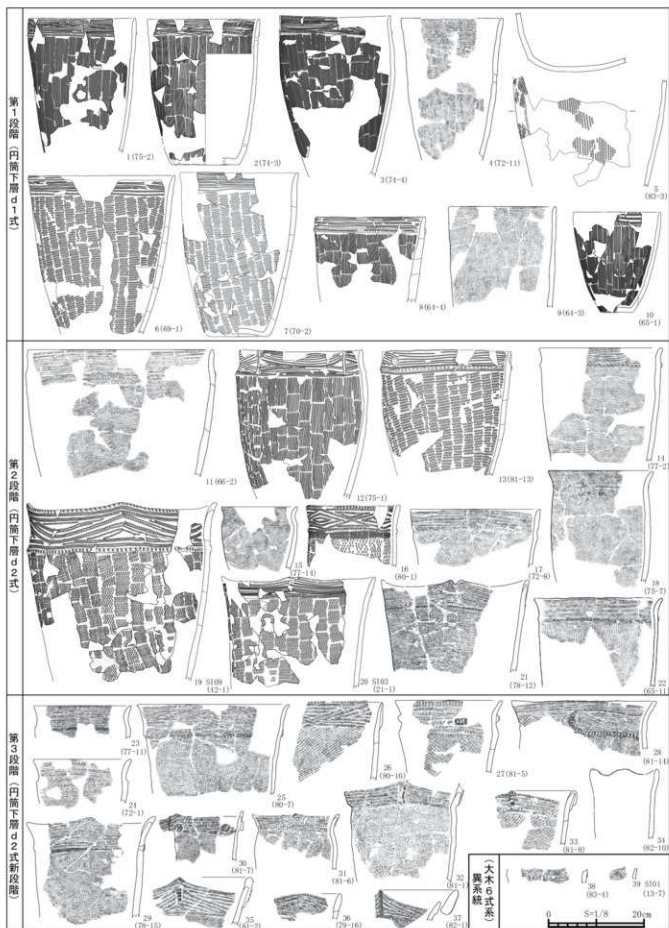


図126 古野(2)遺跡土器集成図1(前期後葉)

第2節 縄文時代中期～晩期の土器

今回の調査では、縄文時代前期後葉、中期後葉～後期前葉、後期後葉、晩期前葉、晩期後葉の土器が出土した。本調査で検出された縄文時代中期～晩期土器の変遷を図127に示し、時期ごとにその特徴を把握する。

1 中期

(ア) 中期後葉（榎林式）（図127-1～12）

前期後葉の次に出土数が多い。器種は深鉢（1～9）、小型深鉢（10）、壺（11・12）がある。全体的に破片資料が中心で、文様構成全体がわかるものは少ない。深鉢は、縦の弧状文（1・2）、重層弧線文（3・4）、渦巻状モチーフ（6）に分類できる。遺構外出土土器の文様モチーフごとの数は、重層弧線文（11点）、渦巻状モチーフ（11点）が多く、縦の弧状文（2点）が少数である。隆線で文様が付き、頸部で大きく括れるもの（9）は1点のみ出土した。口縁部は波状口縁で口唇部に渦巻状の沈線が入るものが多い。小型深鉢は口縁部が開く器形で胴部に渦巻文が入るものが多い（10）。壺（11・12）は無文で、胴部は細長く、11には取っ手が付く。

榎林式の細分について、小保内裕之（2008）では、3段階に分類されており、重層弧状文は榎林2式、壺は比較的新しい器種で、榎林3式に位置付けられそうである。

(イ) 中期末葉（大木10併行期）（13・14）

SK03から出土した2点のみである。土坑底面から並んで出土したため、同時期のものと言える。13は、完形土器でR L斜行縄文を磨り消すように波頭文がつく。14は口縁部が欠損し、単軸絡条体第1類が胴部につく。器形は口縁部で緩く括れ、口縁内部にヒレ状突起が打つく。

3 後期（図127-15～21）

(ア) 後期前葉（十腰内I式古段階）（15～18）

本段階の資料は遺構外から出土した。15・16は、深鉢で波状口縁、頸部に連続する楕円文がつく。胴部の網目文は、15は沈線技法で16は単軸絡条体第5類の回転で施文される。関根達人・児玉大成（2013）は、網目文について、津軽地方では沈線手法が第2段階まで引継がれ、南部地方では、絡条体による手法は第2段階まで引継がれるといった地域的な特徴があると指摘している。浅鉢（17）は入組文が想定でき、壺（18）には渦巻文が貼付される。

(イ) 後期前葉（十腰内I式新段階）（19・20）

SK05から完形土器が2点（19・20）、遺構外からわずかに出土した。SK05から出土した19・20は、床面から並んで出土しており一括性が高い。いずれも、5単位の波状口縁で、口縁部で括れる。文様は、施文手法や、文様構成が異なる。19は柳状工具で描いたのちに沈線で縁取りして施文されており、波状文が2段で構成される。20は、沈線文で連続した弧状の下に縦に波状文が展開する。

(ウ) 後期末葉(「十腰内VI群」前後)(21)

遺構外から1点出土した。台付鉢で、口縁部に肥厚する突起がつく。頸部には沈線に区画された刻目の列が2段入る。外面にはタール状の付着物がわずかにある。

4 晩期(図121-22~39)

(ア) 晩期前葉(大洞B2式)(22・23)

遺構外から2点出土した。22の深鉢の口縁部文様は入組三叉文である。23は頸部~胴部の破片で、頸部で括れ、頸部文様は入組三叉文である。

(イ) 晩期中葉(大洞C1式)(24~34)

遺構外からの出土で、円筒下層d式、榎林式に次いで3番目に多い。器種は、粗製深鉢、深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、壺がある。関根達人(2012)の下北半島の晩期土器編年の晩期3期(大洞C1式併行)に相当し、そこで示された当該期の基本的な器種セットが揃う。粗製深鉢(24)は口縁が内湾し、地文はLR斜行縄文である。鉢(25~29)は、頸部で括れる器形で、口縁部は小波状または突起口縁である。頸部文様は、沈線の間に刺突列がめぐる。浅鉢(32・33)は配置文と充填文が施文される。32・33は外面に黒漆と思われる付着物がある。胴部文様は、配置文が2単位の点対称に配置される構造だが、不完全な点対称である。33は口唇部に浮彫状の文様が入り、32より直線的な器形であり、相対的に33のほうが32より新しい。壺(34~36)は頸部に刺突列が入る。34は球胴形の器形で、口縁部に突起が付き、前面に斜縄文が施文される。

(ウ) 晩期後葉(大洞A1~大洞A'式)(37~39)

遺構外から3点出土した。大洞A1式は、1点(37)ある。壺の頸部片で、流水工字文と考えられる文様が2段にわたって施文され、上段はネガ文様、下段はポジ文様である。大洞A1式と考えられる。大洞A2~A'式は1点(38)ある。鉢の口縁部~胴部で、口縁部に二個一對の突起が付き、頸部で緩く外反し、頸部文様は匹字文が想定できる。大洞A'式は1点(39)ある。浅鉢の口縁部~頸部片で、頸部文様は変形工字文が想定される。

(長谷川)

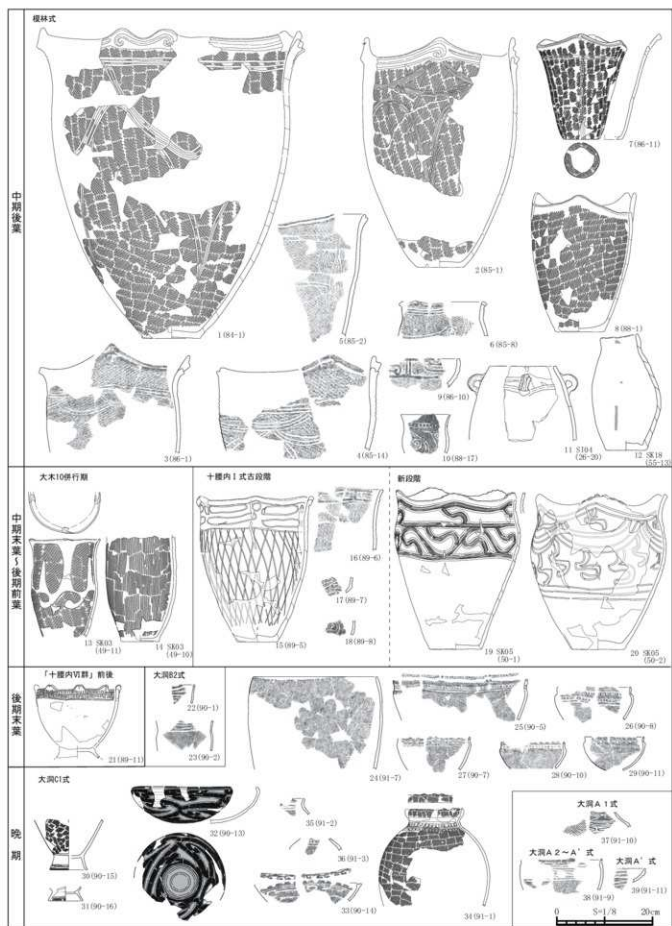


図127 古野(2)遺跡土器集成図2(中期~晩期)

第3節 土製品・石製品

1 土製品 (図 128)

土製品は55点出土した。内訳は、土偶1点(27)、ミニチュア土器1点(34)、土器片利用土製品(円形)23点(1~23)、土器片利用土製品(三角)5点(28~32)、不明土製品1点(35)、土器片加工品4点(24~26・33)、焼成粘土塊20点である。遺構内出土は不明土製品1点(35)、焼成粘土塊6点、土器片利用土製品(円形)6点(9・10・13・18・17・22)で、他は遺構外から出土した。このうち、土器片利用土製品と土器片加工品、土偶については別項を設け詳述する。

ミニチュア土器(34)は、遺構外から1点出土し、深鉢の底部で帰属時期は不明である。

不明土製品(35)は、SI01から1点出土し、棒状で両端が欠損している。土偶の可能性もある。帰属時期は不明である。

(1) 土器片利用土製品 (1~23・28~32)

土器片利用土製品は円形と三角形に分類でき、前者は円筒下層d2式、後者は榎林式に位置づけられる。円形は23点出土した(1~23)。胴部地文は多軸絡条体が多く、単軸絡条体第1類は3点(3・4・15)、単軸絡条体第1A類は1点(5)である。地文に多軸絡条体が多いことから、円筒下層d2式の可能性が高い。加工の種類で分類すると、穿孔有が2点(1・2)、穿孔途中が2点(3・4)ある。4は穿孔途中が2箇所ある。側面溝があるものは1点(5)である。側面に擦り加工が入るものが18点(1~18)、ないものが5点(19~23)ある。使用部位は胴部片が20点(1~20)、底部片が3点(21~23)ある。口縁部を使用するものはなく、意図的に地文の部分を使用していることが示唆される。側面に施す溝加工(5)は、これまで着目されることが少なかった属性で、今後注意することで類例が増える可能性がある。

三角形のものは、5点出土した(28~32)。文様から榎林式と考えられる。側面に擦り加工を施すものは4点(28・29・31・32)ある。28が最も正三角形に近く、他は不整形である。使用部位はいずれも胴部片で文様部分を使用している。弧状文系の文様は2点(28・32)、渦巻文は2点(29・30)、方形の文様は1点(31)である。いずれも文様モチーフがわかるように、切り取っている可能性がある。

(2) 土器片加工品 (24~26・33)

土器片加工品は、土器片を打ち欠くなどの加工を施したもので、土器片利用土製品の素材片や未成品が想定できる。円筒下層d2式が3点(24~26)と榎林式が1点(33)ある。

円筒下層d2式は、打ち欠きを施すものと擦り加工を施すものがある。打ち欠きは2点(24・25)ある。いずれも口縁部~胴部片である。打ち欠き加工が全周し、凹凸になる。擦り加工は1点(26)ある。擦り加工は2カ所で行われ、端部は擦り後、中央部は擦り途中である。

加工工程がわかる資料が水上(2)遺跡で出土している(青森県教育委員会2017)。水上(2)遺跡の製作工程と時期変遷を図129に示した。これと比較すると、擦り加工(26)は、「②切り取った素材の分割」工程に該当する。円筒下層d2式の2点(24・25)は、完成形は「石斧刃形指向(図129-5-199-3)」で、敲打分割後で研磨整形前の状況が想定できる。榎林式のもの(33)

については、短辺が三角形の土器片利用土製品（28）の辺長と近似するため、この素材片を想定したい。また、(33)に施される文様は有棘渦巻文が想定でき、文様モチーフの残存がよい。渦巻文のモチーフがわかる個体は少数の出土であるため、選択的に文様モチーフが珍しいもの等の文様部分を製品に加工しているのかもしれない。

土器片加工品は、これまで注目されることが少なかった器種であるため、類例は少ないが、これまで土器片と報告されている資料からも見出すことができそうであり、今後類例が増加すると思われる。

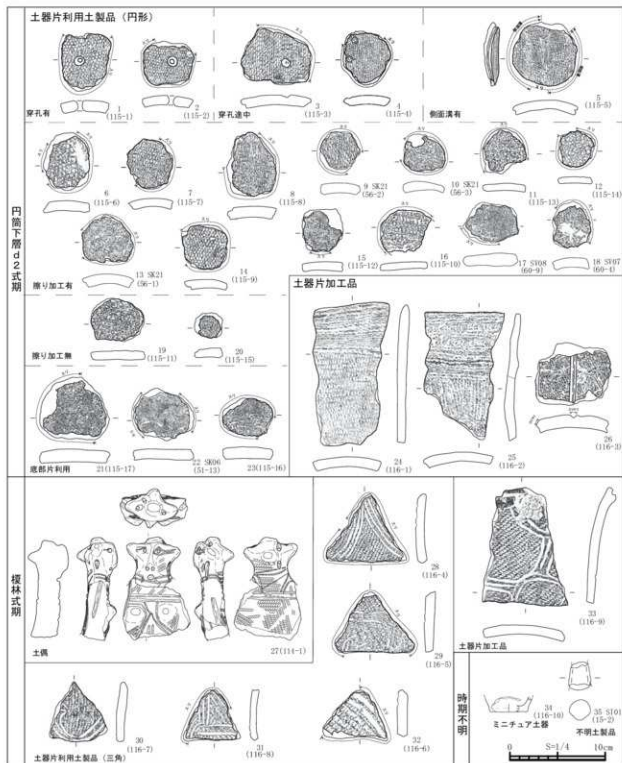


図128 古野(2)遺跡土製品集成



図 129 水上(2)遺跡の土器片利用品

(3) 土偶 (図 128-27)

捨て場から1点出土した。頭部から胴部が残存する。穿孔は後頭部に3箇所、頭部横の左右に各1箇所、両腕に各1箇所入る。頭頂部には突起が付く。顔は目・鼻・口が刺突で表現され、胸には乳房が付く。地文はLR回転縄文が様々な方向で施文され、その上に沈線文が入る。目を取り囲むような文様、胸に横沈線、乳房の間を弧状文、肩部に表裏にわたり弧状文が入る。文様は、描画時のゆれやナゲ消し(右目周辺)、擦り消しや書き足しがあり、乳房も対称性が弱い。頭部と胴部が頭部で折損

しているほか、腕部、下半身は見つかっていない。

縄属時期については、類例が多く出土している水上(2)遺跡(青森県教育委員会 2017)から検討する。水上(2)遺跡では、土偶を地文と文様から分類しており、本資料の類例は「土偶E類b・F類a、E類c・F類b」が該当する(図130)。文様モチーフで分類しており、「E類b・F類a」は、「沈線文が主文様の一群で、剣菱付渦巻き文がみられるもの」で、「E類c・F類b」は、「沈線文が主文様の一群で、枝分かれ状文様がみられるもの」である。本資料の文様モチーフは、口の下の文様は枝分かれ状文様、背部や乳房下の文様は剣菱付渦巻き文が想定できる。いずれの文様も不明瞭で分類が困難である。また、「E類b・F類a」の形態の特徴として、頭頂部に皿状の凹みがあることや、棒状工具により顔を表現する手法が挙げられており、本群に分類できる。各分類の時期について、体部文様や出土状況から、「E類b・F類a」は榎林式、「E類c・F類b」は円筒上層e式～榎林式に位置づけられている(青森県教育委員会 2017)。これに準拠すると本資料は、榎林式に位置づけられる。古野(2)遺跡では、榎林式が捨て場の同グリッドから多量に出土する一方、円筒上層e式の遺物は1片しか出土していないため、榎林式に帰属すると可能性が極めて高い。

下北半島の同時期の土偶については、折登亮子(2019)の集成によると、瀬野遺跡、最花貝塚に次ぐ3遺跡、4点目であり、図131に示した。瀬野遺跡例(131-2・3)は、いずれも遺構外からの出土と思われる。2は胸部片で、背面下部(臀部)に向かって末広がりになる。文様は、前面に弧状、渦巻文、背面は渦巻文、方形文が縄文地に描かれる。下部と側部に刺突が入る。3も胸部片で臍が付き2より薄手である。文様は地文が縄文で、前面に縦の波状文、横沈線文が弧状文の区画内に入る。背面は、縦の弧状文、斜めの弧状文が施文される。最花貝塚例(131-4)は頭部から胸部、腕部が残存する。頭部は立体的で、後頭部に突起がのびる。顔は隆帯で表現されている。乳房が付き、縄文地に渦巻文や半円状の文様が施文される。後頭部に突起が付く。このうち、文様や形態から2点(131-2・4)が水上(2)遺跡分類で「F類a」に分類でき、榎林式に位置づけられる。3は、貫通孔はないが、沈線のモチーフ等から「E類d」(沈線が主文様で体貫通孔がみられるもの)に分類できそうで、円筒上層e式の可能性が高い。

本資料(131-1)と比較すると、下半身は胸部が若干臀部に向かって開く形態であり、131-2のような形態が、腕部は、131-4のように左右に直線的に開く形態が想定できる。

中期後葉の土偶は、水上(2)遺跡や下北半島の事例から、文様モチーフや形態の個性差が大きいことが指摘できる。本資料(131-1)も同様で、文様描画時に書き足しや揺れ、一部がナゲ消しされたり、後頭部の穿孔や乳房が非対称になっている。

円筒土器文化の集落が密集する地域では、中期中葉から後葉にかけて、集落が拠点集落周辺に収斂する様相が青森市域や八戸市域(三内丸山遺跡保存活用推進室 2016)、道南(第5章6節)で確認されている。また、中期後葉の榎林式以降は土偶の数が急激に減ることが指摘されている(小笠原2002)。このような状況と、本資料のように製作にゆれが生じていたり、文様モチーフが多様になることに何らかの関わりがあるのかもしれない。下北半島は土偶の出土例が少なく、その位置づけは難しいが、今後、他の遺物や集落動態を併せた広範囲での分析や検討が必要である。

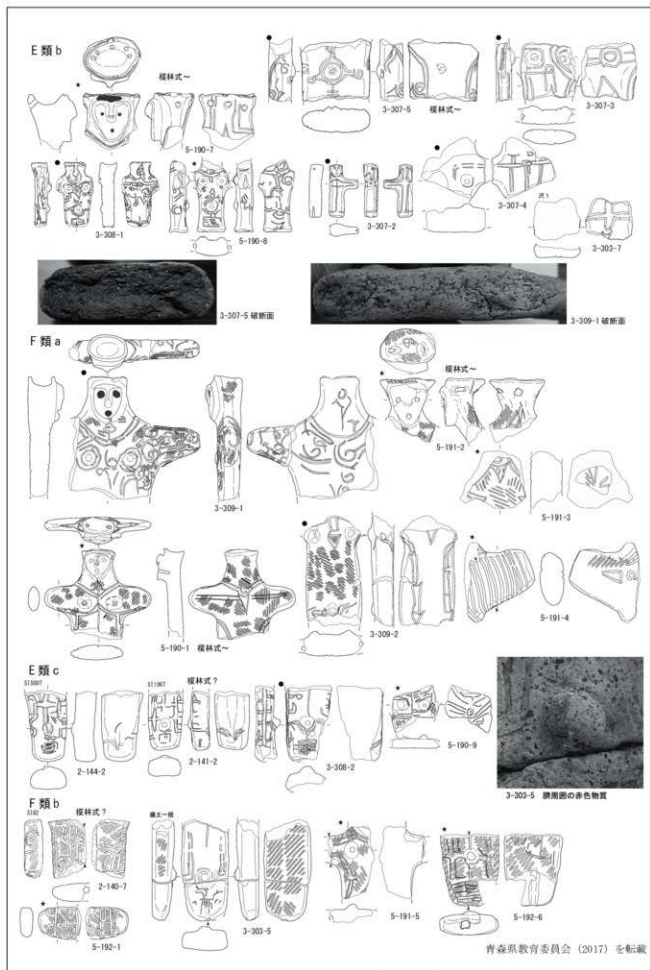


図 130 水上(2)遺跡の中期後葉の土偶



図 131 下北半島の中期後葉の土偶

2 石製品

石製品は 13 点出土した。内訳は、玦状耳飾 1 点、三角形岩板 1 点、不明石製品 1 点、棒状礫 10 点である。このうち、石材を加工することで製品としたものは、玦状耳飾 1 点のみである。他は、自然礫の転用品（搬入礫）もしくは、自然礫に若干の加工を加えたものである。このうち、玦状耳飾については別項を設け詳述する。三角形岩板は流紋岩の板状節理の一部を加工している。不明石製品は、自然に穿孔が入った安山岩の一部に敲打痕、擦痕が入る。棒状礫は 10 点掲載し、いずれも流紋岩の柱状節理である。1 点は SI04 から出土し、他は遺構外から出土した。このうち、2 点が折損、1 点が二次加工あり、1 点が被熱している。

(1) 玦状耳飾 (図 132)

1 点出土した (132-1)。斜面捨て場からの出土である。三角形の半分が欠損する。研磨は丁寧で光沢があり、側面は「く」字形を呈し、成品と考えられる。二次穿孔があるが、穿孔途中の窪みもある。二次穿孔途中で破損してしまった可能性がある。石材は肉眼により橄欖岩に近い珪質頁岩と鑑定された。

玦状耳飾の先行研究は、数多くあるが、水ノ江和同 (2019) は最新のデータをもとに全国的な研究を行っているため、そこで資料の時期を位置づけたい。水ノ江 (2019) の分類基準に準拠すると、本資料は平面形態は三角形、断面形態は扁平となる。編年については、北海道で円筒下層 b・c ～ 円筒下層 d 式に三角形になり、地理的な関係から青森県域では円筒下層 d ～ 円筒上層 a 式に三角形が分布するとされている。本資料は平面形態が三角形なため、円筒下層 d 式に位置づけられる。今回の調査では、円筒下層 d 式期は、遺構や遺物が検出されている時期で親和的である。

下北半島の玦状耳飾との比較については、2012 年頃までの玦状耳飾が集成されている、福田友之 (2014) を参考に行う。青森県域の玦状耳飾は、33 遺跡 72 点の出土で、このうち三角形が 29 遺跡 58 点と多くを占める。このうち下北半島のは、6 遺跡、12 点である。

福田 (2014) に涌館遺跡 (132-7) を追加して、下北半島における玦状耳飾を図 132 に示した。平面形態については、本資料の長短比は、半分のみが残存のため参考値だが、縦・横幅比は 1.12 ほどと、僅かに縦長の三角形が想定できる。福田 (2014) の分類に準拠すると「IV 類 2」のほぼ三角形に近いものとなる。

形態は、正三角形に近いものが最も多い(132-3~6・8~10)。本資料に近い形態、僅かに縦長の三角形の形態は、沢ノ黒遺跡例(132-2)、熊ヶ平遺跡例(132-12)である。縦長三角形のものは(7・11)の2点ある。このうち、古野(2)遺跡の最も近くに所在する、沢ノ黒遺跡例(132-2)は、二次穿孔の位置や形状が近似する。大きさはわずかに沢ノ黒遺跡例のほうが大きい。大きさは、熊ヶ平遺跡例(132-12)と近似する。

石材については、片岩は2点(132-2・3)、滑石は1点(132-4)、軟玉3点(132-5~7)、ヒスイ2点(132-8・9)、蛇紋岩1点(132-10)、玉髄1点(132-11)、珪質頁岩1点(132-12)、橄欖岩に近い珪質頁岩1点(132-1)である。古野(2)遺跡に形態が似るものについて、沢ノ黒遺跡例(132-2)は片岩で、熊ヶ平遺跡例(132-12)が珪質頁岩で本資料と同じ石材である。

古野(2)遺跡例は、ヒスイや軟玉等を素材としたものより小型で、片岩や珪質頁岩のものと同形態が似る。これは、石材や色調により、大きさ、規格等の作り分けの可能性を示唆する。だが、石材については、肉眼鑑定や経験に基づく同定では客観性が乏しいとされる(水ノ江2019)。今後は、自然科学分析による石材分析を含めた形態等の多角的な検討を広範囲で行う必要がある。

(長谷川)

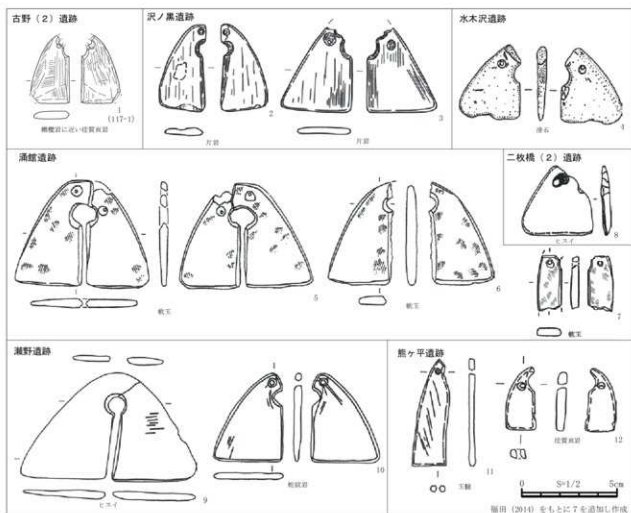


図 132 下北半島の球状耳飾

第4節 剥片石器

剥片石器は、総数で16,922点(134,632.5g)出土した。遺構内出土が3,466点(20,285.5g)・遺構外が13,456点(114,346.9g)である。遺構内出土のものは重量比で17.7%程と、ほぼ遺構外から出土している。本遺跡の主要な時期は縄文時代前期後葉と中期後葉であるが、両時期の土器は層位からは明確に区分できず混在している。床面出土以外の遺構内出土土器や石器も同様である。

石鏃は総数で156点出土した。先端部片や茎部のみである9点を除き、器形の判断できる147点では、無茎円基1点(92-2)・平基1点(54-3)・凹基3点(60-8・92-1等)・尖基18点(14-1等)、有茎平基11点(92-5等)・凹基2点(17-7等)・尖基111点(14-3等)に分類でき、無茎23点(16%)、有茎124点(84%)と有茎鏃が卓越する。また、薄く剥片の側縁のみに二次加工を施したものの(14-1等)、二次加工の剥離が器体中央まで伸びるように丁寧に施され、断面が厚みのある凸レンズ状となるもの(14-2等)とがある。14-9・49-14・92-21は二次加工が粗いため、未成品の可能性もある。

石錐は6点出土した。遺構内出土の3点はいずれも摘み付きで、幅約3～4cmの縦長の剥片を素材とし、下端部に錐部となる二次加工が施される。32-12・39-3の二次加工は2側縁に片面から錯向して施されたものである。

石槍は72点出土した。大型(全長8cm以上)37点(図14-10等)・中型(6～8cm)19点(図14-13等)・小型(6cm未満)16点のもの(図92-4等)である。大型のものは10cm前後のものが多い。中でも92-24は残存長が18cmを超え、他とは一線を画す。先端部が刺突による折れとみられる剥離痕があるため、実用品と見られる。なお、石槍で欠損したものは31点(43%)と半数近くになる。石槍の多くは柳葉状を呈するものの、17-13・63-1のように二次加工によって基部を作り出すものは先端が尖る。49-7は基部が欠損するものの、先端の形状が類似するため、同じ形状の可能性もある。

石筥は12点で、全て遺構外から出土したものである。大型(全長が9cm以上、93-6・7)・中型(8～9cm、8・9)・小型(8cm未満、10・11)としたが、突出している6を除くと長さは均一的である。

石匙は43点で、縦型28点・横型15点である。縦型の94-6は器面調整が両面とも器面中央に及ぶもので、刃部に黒色物質の付着が見られる。また、39-5・52-6のように小型で幅が細いものも見られる。横長のものは縦型のものに比べ、大きさが均一である。

石核は368点出土した。95-1が最も大きく、剥ぎ取られた剥片は最大でも長さ約7～8cm・幅7cmである。剥離面ないし表皮の平坦面を打面に利用する。石核に厚みのあるものは打面を回転させながら、薄手のものは求心状に剥離を施す。後者のうち、表裏面の両方から剥離が行われるものは、両面体状となるものがある。剥離は上下左右方向から施され、素材の大きさによって上下のみや正面と裏面のみに施されるものがある。小型のものについては、側面加工のみで成形される小型の石鏃の素材作り出しを目的とした可能性がある。

スクレイパーは1,016点出土した。刃部の角度が鋭角のもの(98-1等)・急角度のもの(98-5等)、加工部位が素材剥片の1側縁から4側縁にみられるものがある。また、剥離方向が片面と両面のもの

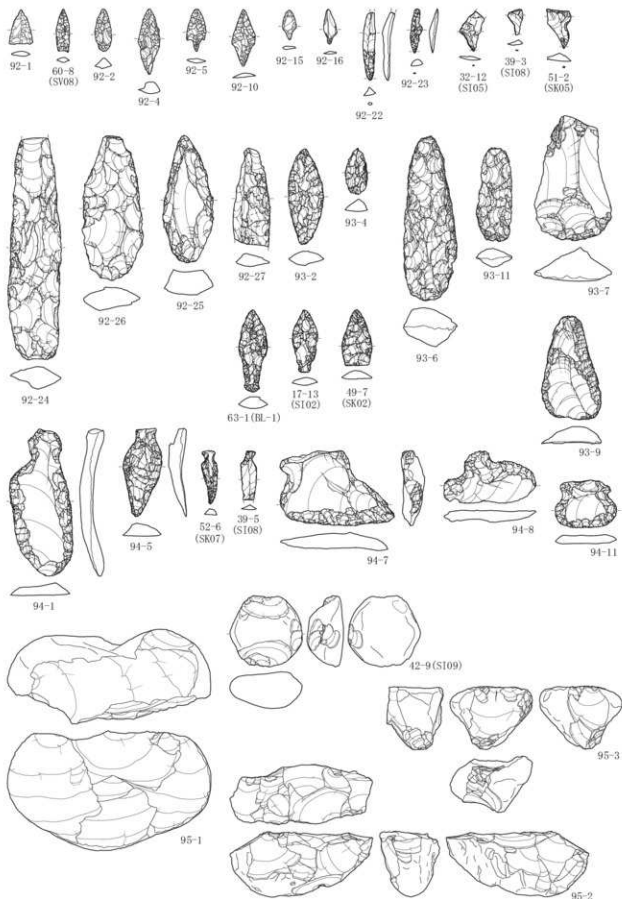
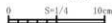


図 133 古野(2)遺跡出土 剥片石器(1)



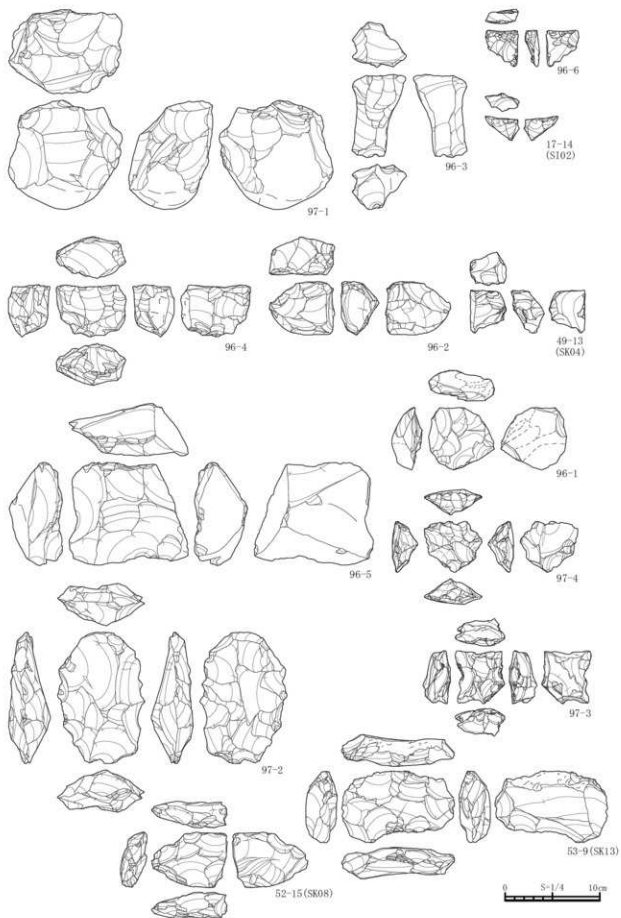


图 134 古野(2)遺跡出土 剥片石器(2)

がある等、種類は多岐にわたる。多くには微細剥離が認められ、また、表皮が残る素材を利用するものが見られる。

二次加工のある剥片は537点出土した。

微細剥離のある剥片は3,979点出土した。重量3.0g以下のものが三割(1,232点)で、1.1～1.5gのものが約6%(256点)と多い。

剥片は10,732点出土した。重量1.0g以下のものが過半数(5,517点)で、0.5g以下のものが三割(3,612点)を占める。

原石は1点出土した(写真61)。

先行研究より、R-36遺物集中の石槍(63-1)は前期後葉に、石鏃有茎は中期後葉に帰属するものと推定される。本遺跡で中期後葉(複林式期)の床面・炉のものをまとめた(図135)。

なお、竈穴建物跡の炉堆積土等から採取した土壌サンプル中からも微小剥片が含まれており(表2)、竈穴建物跡内の炉付近で石器製作が行われていた可能性もある。

遺構外からは総数で13,456点(114,346.9g)の剥片石器が出土した。第Ⅰ層から5,413点(31,728.8g)・第Ⅱ層から1,402点(10,898.5g)・第Ⅲ層から6,641点(71,719.6g)の出土である。縄文時代の遺物包含層である第Ⅲ層出土の石器組成を表3に、重量別出土分布を図136にまとめた。

Q-47・48を中心にした丘陵の斜面下部に集中して出土しており、捨て場に遺棄されたものと推測される。石材は、珪質頁岩が重量比で96.37%を占め(6,562点・69,116.9g)、器種は、石鏃(0.25%:61点・175.8g)、石鏝(0.01%:2点・5.0g)、石槍(1.20%:29点・863.9g)、石筥(0.38%:6点・272.7g)、石匙(0.56%:22点・400.7g)、石核(16.38%:197点・11,745.2g)、スクレイパー(14.91%:517点・10,692.1g)、二次加工のある剥片(6.62%:226点・4,748.6g)、微細剥離のある剥片(31.85%:1,726点・22,840.1g)、剥片(24.22%:3,776点・17,372.8g)で、出土位置・石材・器種ともに偏在する特異的な出土状況を示す。

微細剥離のある剥片が三割を占めていることは、器面調整や刃部調整を加えずに剥片のまま使用していた事例が多かった可能性がある。また、剥片(約24%)・石核(約16%)の出土比率が高いのは、遺跡内で石器製作が行われていたことを示唆する。しかしながら、剥離された剥片の大きさが小さいうえ、大きな原石は出土していない。これらのことは、石槍等の大型石器を製作するための素材剥離は採取地等の遺跡外で行われていた、遺跡外に持ち出された、ないしは消費され尽くしたと考えられ、遺跡内では石鏃等の小型の素材剥片のみの獲得や二次加工のみを行っていたためと推定される。これは、石器の主材料となる珪質頁岩が遺跡近方の大間層で豊富に産出されるため、石材が容易に獲得しやすかったためと考えられる。更に、様々な形状のスクレイパー類が出土していることから、定型的な石器製作にとらわれずに柔軟な石器製作と利用が行われたことが想定される。

なお、深浦産黒曜石製の石槍(92-27)が1点出土している。欠損しているものの、残存部長が約7cmであり、原石はかなり大きいものであったと想定される。また、深浦産黒曜石の出土例は前期中葉以降少数になることが知られ、また、下北地域での出土例は少ないのもでもある。これも特異的な出土状況を示すとともに、磨製石斧の緑色岩のように石材の地域間移動が行われていたことの証左でもあり、資料の少なさという貴重さのみでなく、地域的に近い北海道以外にも幅広い交流があったことを想起させる。

(平山)

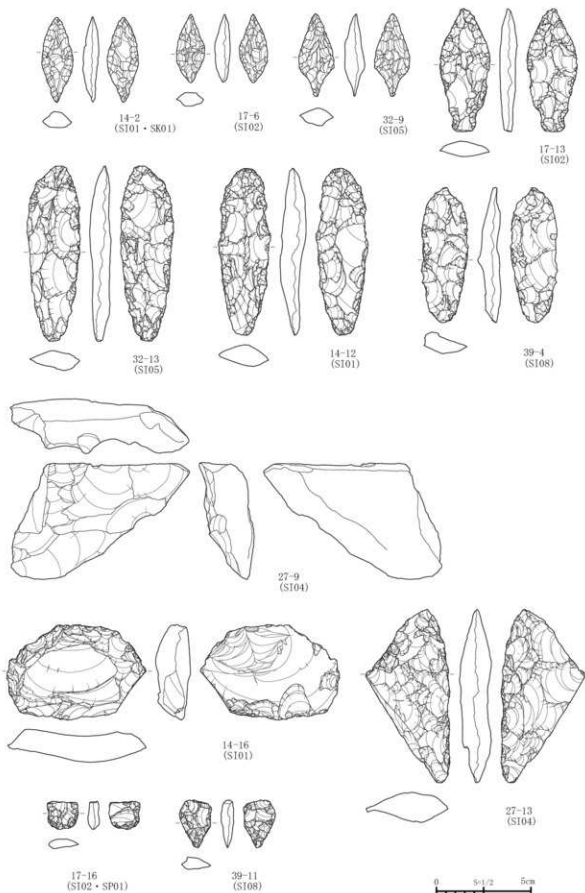


図 135 榎林式期石器集成

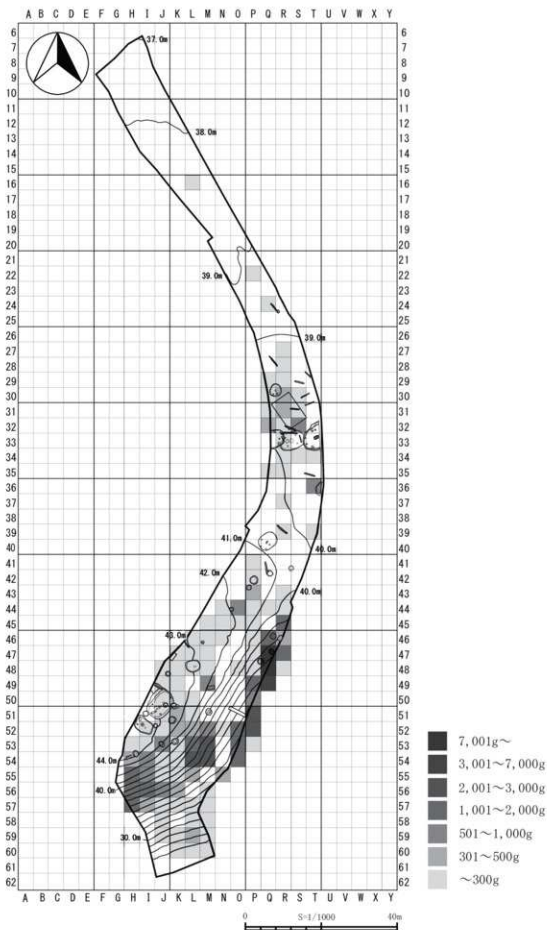


图136 第三層出土剥片石器重量別出土分布图

第5節 礫石器

礫石器は遺構内外から498点、総重量548,291.1gが出土した。礫石器は磨製石斧30点(4,829.3g)、擦切具3点(203.4g)、敲磨器類266点(119,819g)、半月状扁平打製石器21点(8,043.0g)、挟入扁平打製石器12点(6,761.1g)、台石95点(406,380.8g)、砥石2点(79.3g)、浮子1点(5.5g)、剥片68点(2,169.7g)である。遺物は、第4・5・7～9号竪穴建物跡、調査区南側の斜面部にあたるK-55、P-51、Q-47・48から多く出土した。石材は安山岩が253点(516,465.8g)と最も多く、全体の95%を占め、中でも敲磨器類が全体の5割を占める。安山岩は黄褐色のローム層である第V層中に見られ(写真3基本層2・3参照)、遺跡近くを流れる日滝川の河口でも採集できる。古野(2)遺跡で出土した敲磨器類等の安山岩を素材とする石器は、周辺で容易に獲得できる石材を利用したと考えられる。

	磨製石斧	擦切具	敲磨器	半月状扁平打製石器	挟入扁平打製石器	台石	砥石	浮子	剥片	計
安山岩	8 (1547.6g)	1 (68.6g)	253 (110681g)	8 (4073.3g)	5 (3200.2g)	92 (400250.9g)			12 (285.1g)	379 (520106.7g)
花崗閃緑岩	5 (1748.2g)		11 (7633.4g)	11 (3462.5g)	7 (3560.9g)				43 (1636.9g)	77 (18041.9g)
軽石							2 (79.3g)	1 (5.5g)		3 (84.8g)
泥岩	1 (5.6g)	1 (20.8g)							1 (6.7g)	3 (33.1g)
流紋岩		1 (11.4g)	1 (77.1g)	1 (232.1g)		3 (6129.9g)			4 (152.6g)	10 (7402.7g)
緑色岩	16 (1527.9g)								3 (20.1g)	19 (154.8g)
チャート			1 (730.5g)							1 (730.5g)
デイサイト				1 (275.1g)						1 (275.1g)
砂岩									3 (43.2g)	3 (43.2g)
凝灰岩									1 (23.6g)	1 (23.6g)
粘板岩									1 (1.5g)	1 (1.5g)
計	30 (4829.3g)	1 (68.6g)	266 (119819g)	21 (8043.0g)	12 (6761.1g)	95 (406380.8g)	2 (79.3g)	1 (5.5g)	68 (2169.7g)	498点 (548291.1g)

表4 礫石器の石材組成表

図137は、石材ごとに分けた磨製石斧と石斧製作に関連する資料をまとめたものである。石斧製作に利用される石材は複数あり、緑色岩16点(137-1～16)、安山岩8点(137-17～24)、花崗閃緑岩5点(137-26～29)、泥岩1点(137-25)であり、重量別にも緑色岩、安山岩と花崗閃緑岩の順に多い。残存部位ごとには、完形のもの4点、刃部を欠くもの8点、基部欠損のもの7点、刃部のみのもの6点、未成品3点、素材片2点である。全体の長さがわかるものは長軸14cm前後のもの、10cm前後の小型のものがある。安山岩製の石斧は刃部や基部を欠くものが多いものの、緑色岩製と同様に小型・大型のもの両方があるとみられる。137-15は側縁に幅0.6～0.7cm溝状の凹みが見られ、擦

切具（137-32～34）の刃部幅と近似する。擦切具が磨製石斧加工にのみ使用されるものではないが、本資料は長さ10cm未満の小型の石斧製作を想定したものと考えたい。緑色岩は肉眼的に北海道平取町額平川産の可能性が高く、道南部の集落遺跡を経て素材が搬入されたものとみられる。花崗閃緑岩製の石斧は、刃部のみのものは不明であるが、図示していない1点の未成品の資料を含め、大型のものとみられる。石斧未成品は、素材となる礫を短軸方向から剥離したものに挟り状に加工を施し(29)、未図化のものは、29と似た大きさであり、長さ15.3cm、幅8.6cm、厚さ3.4cmの素材剥片の正面から求心的な剥離が施される。その後、敲打整形により28のように加工され、研磨により全体を仕上げ、使用時に刃部が欠損し、27となる製作から廃棄までの一連の流れが想定される。素材となる花崗閃緑岩は、齋藤によれば東通村尻屋崎やむつ市大畑町の海岸で採集可能であることから、遺跡外からの搬入が想定される（齋藤2004）。石斧の敲打整形には、137-31のような敲石が利用されたものとみられる。31は敲打の結果、使用面が蛤刃状となっている。磨製石斧は、緑色岩と花崗閃緑岩で、それぞれ成品・素材・製作途中の未成品が確認された。また擦切具や敲石といった石斧製作に関連する石器が併せて確認されたことから、古野（2）遺跡において磨製石斧の製作が行われていたことは確実である。



図 137 磨製石斧と石斧製作に関連する石器集成

また、花崗閃緑岩を利用する石器に半円状扁平打製石器と挾入扁平打製石器がある(図138)。33点が出土し、安山岩13点(全体の39%)と花崗閃緑岩18点(55%)が主に利用され、全体の9割強を占める。安山岩を素材とするものは長さ9～17.5cmほどの扁平な楕円礫を使用し、剥片素材のものも1点みられる。花崗閃緑岩を素材とするものは、長さ12～20cmほどの扁平な楕円礫や剥片を素材とする。剥片は厚さ2～3cmであり、石斧素材(137-29)と大きさが近似し、また素材となる礫を短軸方向から剥離して利用する点も共通する。半円状扁平打製石器と磨製石斧の石材利用への互換性は不明であるものの、石器製作の一連の工程を考えた上で自然礫やこれらの石器が製作可能な大きさをもつ2次加工のない剥片を取り扱う必要がある。古野(2)遺跡で出土した剥片68点のうち、花崗閃緑岩は43点と約6割を占める。多くは長さ8cmに満たないものの、138-17に類似した、長さ16.4cm、幅9.4cm、厚さ2cmのものも1点確認されている(未図化)。台石の多くは平滑な磨面をもつため、石斧を研磨する用途も想定できる。なお砥石は、いずれも長さ約7cm、重さ約30～50gと軽量であるため、手持ちで軟質のものを研磨の対象とした可能性がある。

古野(2)遺跡では、遺跡周辺で獲得可能な安山岩を主体としつつ、比較的近距离で得られる花崗閃緑岩のような在地の石材や遠隔地である北海道からの緑色岩を取り入れつつ石器製作を行っていた。

(藤田)

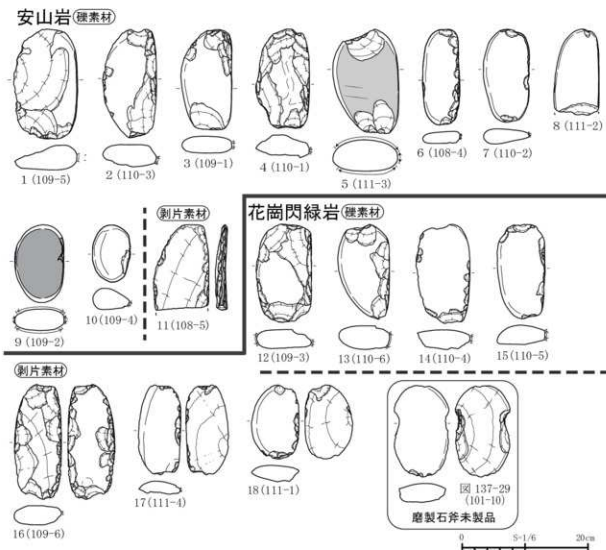


図138 半円状扁平打製石器・挾入扁平打製石器集成

第6節 津軽海峡域における円筒土器文化期の集落動態

1 はじめに

古野（2）遺跡は、本州島最北端の下北半島に位置する。本州島北端の下北半島と津軽半島は、北海道島まで直線距離で約20kmであり、好天時にはっきり見通せるほどである。このような近距離にある本州島と北海道島の津軽海峡域の交流については、福田友之（2014ほか）をはじめ多くの研究があり、ヒスイや黒曜石といった様々なものが津軽海峡域を行き来していることが明らかになっている。本節では、海峡域の円筒土器文化期の集落の分布や数を検討し、集落動態を明らかにし、古野（2）遺跡の位置づけを考える。

2 分析の対象と方法

対象とした時期は、縄文時代前期中葉（円筒下層a式）～中期後葉（大木10式併行期）の円筒土器文化期である。時期区分は、「円筒土器文化総合データベース作成」（三内丸山遺跡保存活用推進室2016）の「北海道・北東北の円筒土器型式期の広域編年案」に準拠した（表5）。

		岩手・秋田		青森		北海道		
						道南	道央	
前期	前期	大木1					石川野	藤文
		大木2a					春日野（藤田集）	静内野（トビノ）
		大木2b					大津3群	加茂川（静内中期）
	中期	大木3						
		大木4						
		大木5a						
		大木5b						
	後葉	大木6（古）						
		大木6（新）						
		大木7a						
後期	前期	大木7b						
	中期	大木8a						
		大木8b						
		大木8c						
		大木8d						
		大木8e						
		大木8f						
		大木10						

表5 北海道・北東北の円筒土器型式期の広域編年案

対象地域は津軽海峡域で、本州北端（下北半島、津軽半島の北端）と北海道島の津軽海峡に面した南辺とした。このため、大規模な集落が集まる旧南茅部町域の八木A遺跡やハマナス野遺跡等は対象外となった。道南の方が、開発事業に伴う発掘の件数や面積が圧倒的に多く、遺跡数に差が生じた。

対象遺跡は、発掘調査において、当該期の堅穴建物跡、盛土、捨て場等が検出され、集落と認定できる遺跡、計67遺跡である（表8）。集成にあたっては、三内丸山遺跡保存活用推進室（2016）、「三内丸山遺跡など盛土遺構の研究」会（2011）、下北半島の集成については、濱松優介（2018）を参考にした。

分析方法は、竪穴建物跡の数を時期ごとにカウントし、その他の遺構をピックアップした表8をもとにマッピングした(図141～145)。円筒土器文化期での集落については、大きさにより階層があるため、集落と拠点集落に分けて検討した。岡村道雄(2018)によれば、拠点集落は、物流センターであり、共同墓地や「盛土遺構」や捨て場を有する送りの場、祭祀遺物の多い葬祭センターの役割を担っていたとする。そして、北東北の中期社会は、各種施設が区画整理された大規模な集落、大家族が集めた拠点集落、季節的や出作りのな分村、各種生産遺跡等で構成され、社会が階層化・構造化していたとし、集落を「大規模な集落」、「拠点集落」、「分村、各種生産遺跡」の3階層に分類している(岡村2018)。本集成では、各遺跡の集落構造を精査していないため、前者2つをまとめて「拠点集落」とし、その他を「集落」として、2つに分類した。拠点集落は、盛土や捨て場があり、竪穴建物跡等の遺構が多数(概ね20棟以上)あるものとした。竪穴建物跡等の検出が少数でも、大規模な捨て場、複数の捨て場や盛土等があり、拠点集落と想定できる遺跡はこれに含めた。

集成表を表8に示した。数字は竪穴建物跡の検出数で、検出数に応じ4階層に分類した。「1～4棟」、「5～9棟」、「10～14棟」、「15～20棟」「20棟以上」である。三内丸山遺跡保存活用推進室(2016)では、小規模集落(1～20棟)、中規模集落(21～40棟)、大規模集落(41棟以上)としているが今回の集成では小規模が多かったため細分した。拠点集落には概ね「20棟以上」と「10棟以上」が該当する。なお、竪穴建物跡の帰属時期が不明確で、複数時期にわたるものは、古い時期でカウントした。このため、全体的に古い時期へ比重が大きくなるバイアスがかかっている可能性に注意された。竪穴建物跡の時期については報告書の記載を優先したが、一部は再分類も行った。また、竪穴建物跡以外の遺構もピックアップしたが、時期が明確にわかるものや、特徴的なものをカウントしたため、網羅してはいない。盛土や捨て場については、存続時期等を記載した。備考には遺跡の特記事項等をメモ的に記載しており網羅的ではない。文献は、北海道埋蔵文化財センター調査報告書を「北埋報」に、青森県埋蔵文化財調査報告書を「青埋報」に省略した。

3 分析結果

表8の集成表をもとに図141～145まで各時期にマッピングした。遺跡の立地は、海岸にほど近い海成段丘もしくは、河岸段丘に位置するものが多い。道南は松前半島の南東から亀田半島の南西にかけて遺跡が密集する。集落の規模は、全体を通して本州北端域より道南のほうが大規模である。

円筒土器文化期の集落は67遺跡集成できた。このうち拠点集落は24遺跡で、道南が19遺跡、本州北端域が4遺跡と道南のほうが多い。竪穴建物跡が1時期で20棟以上検出された集落数は11遺跡で、本州北端域では僅か1遺跡にとどまる。

(1) 集落数と竪穴建物跡数の変遷(表6、図139・140)

集落数は、前期後葉が最も多く、その次に中期後葉が多い。増加率は、前期中葉から前期後葉が最も高い。時期的な変遷を概観すると、前期中葉は、総数は少ないものの「10棟以上」の集落割合が高い。前期後葉～中期前葉は、総数が倍以上に増える。「20棟以上」、「10棟以下」は、さほど変わらないが、それ以下の集落は、数・割合ともに大幅に増える。中期中葉は、集落数の変動は小さいが、「5～9棟」のものが増え、中期後葉は、集落数が大幅に増える。「20棟以上」の数・割合が最も多くなる。地域的には、大筋では道南と本州北端域は連動して推移しているが、本州北端域は前期後葉以降、集落数

が減少し、道南のように中期中葉から後葉にかけて集落数が増加せず、少ないままで推移する。

時期ごとの堅穴建物跡数(図140)では、棟数が最も多いのが中期後葉で、前期後葉がそれに次ぐ。中期前葉～中葉は少なく、いずれも中期後葉の半分ほどである。集落数と比較すると、集落数は前期後葉が最も多くなり、棟数とは違った動きを見せる。中期後葉にかけて、集落の集約が進み、1集落あたりの棟数が増えたためと考えられる。

	1~4棟	5~9棟	10~20棟	20棟以上	集落数(計)	拠点集落
前期中葉 (下層a-b)	9		2	3	14	6
前期後葉 (下層c-d)	21	7	3	2	33	11
中期前葉 (上層a-c)	15	3	3	1	22	9
中期中葉 (上層d-e)	10	9	1	1	21	9
中期後葉 (複林-大木10併)	14	8	2	4	28	6

※拠点集落には堅穴建物等の出土が少なく、大規模な柱礎、複数+西の柱や土台等の出土により、拠点集落が想定できる遺跡も含む。

表6 時期ごとの集落数

	道南					本州北端域(下北半島・津軽海峡北端)					計		
	1~4棟	5~9棟	10~20棟	20棟以上	集落数(計)	拠点集落	1~4棟	5~9棟	10~20棟	20棟以上	集落数(計)	拠点集落	集落数(計)
前期中葉 (下層a-b)	4	0	2	3	9	5	5			5	1	14	6
前期後葉 (下層c-d)	14	3	3	2	22	7	7	4		11	4	33	11
中期前葉 (上層a-c)	11	3	3	1	18	7	4			4	2	22	9
中期中葉 (上層d-e)	7	9	1	1	18	8	3			3	1	21	9
中期後葉 (複林-大木10併)	13	6	2	3	24	5	1	2	1	4	1	28	6
計	49	21	11	10	91	32	20	6	1	27	9	118	41

※拠点集落には堅穴建物等の出土が少なく、大規模な柱礎、複数+西の柱や土台等の出土により、拠点集落が想定できる遺跡も含む。

表7 時期ごとの集落数(地域ごと)

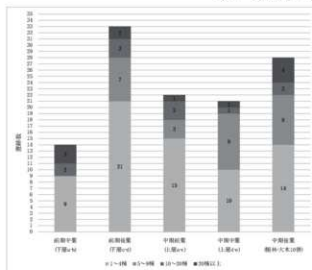


図139 集落数とその種類の割合

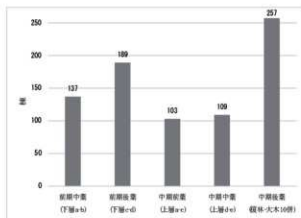


図140 時期ごとの堅穴建物跡数

(2) 時期ごとの集落変遷**(ア) 前期後葉 (円筒下層 a～b) (図 141)**

道南 12 遺跡、津軽半島 2 遺跡、下北半島 3 遺跡、計 17 遺跡ある。堅穴建物跡数が 20 棟以上は、釜谷遺跡 (43 棟)、戸井貝塚 (29 棟)、釜谷 5 遺跡 (26 棟) の 3 遺跡、10 棟以上は館野 2 遺跡 (17 棟)、館野 6 遺跡 (11 棟) の 2 遺跡、10 棟以下が 9 遺跡ある。拠点集落は、道南に 6 遺跡、下北半島に 1 遺跡である。道南の拠点集落は館野地区、釜谷地区、大平地区に所在する。釜谷遺跡は最も棟数が多い拠点集落で、下層 b 式期が最盛期で前期後葉まで続く。捨て場が 3ヶ所あり、土地造成も行われている。釜谷 5 遺跡は前期後葉までの集落で、盛土はないものの 26 棟の堅穴建物跡がある。戸井貝塚は、下層 a 式期の拠点集落で、堅穴状遺構が 29 棟検出されているほか、大規模な捨て場がある。捨て場は沢を埋めるような斜面捨て場である。比較的短期間営まれた釜谷遺跡、釜谷 5 遺跡や戸井貝塚は、この時期に最盛期を迎えるのに対し、長期間続く館野 2 遺跡、館野 6 遺跡は形成期にあたる。本州北端域では遺跡が少ない。むつ市涌館遺跡は、堅穴建物跡数はわずかだが、捨て場が 2カ所検出される拠点集落である。津軽半島の集落は坊主沢遺跡のみで、山崎遺跡には捨て場が形成されている。

(イ) 縄文時代前期後葉 (円筒下層 c～d 式期) (図 142)

道南 22 遺跡、津軽半島 2 遺跡、下北半島 11 遺跡、計 35 遺跡あり、前段階から大幅に増加する。堅穴建物数が 20 棟以上は、大平遺跡 (36 棟)、館野 6 遺跡 (34 棟) の 2 遺跡、10 棟以上は浜町 A 遺跡 (12 棟)、釜谷遺跡 (11 棟)、豊原 4 遺跡 (10 棟) の 3 遺跡、10 棟以下が 28 遺跡である。前段階と比べて、小規模集落が大幅に増加する。分布範囲も前段階より広域に広がる。拠点集落は道南 8 遺跡、本州北端域 4 遺跡ある。

道南は、東側には松前湾まで広がり、木古内川周辺から矢不來川周辺まで濃密に分布する。函館湾の北西丘陵や亀田半島の南西側にも分布が広がる。この傾向は概ね中期後葉まで続く。大平遺跡では、本時期で最も多くの堅穴建物跡があり、土坑やフラスコ状土坑も多数ある。前段階から盛土形成が行われ、本段階で最盛期を迎える。前期中葉から中期前葉まで続く館野 6 遺跡は、本段階が最盛期である。浜町 A 遺跡は本段階の堅穴建物跡を埋めるように、次段階から盛土の形成が行われる。

津軽半島では、中の平遺跡で盛土形成が始まる。中の平遺跡の盛土は拠点集落に伴う大規模なものである。下北半島は、前段階より集落数が大幅に増え、古野(2)遺跡を含む、下北半島北通りにも集落が分布する。円筒土器文化期を通じて最も集落数が多い時期である。拠点集落は、沢ノ黒遺跡で複数の捨て場が見つまっているほか、熊ヶ平遺跡では堅穴建物跡 8 棟に加え、平地捨て場が形成される。古野(2)遺跡と同時期の捨て場があるが、規模等は前述した 2 遺跡より小規模である。

(ウ) 縄文時代中期前葉 (円筒上層 a～c 式期) (図 143)

道南 21 遺跡、津軽半島 1 遺跡、下北半島 5 遺跡、計 27 遺跡で、前段階から減少する。堅穴建物跡数は、20 棟以上が館崎遺跡 (23 棟) のみ、10 棟以上は、札苅 5 遺跡 (12 棟)、新道 4 遺跡 (10 棟)、館野 6 遺跡 (10 棟) の 3 遺跡、10 棟以下が 18 遺跡である。集落の分布は前段階と大きく変動はないが、全体的に遺跡数が減少している。

拠点集落は 9 遺跡で前段階より減少する。道南の館崎遺跡は、盛土がある前期後葉～中期後葉まで続く集落で、本段階に最盛期を迎える。新道 4 遺跡も同様で、本段階の捨て場が 4カ所あり、最盛期となる。豊原 4 遺跡は、前段階の堅穴建物跡を埋めて本段階に盛土が積み上げられる。鳴川右岸遺跡

は、中期前葉～中葉の捨て場が4カ所あり、堅穴建物跡は3棟と少ないが、拠点集落が想定できる。

津軽半島では、中の平遺跡が存続しているほか、山崎遺跡では堅穴建物跡が2棟検出される。下北半島は前段階を最盛期に減少し、小規模集落が4遺跡のみである。

(エ) 縄文時代中期中葉（円筒上層d～e式期）（図144）

道南20遺跡、津軽半島2遺跡、下北半島1遺跡、計23遺跡で、前段階と同数である。堅穴建物跡数は、20棟以上が桔梗2遺跡（21棟）のみ、10棟以上が館野2遺跡（10棟）のみ、10棟以下が19遺跡である。集落の分布は、道南は、概ね分布が変わらないが、下北半島は遺跡数が減少する。

拠点集落は9遺跡と前段階を引継ぐ。桔梗2遺跡は、円筒土器文化期を通じて存続し、本段階に最盛期を迎える拠点集落である。堅穴建物跡の数は21棟と多いものの、盛土や捨て場は検出されていない。石川1遺跡と隣接しており、集落の範囲等は、今後検討する必要がある。下北半島は1遺跡であり集落数が最も少なくなり、田野沢遺跡のみである。

(オ) 縄文時代中期後葉（榎林～大木10式併行期）（図145）

道南24遺跡、津軽半島2遺跡、下北半島3遺跡、計29遺跡と、前段階より増加する。堅穴建物跡数20棟以上は、館野2遺跡（58棟）、豊原4遺跡（34棟）、館野遺跡（30棟）、酪農（1）遺跡（中期後葉～後期初頭29棟）の4遺跡で、10棟以上は、高屋敷川1遺跡（16棟）、サイベ沢（10棟）の2遺跡、10棟以下は22遺跡である。集落の分布は、道南は大きく変化しないが、下北半島では遺跡数が増える。

拠点集落は6遺跡で、館野遺跡、館野2遺跡は中期中葉～後葉に最盛期になる。館野2遺跡は58棟と、本集成で最も多い。豊原4遺跡は、前期後葉～中期後葉まで存続し、最盛期は中期後葉である。

下北半島は、古野（2）遺跡で7棟堅穴建物跡がある。むつ市酪農（1）遺跡は、29棟と多く堅穴建物跡が検出されているが、遺物が少なく時期判別が難しい。津軽半島は、山崎遺跡で8棟見つまっている。

3 まとめ 一集落の立地と動態一

これまで集成した集落について、堅穴建物跡の数や時期的変遷を分析してきた。これを踏まえ、円筒土器文化期における津軽海峡域の集落の立地と、その動態を地域ごとに考察する。

道南では、松前半島の南東は、新道地区から館野地区まで絶え間なく拠点集落から小集落まで所在する。前期中葉は、館野地区と釜谷地区、大平地区に拠点集落はあるが、通常の集落は少ない。前期後葉になると規模、数ともにピークになり新道地区から館野地区まで集落が立ち並ぶ。拠点集落は維持したまま、周辺に集落ができるほか、南西側の新道地区にも集落が増える。中期になると分布は変わらず、規模が縮小する。中期後葉は、館野地区に拠点集落が分布し、そこへ収斂される様相である。釜谷地区、新道地区は中期から減少し、中期後葉まで同傾向である。

松前湾地域は、前期後葉から増えはじめ、中期で減少することなく、増加の一途を辿る。中期中葉は桔梗2遺跡で最盛期を、中期後葉はサイベ沢遺跡で最盛期を迎える。この地区は遺跡が近接しており、より詳細な分析を行うことで複数の拠点集落に整理できるかもしれない。

松前半島南端は、拠点集落である館崎遺跡が所在するのみである。亀田半島の南側では、分布は散漫だが、各期に拠点集落があり、松前半島のような実態があるのかもしれない。

下北半島は、発掘調査事例が少ないが、津軽海峡に面した北側と陸奥湾に面した南側に主に分布する。道南のような大規模集落は見つかっておらず、一般集落が点在する様相が想定できる。拠点集落は道南より総じて規模が小さい。遺跡数のピークは前期後葉で、中期の集落はほとんどない。津軽半島は今回先端部のみの集成であったため、今後改めて集成を行いたい。

今回は津軽海峡域で集成したが、三内丸山遺跡保存活用推進室(2016)で実施した「円筒土器総合研究データベース」では、青森市域と八戸市域で竪穴建物跡の棟数をカウントし、集落変遷を見出している。青森平野では、中期中葉以降、拠点集落である三内丸山遺跡の周辺に一般集落が集まり、そこに収斂するような様相が明らかになっている。八戸市域では、三内丸山遺跡のような継続性を有する拠点集落は見つかっておらず、竪穴建物跡41棟以下の集落が転々と移動すると指摘されている(三内丸山遺跡保存活用推進室2016)。

道南では、三内丸山遺跡のような100棟の竪穴建物跡があり、長期間存続する大規模な拠点集落は見つかっていないが、館野地区、釜谷地区、函館湾北東域に集落が密集する。周辺の集落は、中期中葉～後葉に拠点集落に収斂する様相が認められる。同時期に竪穴建物跡数は増えるが集落数は減る分析結果(図139・140)とも親和的である。ここから、道南地域は、青森市域と八戸市域とは違った様相で、核となる地域が複数存在し、その中の拠点集落を中心に集落が変遷していることが指摘できる。

古野(2)遺跡は前期後葉と中期後葉の集落である。斜面捨て場が形成される、前期後葉は津軽海峡域で遺跡数が最も多く、本遺跡においても他の集落との交流が活発であることが想定できる。近隣には沢ノ黒遺跡があるなど北通りにも集落が点在し、対岸の道南地域には拠点集落が多数見られるような状況である。一方、中期後葉は、下北半島では、古野(2)遺跡で7棟、瀬野遺跡で3棟のみである。津軽半島北端は山崎遺跡で8棟のみである。このような中で、これまでの拠点集落より規模は小さいが、これらの集落が地域の拠点的な役割だったのかもしれない。道南地域においては集落数が減り拠点集落への集約が進み、下北半島部の集落と、そのような集落との交易も想定できる。

5 課題と展望

今回は、単純な竪穴建物跡数と、それに加え盛土や捨て場について扱い、その規模から拠点集落等に分類したが、土坑等の構成要素を精査して分析する必要がある。特に盛土や捨て場については、その規模や性格を精査し、細分できる余地がある。集成範囲は、道南は、北海道島南側のみ対象としたため、旧南茅部町域の拠点集落が対象から外れている。また津軽半島も南側まで加え、津軽半島地域として分析を行う必要がある。集落範囲については、登録は別遺跡になっているが、同一集落の可能性のある遺跡の精査が必要である(例えば桔梗2遺跡と石川1遺跡など)。また、土器型式の存続年代については、存続が長い型式と短い型式があり、型式による時期区分により、その存続年代幅が異なってしまう、今後の分析で検討が必要である。今後は、現在整理作業中の拠点集落、木古内町幸連5遺跡の事例や、旧南茅部町の遺跡等を集成に加え、再度分析を行い、青森県域との比較を行いたい。

(長谷川)

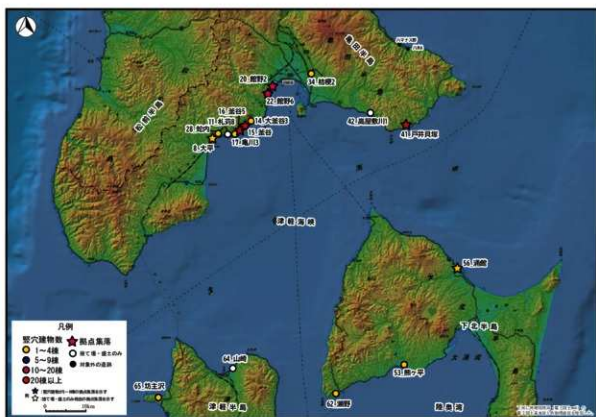


図141 円筒土器文化期における津軽海峡域の集落分布（前期中葉 円筒下層a~b式期）

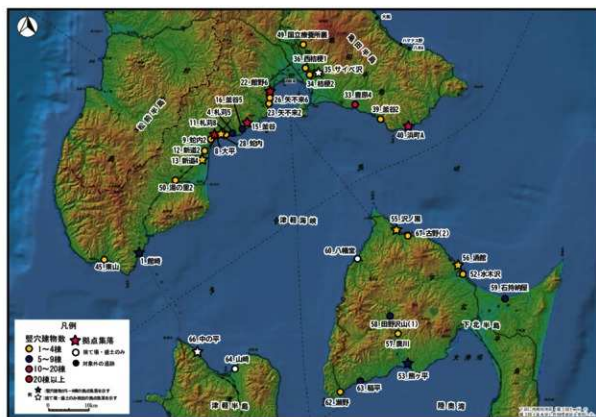


図142 円筒土器文化期における津軽海峡域の集落分布（前期後葉 円筒下層c~d式期）

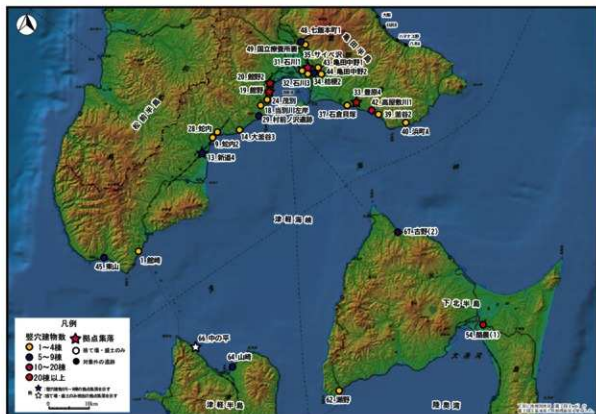


図145 円筒土器文化期における津軽海峡域の集落分布（中期後葉 榎林～大木10式併行期）

表8 津軽海峡域の集落集成表

No	遺跡名	拠点集落 時期等	盛土に○ 捨て場に△	前期		中期		備考	所在地	文献
				期穴数	その他	期穴数	その他			
1	船崎	下層d+上層c	○	9	土坑風盛土	13	道回跡、盛土	最大級の岩俣。多量の決伏瓦葺、長野系産黒曜石片、黒花野多量、多量埋土群、祝屋基、15体人骨、貝類	北海道 福島町 船崎337-37	福島町教育委員会1985「船崎遺跡」、北環報333集
2	幸道3	○					5		北海道 本古内町字幸道900ほか、字堤岡55	北環報7第343集
3	幸道5	○	○					整理作業中、前期～後期初期の集落、堅穴建物138棟、盛土有り、土坑465基あり	北海道 本古内町幸道	北環報7「幸道2」2019「幸道2」43号
4	札幌5			9		12			北海道 本古内町札幌566-211ほか	北環報第294集 北環報第333集
5	泉沢2					1			北海道 本古内町二乃51-312ほか	北環報第2003「泉沢2遺跡A地点」
6	泉沢5						2		北海道 本古内町二乃542-4ほか	北環報第330集
7	本古内2	△				3	小捨塚	住居商業後の窪地に小規模な捨て場あり	北海道 本古内町字本町436-9	北環報第278集 北環報第293集
8	大平	前期中葉～後葉	○	2	盛土	1	上層42、773土、506土、盛土	盛土形成は、下層bの住居内盛土から始まる。42でまで形成続く。炭化榎実や雑骨あり。黒曜石は道内産のみ。	北海道 本古内町字大平463	北環報第280集 北環報第321集 北環報第328集
9	蛇内2			1					北海道 本古内町字札幌5081ほか	北環報第281集
10	札幌6						5	土坑15	北海道 本古内町字札幌577-2ほか	北環報第301集

古野(2)遺跡

No	遺跡名	拠点集落 時期等	盛土に○ 括弧△に△		前期		中期						備考	所在地	文献		
			時期等	時期等	中葉		後葉		前期		中葉					後葉	
					堀穴 敷	その他	堀穴 敷	その他	堀穴 敷	その他	堀穴 敷	その他				堀穴 敷	その他
11	札馬8	○ ?	小規模2カ 所、下層 b・下層d1		括弧△ 2										前期後半の拠点集落か、小規模な盛土は2箇所あるが、住居が少ない。集落の中心は別か	北海道木古内町字札馬72318か	北埋報第362巻
12	新道2						2									北海道木古内町新道104-418か	木古内町2003「新道遺跡」目録
13	新道4	○ 前期後葉 ～中期	下層dの括 弧が4カ 所、上層d の括弧が 4カ所				77x土 4 坑、括 弧		10 77x土坑		7 括弧△		8 土坑		前期後葉～中期の拠点集落。盛土は少ないが括弧が多い。	北海道木古内町新道138-418か	北埋報第33巻 北埋報第43巻 北埋報第320巻
14	大釜谷 3				1								1 77x土 坑、土坑			北海道木古内町大釜谷	木古内町2003「大釜谷3遺跡」
15	釜谷 ○ d、中心は b)	(下層b- d、中心は b)	下層b-d、 中心dは、 下層bの括 弧が3カ所			土坑、77x 土坑、埋 設土器、 盛土		土坑、77 x土坑、埋 設土器、 盛土							下層b～dの大きな集落。中心は下層b、下層b段階で土地の南半と盛土を行い、早期の包含層を削り取っている(早期の空白地帯)。	北海道木古内町	木古内町1999「釜谷遺跡」
16	釜谷5	○ 下層b-c			36		5				1				下層b-cの大きな集落。盛土はない。包含層はあるが、整地建物の半築の削り取られて盛土として以規模が小さいか。	北海道木古内町釜谷野21418か	木古内町1995「釜谷5遺跡」
17	亀川3				2											北海道木古内町亀川213-3	木古内町1998「亀川3遺跡」
18	当別川 左岸											1 土坑				北海道北斗市当別55218か	北埋報第510巻
19	釧野 ○ Ⅷ～見晴 町	サイベ沢 町										7	36			北海道北斗市釧野3-3	北埋報第282巻
20	釧野2	○			17						10	36			中央広場あり、南北ブロックに分かれる。上層dと大実在の住居多数。クワの占有率がサイベⅧを境に変化。	北海道北斗市釧野1711か	北埋報第293巻 北埋報第303巻 上層d1981「釧野2遺跡」
21	釧野4								7 土坑							北海道北斗市釧野17-30	北埋報第235巻
22	釧野6	○ 前期中葉 ～中期前 葉	下層b1～ d2、主体は 下層d			土坑、盛 土	土坑、道 91 和集中 6、盛土	土坑、77x 土坑、埋 設土器							盛土は、下層b1から形成はじめるは住居断絶後の盛土。住居断絶から直にかけて上に盛り上げる。主体は下層d。出来高の異なるあり、前期中葉～中期前葉にかけての拠点集落	北海道北斗市釧野85-1	北埋報第295巻 北埋報第327巻
23	矢不束 2						1									北海道北斗市矢不束72-4	北埋報第37巻
24	茂別							1				1			前期前葉の土坑あり、早期～前期の集落、粘土板敷あり、前中期は小集落。	北海道北斗市矢不束96	北埋報第121巻
25	矢不束 8											2 土坑9				北海道北斗市矢不束437-318か	北埋報第244巻
26	矢不束 6		○ 前期前葉 の小規模 な括弧△				3 埋設土 器、盛土									北海道北斗市矢不束253-118か	北埋報第235巻
27	矢不束 9								2 土坑5		2					北海道北斗市矢不束41518か	北埋報第257巻
28	蛇内		盛土はあ るが、整 穴建物は 少ない	○ 下層c主体	1		1 盛土				4	1			下層c主体の盛土あり、整穴建物は少ない。	北海道北斗市大平	木古内町2004「蛇内遺跡」
29	村前ノ 沢遺跡		○ 中期前～ 後葉									5 77x土 坑、盛土			茂辺地となり、中期前～後の括弧△あり	北海道北斗市当別533-218か	北斗市教育委員会2017「村前ノ沢遺跡」
30	茂辺地 4		○ 中期後半 の包含層 あり(括 弧△)					1			5 77x土坑				村前ノ沢と隣接、中期後半の集落。遺物多い。	北海道北斗市茂辺地18181か	北斗市教育委員会2013「茂辺地4遺跡」 北斗市教育委員会2016「茂辺地4遺跡」

No	遺跡名	拠点集落		前期		中期			備考	所在地	文献				
		時期等	時期等	前期		中期									
				壱穴集	その他	壱穴集	その他	壱穴集				その他			
31	石川1					1		7	7 77x土坑	6	中期の集落、盛土なし。桔梗2と同様、中層後の集落か	北海道函館市石川町172-218か 北境報第45集			
32	石川3									4		北海道函館市石川町167(注か) 函館市教育委員会2017「石川遺跡」			
33	豊原4	○ 中期前半～後半	○ 中期前半～後半			10		8	盛土	4	盛土	14	盛土	中期前半～後半の拠点集落	北海道函館市豊原町268-1 函館市教育委員会2003「豊原遺跡」
34	桔梗2	○ 中期中葉				1		1		1	21	盛土	9	中期の大型集落、盛土なし。石川と同様、それなりの集落になるかもしれない。大型住居もある。サイベ川のシヤチ土製品あり	北海道函館市桔梗町468-5 北境報第46集、函館市教育委員会2008「桔梗2遺跡」
35	サイベ沢	○ 下層e-上層d	○ 下層e-上層d				盛土	4	盛土	5	盛土	10	盛土	中期の巨大集落の一部	北海道函館市桔梗町24-118か 函館市教育委員会2014「サイベ沢遺跡」、函館市教育委員会2015「サイベ沢遺跡(2)」、函館市教育委員会1996「サイベ沢遺跡」
36	西桔梗1					2			77x土坑						北海道函館市西桔梗町704 北境報第122集
37	石倉貝塚											1	一〇小規模壱穴		北海道函館市石倉1-118か 北境報第109集
38	中浜2							1							北海道函館市中浜町 北境報第22集
39	釜谷2					1							4		北海道函館市釜谷町602(注か) 戸井町教育委員会1988「釜谷2遺跡」
40	浜町A	下層4、上層4、後期初期	○ 上層e-dが中心か			12		5	盛土	6	盛土	2		下層4の多くの住居、それを埋めるように、上層cdの盛土、多くの埋設や土坑から拠点集落といえる。赤土川のスイ土床あり。盛土なので中期中葉か。後期は露状列石と埋設土器。	北海道函館市浜町556(注か) 戸井町教育委員会1990「浜町遺跡1」、1991「浜町A遺跡目録」
41	戸井貝塚	○ 前期後半と後期初期	下層a-bの捨て場、火拵等の捨て場と貝塚		一〇壱穴 29 遺構 捨て場								埋設土器	前期後半と後期初期の拠点集落。川向い300mの浜町Aと併せて考える必要がある。下層a-bの捨て場は沢を埋めるような捨て場、壱穴建物多い。	北海道函館市浜町321(注か) 戸井町教育委員会1992～1996「戸井貝塚1～IV」
42	高屋敷川1	△ 壱穴建物多	△ 小規模捨て場あり(下層ab)		捨て場								16	中期後半の大きな集落。	北海道函館市小安町874(注か) 北境報第107集
43	亀田中野1											1	一〇壱穴状遺構		北海道函館市亀田中野町70-1 函館市教育委員会2011「亀田中野1遺跡」
44	亀田中野2									3		1			北海道函館市亀田中野町65-212(注か) 函館市教育委員会2014「東山遺跡、亀田中野1遺跡(注)」
45	東山					3							6		北海道松前町東山 松前町教育委員会2005「東山遺跡」
46	藤石												2		北海道松前町坂町473-2 松前町教育委員会1978「鬼沢・藤石遺跡」
47	嶋川右岸	○	△ 上層b-dで4ヶ所						捨て場	3	土坑、捨て場			中期中葉の捨て場有。遺構は壱穴3と土坑のみ。遺跡の本体は別地点か。	北海道七飯町坂町695-1118か 北境報第87集、北境報第112集
48	七飯本町												6	土坑	北海道七飯町本町 七飯町教育委員会1996「七飯本町1・2遺跡」

第7節 古野(2)遺跡の集落変遷について

1 概要

古野(2)遺跡周辺の地形・地質は、第2章第2節に根本直樹によって詳述されている。本遺跡は、南側の標高618mの目滝山を築し、易国間地区で津軽海峡に注ぐ目滝川下流左岸の海成段丘上に立地する(第2章第2節、図146)。

図146の遺跡周辺図と空撮写真では、古野(2)遺跡の調査区が、恐山山地の末端から続く段丘面と目滝川側へ急落する段丘崖におよんでいることを、良く示している。この段丘面と目滝川の比高差は約30mにも達し、目滝川に隣接する標高20m程の河成段丘上には、平成30年度に当センターが発掘調査を行った古野(3)遺跡が位置している。古野(3)遺跡においては、厚い崩積土の下から縄文時代中期前葉・中葉の遺物に加え、後期初頭の集落跡が検出されている(青森県教育委員会2020)。

また古野(2)遺跡の立地する段丘面では、西側に古野(1)遺跡が存在するものの、目滝川に沿った北西方向、根戸内沢へ向かう西側にも標高40m前後の平坦地や緩斜面が広がっており、さらなる遺跡の存在が想定される。

平成30・令和元年度における2箇年の発掘調査によって、古野(2)遺跡のある目滝川左岸の段丘面と段丘崖の縄文時代各期における土地利用の一端が見えてきた。

2 古野(2)遺跡の縄文時代における変遷

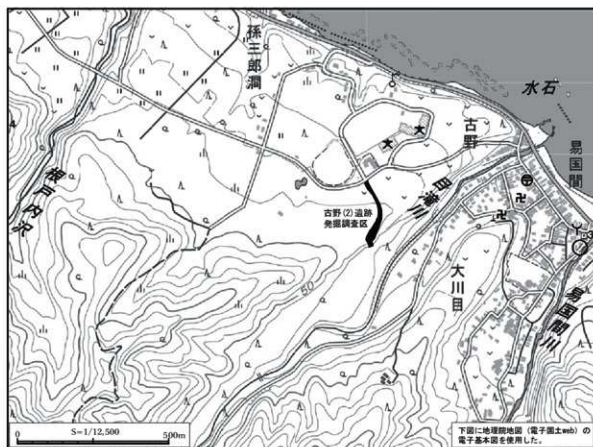
縄文時代の遺構・遺物は、前期後葉の円筒下層d式期と中期後葉の榎林式期の2時期が主体である(図147)。その他、遺構・遺物が検出された時期は、中期末葉の大木10式併行期、後期前葉の十腰内I式期であり、共に土坑1基ずつの検出にとどまる。さらに縄文時代の溝状土坑も15基検出されている。これまでの調査で、青森県全体では溝状土坑は津軽地域に少なく、八戸地域や上北地方北部太平洋側の六ヶ所村などの県域東半の南部地方における偏在が知られている。近年、下北半島の陸奥湾に面した横浜町やむつ市域においてもまとまった検出が相次いでおり、本遺跡例はさらに北に位置する下北半島北部での貴重な調査例となった。

遺物のみ出土した時期は、後期後葉と晩期前葉および中葉である。

ここでは、本遺跡の中心である縄文時代前期後葉と中期後葉の遺構について概観する。なお各種遺物の詳細なまとめは、本章各節に譲る。

(1) 縄文時代前期後葉 円筒下層d式期

竪穴建物跡2棟(SI03・09)と土坑3基(SK12・16・21)、平場における遺物の集中箇所1箇所(BL-01)、斜面捨て場を検出した(図147)。斜面捨て場は、Q-48グリッド付近での遺物出土が多く中心域と考えられるが、斜面全域でもこの時期の遺物が出土している。本遺跡の斜面および落ち際の平地に位置する土坑は大部分が時期不明であるが、円筒下層d式土器の小破片を出土するものが多く、この時期に帰属するものも一定数存在すると考えられる。



古野(2)遺跡周辺図



図 146 遺跡及び周辺の地形

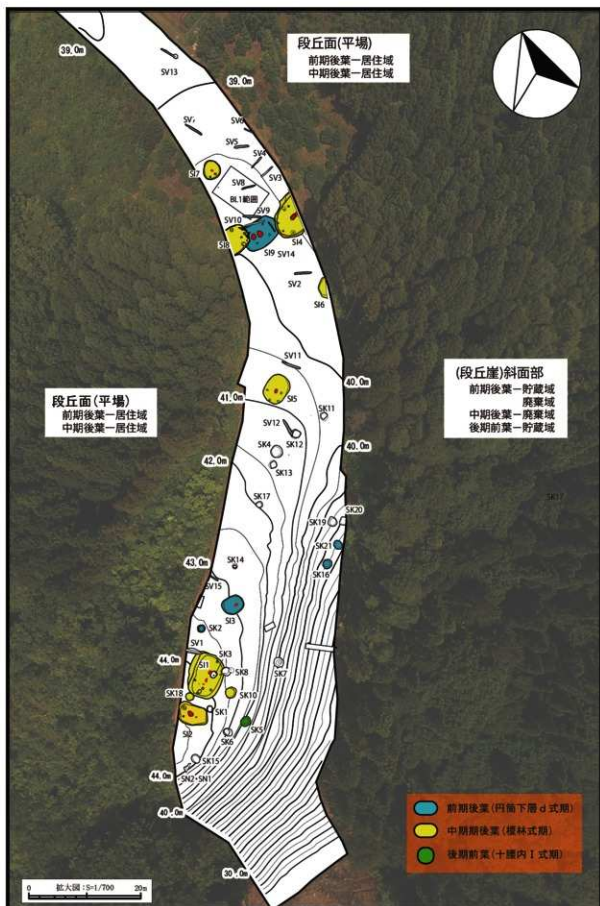


図 147 古野(2)遺跡 (空中写真上に遺構配置図を重ねたものでややズレが生じている)

SI03の南西に位置するSK02はフラスコ状土坑であり、この時期には居住域内に貯蔵機能も有していたことがわかる。さらに斜面捨て場の中心域に位置するSK16とSK21もこの時期のものである。SK16はフラスコ状であることから、この段丘崖の中でもやや緩やかな斜面であるこのエリアは、集落形成当初は貯蔵域として利用され、その後、他の斜面域同様に廃棄域へと変化したことが想定される。

円筒下層d2式土器の上半部(42-1)は、SI09の床面や炉および覆土、その上位のS-33・34グリッド第Ⅲ層で破片が出土しているが、一つの破片が50m以上離れたR-46グリッドのSK20の堆積土から出土し、接合している。SK20土坑は斜面に位置し、埋没時間は早いことから、両地点の土器の残存・移動にはそれほど大きな時間差は無いはずである。SI09廃絶後、その窪みに廃棄された大型土器は、大部分がその付近に残存したが、土器片一片は、なんらかの過程を経て50m以上離れたSK20が埋まる時に入り込んだものである。またこの土器が下半部の大部分を欠くことから、それらも含めて、斜面捨て場に廃棄されたものもあったのかもしれない。

本調査区の遺構内外で出土した縄文時代前期の土器は、ほぼ円筒下層d式に収まることは、第2章や本章前節で述べられており、現時点では、古野(2)遺跡の今回の調査区は前後の時期をほぼ含まない円筒下層d式単相の集落跡と言える。円筒土器文化の拠点的な集落に見られる、廃絶遺構への廃棄行為の量的・時間的累積により、やがて地表面を越えて上位や横位に展開し形成される「盛土」そのものは当遺跡では確認されていないが、斜面への遺物や土砂の一定の廃棄行為は継続され、斜面捨て場が形成されている。

本調査区内では、この時期の堅穴建物跡と認定したものは2棟のみであるが、当遺跡出土土器の大部分が斜面捨て場から出土した縄文時代前期後葉のものであり、到底、2棟の堅穴建物跡からだけの廃棄量では、この捨て場の形成は不可能である。

前述したように、今回の調査区の西側から北東側へは居住空間に適した平地が続いており、当該期より多くの堅穴建物跡が存在していたことは確実である。

今回の調査において、僅かに2棟の確認に止まった当該期の堅穴建物跡であるが、その構造は近年の円筒土器文化期の堅穴建物跡研究成果と整合性を示している(三内丸山遺跡センター 2020、図148)。

SI03は、床面長軸長3m強の小型の堅穴建物跡である。地床炉は主軸上やや壁寄りに位置し、支柱穴は検出されていない(図148・149)。

SI09は、床面長軸長6m強の中型の堅穴建物跡である(図148・151)。主軸上に3~4基の焼土あるいは炉が並んでいる。炉1は床面をやや掘り下げた掘込炉であり、その火床面に接して礫石器1点(43-4)が出土している(図40・41・43、写真19・20)。また最も東側に位置する炉跡に接して、4点の扁平な礫石器(43-5、44-1~3)が直線状に並んで出土している、支柱は並んだ炉を挟むように、4基が配されている。

両堅穴建物跡は楕円形あるいはやや隅丸方形気味であること、小型のものは支柱穴がみつからないこと、中型は4本支柱であること、炉は地床炉であることなど、前述の近年の研究成果の範囲におさまるものであり、海峡域の縄文時代前期後葉の堅穴建物跡が、北海道域と青森県域の円筒土器文化と連動していたことを良く示している。

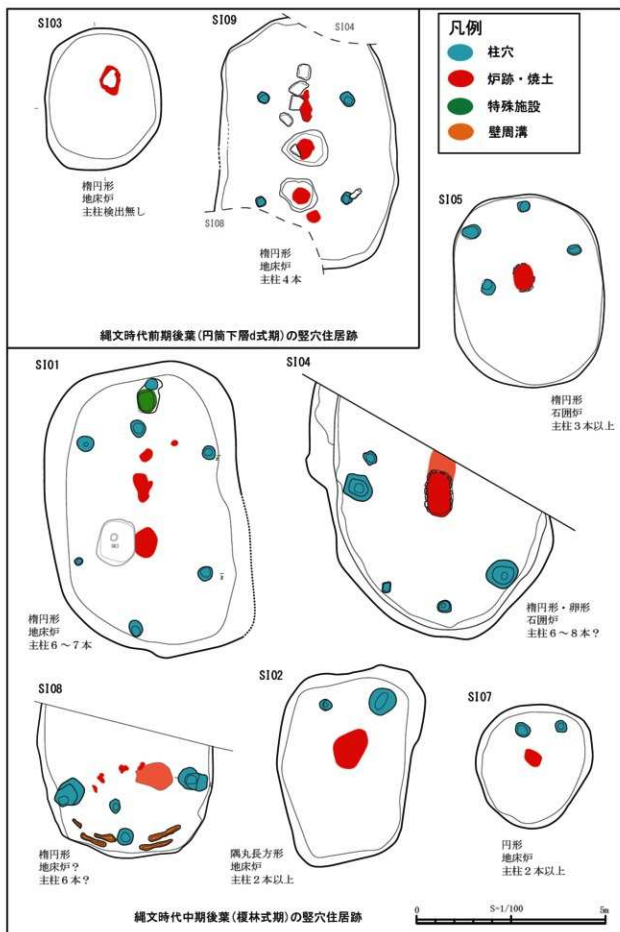


図 148 古野(2)遺跡の時期別の竪穴建物跡

(2) 縄文時代中期後葉 榎林式期

本遺跡においては、この時期に比定した堅穴建物跡の多くが、時期判別が確実な遺物の出土が少ない。唯一、第7号堅穴建物跡のみ、床面から完形土器が一個体出土しているが、全面が縄文地文のものであり、時期決定には不確実性が伴っている。他の堅穴建物跡は、床面付近からの僅かな榎林式期の土器片や炭素年代測定値をその帰属時期の根拠としている。直接的な時期決定にはやや弱い部分もあるが、堅穴建物跡堆積土内の出土土器片や調査区全域の出土遺物や堅穴建物跡の構造から考えると、榎林式期のものとすべきものが多い。また本調査区は、直前直後の時期の遺構・遺物をほぼ含まない榎林式期単相の集落跡と考えられ、県域全体で見ても貴重である上、斜面捨て場から出土した土偶(図114)は、津軽海峡南岸域での土偶祭祀の存在を裏付けるものとなった。

本遺跡の堅穴建物跡のうち、当該期のものであることが、確実と考えられるもの3棟(SI01・04・05)、可能性が高いもの3棟(SI02・07・08)、可能性があるもの1棟(SI06)が検出された(図147)。

土坑は、SK10が底面出土炭化物の年代測定値がこの時期を示し、SK18内から出土した無文の完形壺の帰属時期が榎林式期あるいは大木10式併行式期と考えられる程度、と非常に少ない。

本遺跡におけるこの時期の堅穴住居跡は、北側にSI04・07・08、SI05のみの中央部、南側のSI01・02の3箇所程度のまとまりが見られる。

SI01・04・05・08は、主軸方向が概ね北東-南西方向を向く。これは前期後葉のSI03・09も同様の主軸方向を有することから、段丘面と段丘崖の境界の方向や背後の山塊から続く緩やかな尾根筋の方向といった地形の影響を受けているのかもしれない。道路幅での調査であることから、本遺跡の集落構造については不明なことが多いが、縄文時代前期後葉同様に、段丘面の平坦部に居住域を設け、遺構周辺域に加えて、斜面への廃棄行為が行われていたことは間違いない(図152)。

各堅穴建物跡に目を移すと、第1号堅穴建物跡(SI01)は楕円形を呈し、主軸上に複数の焼土および炉跡が残る。主柱は壁寄りに6本が配され、片方の壁寄りに特殊施設の可能性のある土坑1基が検出されている(図148・149)。

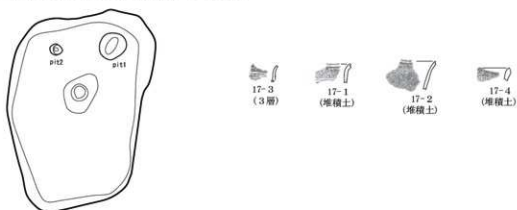
SI04は、南半分のみの調査となったが、卵型あるいは楕円形を呈し、長軸上にU字形に礎が配された大型の石囲炉が残されていた(図148・150)。調査区内の堅穴建物跡部分を利用し、反転したものを図Eに掲載した。この反転図の大きさの堅穴建物跡であれば、長軸が約9～10mと想定される。調査部分では柱穴は壁際に配されており、北半分を含めれば全体では8～10m程度と推定される。作り替えの末最終的に残された大型の石囲炉には、あたかもシメトリを意識したかのように、長さ15cm前後の炉石13個がバランス良く並べられていた。片側には炉石が無く、逆U字形を呈し、潜在的な複式炉の影響も感じさせるものである。

SI05は、床面長軸長5m程度の中型の堅穴建物跡である(図148・150)。楕円形を呈し、中央からやや片側に寄って、石囲炉が作られていた。片壁側に3基の柱穴が残されているが、反対側では検出することは出来なかった。第8号堅穴建物跡(SI08)は片側のみの検出であるが、壁際に3基の柱穴が配され、その間に壁周溝が巡る。

第1号竖穴建物跡(縄文時代中期後葉 榎林式期)



第2号竖穴建物跡(縄文時代中期後葉 榎林式期)



第3号竖穴建物跡(縄文時代前期後葉 円筒下層d式期)

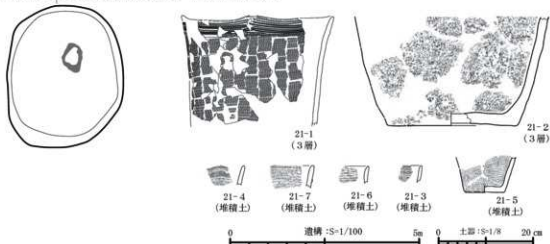
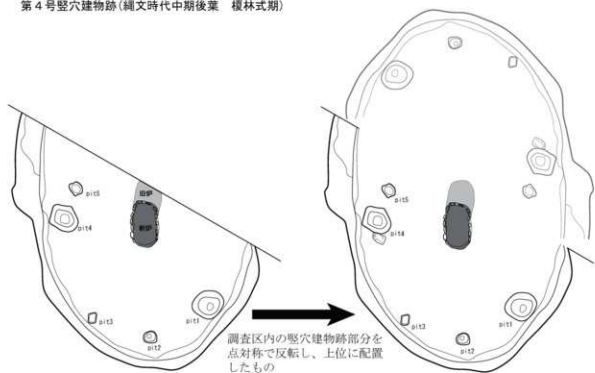


図 149 竖穴建物跡と主な出土土器 (1)

第4号竪穴建物跡(縄文時代中期後葉 榎林式期)



第5号竪穴建物跡(縄文時代中期後葉 榎林式期)

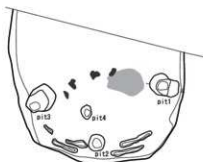


図150 竪穴建物跡と主な出土土器(2)

第7号竪穴建物跡(縄文時代中期後葉 榎林式期)



第8号竪穴建物跡(縄文時代中期後葉 榎林式期)



第9号竪穴建物跡(縄文時代前期後葉 円筒下層d式期)

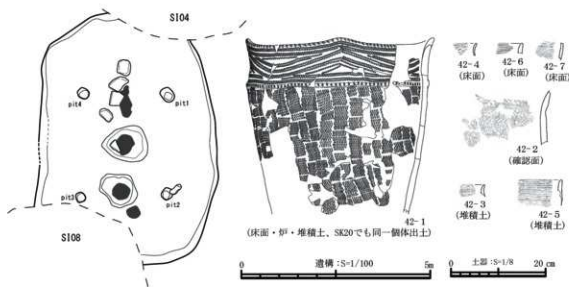


図 151 竪穴建物跡と主な出土遺物 (3)

第2・7号竪穴建物跡 (SI02・07) は、やや不整な円形や偶丸方形である (図 148・149・151)。

第1・4・5・8号竪穴建物跡は、いずれも楕円形基調の形態で、石圍炉や地床炉を有し、主柱配列亀甲形の片側3基が検出されている。これらも近年の円筒土器文化期の竪穴建物跡研究成果に対応するもので、北海道南部・青森県域の榎林式期の竪穴建物跡の特徴を良く示している (三内丸山遺跡センター 2020、図 148)。

本県域では、榎林式期の集落構造が明らかとなっている遺跡が極めて少ない。拠点集落である六ヶ所村富ノ沢 (2) 遺跡では馬蹄形状に竪穴建物跡がまとまっており、西目屋村水上 (2) 遺跡では、大型竪穴建物跡と中・小型竪穴建物跡の組み合わせの2群が検出されている。

縄文時代前・中期の円筒土器文化期の「列状拠点集落」から、本県全域で後前期葉十腰内I式期に顕在化する環状掘立柱建物跡を主とする「環状拠点集落」へ至る過程は明らかになっていない。言い換えれば、本県域では「道路と墓列を中心に展開する直線ムラ」から、「中央広場・墓地を中心に展開する円形ムラ」への変化が、どの土器型式期に行われたかが現時点では不明であり、十腰内I式期あるいはその直前段階に、大型環状列石の到来と共に唐突に円形ムラの完成形が出現するように見える。

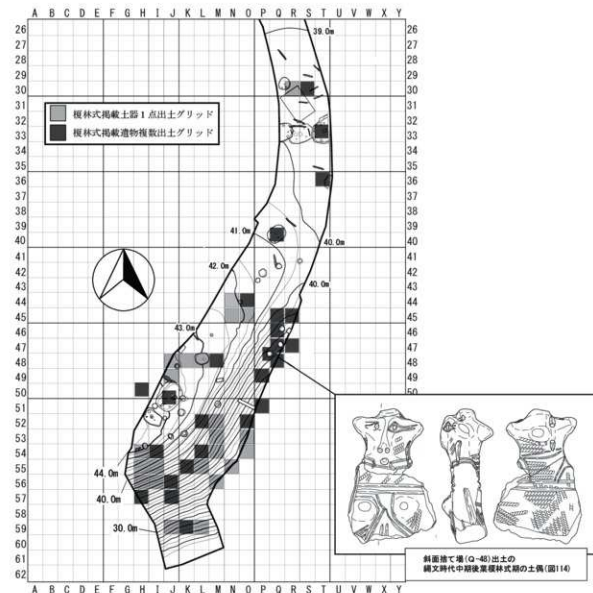


図152 古野(2)遺跡 榎林式土器(掲載分)出土位置図(S=1/1000)

円筒土器上層d・e式と大木式8a式土器との接触域のすぐ南に位置する岩手県盛岡市城や宮古市城は、榎林式併行の大木8b式段階の環状集落が見られるエリアである。これらの集落構造が、大木系文物の進出と共にいずれかの時期に北緯40度ラインを越えて、馬淵川流域や米代川流域の円筒土器文化最南端域の拠点集落などに、採用された可能性があろうが、明確な実例は見出せない。

岩手・秋田県北域の大木系集落・円筒系集落の中期後葉における動向と共に、青森での大木文化の影響も考える必要がある。さらに確実に併行関係にある榎林式-大木8b式の中期中葉・中期後葉への時期分類の研究者間における齟齬も早急に解決すべき問題である。

本県における榎林式期・最花式期・大木10式併行期の集落にも、集落の明確な環状化・同心円化は今のところ認められておらず、今後も中期後葉～後期初頭における集落構造に着目する必要がある。また津軽海峡対岸の道南部の遺跡には、下北半島よりも榎林式あるいは最花式併行の遺跡が多く、その地域での集落構造の変遷も注視すべきである。

(永嶋)

引用・参考文献

【論文等】

- 青森県史編さん考古部会 2017『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文文化創期～中期』
- 青森県史編さん考古部会 2013『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』
- 江坂輝弥 1990『土偶』校倉書房
- 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社
- 岡村道雄 2018「第5章 第6節 日本列島における円筒土器文化—多文化圏との比較の視点—」『三内丸山遺跡 44 総括報告書 第2分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集
- 小笠原雅行 2002「第4章 第2節 5 土偶」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史編さん考古部会
- 小保内裕之 2008「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木10式併行土器）」『総覧 縄文土器』アムプロモーション
- 折登亮子 2019「古野（2）遺跡出土の土偶について」『風間浦村制施行130周年記念講演 発表資料』
- 上條信彦 2014「「扁平石器」の形態的分布からみた円筒土器文化圏の動態—半円状扁平打製石器、袂入扁平打製石器、袂入扁平磨製石器を中心に—」『青森県考古学 第22号』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 古泉弘 1985「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』第13号 雄山閣
- 齋藤岳 2002「青森県における石器石材の研究について」『青森県考古学会三十周年記念論集』青森県考古学会
- 齋藤岳 2004「三内丸山遺跡の磨製石斧について」『特別史跡三内丸山遺跡年報7』青森県教育委員会
- 齋藤岳 2018a「第5章 第2節 第3項 石器」『三内丸山遺跡 44 総括報告書 第2分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集
- 齋藤岳 2018b「円筒土器文化の石器群の成立と北海道式石冠」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要 第23号』
- 関根達人 2012「第11章 第2節 下北半島における晩期縄文土器の変遷」『下北半島における亀ヶ岡文化の研究』弘前大学付属亀ヶ岡文化研究センター
- 関根達人・児玉大成 2013「第1部 2 土器の編年」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』青森県史編さん考古部会編
- 「三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究」会 2011『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究—資料集—』
- 三内丸山遺跡保存活用推進室 2016「円筒土器総合文化データベース作成」『特別史跡 三内丸山遺跡年報—19—』青森県教育委員会
- 三内丸山遺跡センター 2019「円筒土器文化における集落の実態をさぐる—時間差・地域差・存続期間の比較研究—」『特別史跡 三内丸山遺跡 研究紀要—1—』
- 高橋哲 2013「青森県の石器組成について—石器の組み合わせについて—」『青森県考古学』第21号
- 高橋哲 2016「磨製石斧の生産と流通」『津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会 2016年度弘前大会実行委員会
- 高橋哲 2018「円筒土器文化圏における磨製石斧の考察—三内丸山遺跡と水上（2）遺跡出土の磨製石斧の比較を通して—」『特別史跡三内丸山遺跡 年報—21—』青森県教育委員会

高橋哲 2020 「三内丸山遺跡出土の石織の変遷について—北盛土出土資料を用いて—」『特別史跡三内丸山遺跡研究紀要』1

茅野嘉雄 2018 「第5章 第2節 第1項 1 各地域における円筒下層土器の変遷と分布状況」『三内丸山遺跡44 総括報告書 第2分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集

成田滋彦 2011 「北海道・東北北部における土偶型式—縄文時代中期後葉～末葉—」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 第16号』

永井久美男編 1998 『近世の出土銭Ⅱ—分類図版篇—』兵庫埋蔵銭調査会

濱松優介 2018 「下北における縄文時代の遺跡分布」『2018 青森県考古学会公開講座 発表資料』

濱松優介・折登亮子 2020 「青森県域における縄文時代前期末～中期初頭の土器の様相について—東道ノ上(3)遺跡出土資料を中心に—」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第25号

福田友之 2014 『津軽海峡域の先史文化研究』六一書房

水ノ江和同 2019 「日本列島の球状耳飾」『考古学雑誌』第102巻 第1号日本考古学会

山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

【発掘調査報告書】

青森県教育委員会 1974 『中の平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第25集

青森県教育委員会 1976 『水木沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第34集

青森県教育委員会 1981 『山崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第68集

青森県教育委員会 1986 『大湊近川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第104集

青森県教育委員会 1994 『熊ヶ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第180集

青森県教育委員会 2007 『沢ノ黒遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第435集

青森県教育委員会 2012 『涌館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第521集

青森県教育委員会 2016 『酪農(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第568集

青森県教育委員会 2017 『水上(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第575集

青森県教育委員会 2017 『青森県遺跡詳細分布調査報告書29』青森県埋蔵文化財調査報告書 第587集

青森県教育委員会 2017 『三内丸山遺跡44 総括報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集

青森県教育委員会 2018 『青森県遺跡詳細分布調査報告書30』青森県埋蔵文化財調査報告書 第597集

青森県教育委員会 2020 『古野(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第611集

秋田県教育委員会 2001 『松木台Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書 326集

秋田県埋蔵文化財センター 2007 『小又川の一万年 森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の記録』

一戸町教育委員会 2015 『御所野遺跡Ⅴ 総括報告書』一戸町文化財調査報告書70集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『田代遺跡発掘調査報告書 農免道路整備事業 江差家地区関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 262集

(公財)岩手県文化振興事業団 2019 『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書694集

鹿角市教育委員会 1984 『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料 26集

- 上磯町教育委員会 1981『館野 2 遺跡』
- 川内町教育委員会 1992『鞍越・斐川遺跡発掘調査報告書』
- 川内町教育委員会 2001『田野沢山(1)遺跡発掘調査報告書』
- 木古内町教育委員会 1995『釜谷 5 遺跡』
- 木古内町教育委員会 1998『亀川 3 遺跡』
- 木古内町教育委員会 1999『釜谷遺跡』
- 木古内町教育委員会 2003『泉沢 2 遺跡 A 地点』
- 木古内町教育委員会 2003『大釜谷 3 遺跡』
- 木古内町教育委員会 2003『新道 2 遺跡 II 北地点』
- 木古内町教育委員会 2004『蛇内遺跡』
- 小泊村教育委員会 2003『坊主沢遺跡発掘調査報告書』
- 佐井村教育委員会 1985『八幡堂遺跡発掘調査報告書 1・2』
- 戸井町教育委員会 1988『釜谷 2 遺跡』
- 戸井町教育委員会 1990『浜町 A 遺跡 I』
- 戸井町教育委員会 1991『浜町 A 遺跡 II』
- 戸井町教育委員会 1992～1996『戸井貝塚 I～IV』
- 戸井町埋蔵文化財保存館友の会 2001『高屋敷川 1 遺跡』
- 七飯町教育委員会 1986『七飯本町 1・2 遺跡』
- 七飯町教育委員会 2000『国立療養所裏遺跡』
- 日本鉱業株式会社船川製油所 1979『大畑台遺跡発掘調査報告書』
- 函館市教育委員会 1986『サイベ沢遺跡 II』
- 函館市教育委員会 2003『豊原 4 遺跡』
- 函館市教育委員会 2008『桔梗 2 遺跡』
- 函館市教育委員会 2011『亀田中野 1 遺跡』
- 函館市教育委員会 2013『東山 A 遺跡, 亀田中野 2 遺跡』
- 函館市教育委員会 2014『サイベ沢遺跡』
- 函館市教育委員会 2014『東山 b 遺跡, 亀田中野 2 遺跡(2)』
- 函館市教育委員会 2015『サイベ沢遺跡(2)』
- 函館市教育委員会 2017『石川 3 遺跡』
- 東通村教育委員会 1985『石持納屋遺跡発掘調査報告書』
- 福島町教育委員会 1985『館崎遺跡』
- 北斗市教育委員会 2013『茂辺地 4 遺跡』
- 北斗市教育委員会 2015『茂辺地 4 遺跡』
- 北斗市教育委員会 2017『村前ノ沢遺跡』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987『函館市石川 1 遺跡』第 45 集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987『函館市桔梗 2 遺跡』第 46 集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1997『函館市西桔梗 1 遺跡(2)』第 122 集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996『函館市石倉貝塚』第 109 集

- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987『尻岸内町中浜E遺跡』第22集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1993『七飯町鳴川右岸遺跡』第87集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996『七飯町鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』第112集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1984『湯の里遺跡群(湯の里2・湯の里3・湯の里4・湯の里5・湯の里6)』第18集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985『木古内町建川1遺跡・新道4遺跡』第33集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1986『上磯町矢不來2遺跡』第37集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1986『木古内町建川2遺跡・新道4遺跡』第43集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1997『上磯町茂別遺跡』第121集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2006『矢不來6遺跡・矢不來11遺跡・館野4遺跡』第235集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2006『矢不來8遺跡(2)・矢不來10遺跡』第244集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2007『矢不來6遺跡(2)・矢不來9遺跡・矢不來11遺跡(2)』第257集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2010『木古内2遺跡』第278集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2010『大平遺跡・大平4遺跡』第280集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011『蛇内2遺跡』第281集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011『館野遺跡(2)』第282集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011『館野2遺跡A地区・B地区』第283集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2012『木古内2遺跡(2)』第293集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2012『札蒔5遺跡』第294集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2012『館野6遺跡(1)』第295集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『札蒔6遺跡』第301集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『館野2遺跡 C地区』第303集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2014『当別川左岸遺跡』第310集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015『新道4遺跡(4)』第320集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015『大平遺跡(2)』第321集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『大平遺跡(3)』第328集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『泉沢5遺跡』第330集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『館崎遺跡』第333集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『幸連3遺跡』第343集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016『館野6遺跡(2)』第327集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2018『札蒔5遺跡(2)』第353集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2019『札蒔8遺跡』第362集
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2019『テエタ43号』
- 松前町教育委員会 2005『東山遺跡』
- 松前町教育委員会 1978『鬼沢b・棚石遺跡』
- 脇野沢村教育委員会 1998『稲平遺跡』
- 脇野沢村教育委員会 1998『田野沢遺跡 外崎沢(1)遺跡』
- 脇野沢村教育委員会 1998『瀬野遺跡』

表9 土器観覧表

図	No	器種	遺構	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口頸部	区画	地文、胴部以下	内面 調整	備考	型式
13	1	深鉢	S101	堆積土				口-胴	平口縁小、LR・R平行行			77°	編織合	円筒下層d
13	2	深鉢	S101	堆積土上層				口-胴	口唇・今平ミ、平口縁、LR平行行	条痕縦走		13°	外面:煤付着	円筒下層d
13	3	深鉢	S101	検出面				口	平口縁、R平行行			13°		円筒下層d
13	4	深鉢	S101	2層				口	口唇・LR縦押、平口縁、LR平行行			13°		円筒下層d
13	5	深鉢	S101	堆積土				口	口唇・黒沢、平口縁小、LR平行行			13°		円筒下層d
13	6	深鉢	S101	堆積土				口	LR平行行	條帯		77°	編織合	円筒下層d
13	7	深鉢小	S101	堆積土				胴			前歯状沈線(2本組沈線)	13°		大木系小
13	8	深鉢	S101	検出面				口-胴	口唇・沈線、波状口縁、R斜行			13°	外面:煤付着	椀鉢
13	9	深鉢	S101	2層				口-胴	口唇・面取、平口縁		LR横沢、横走沈線3条	13°		椀鉢
13	10	深鉢	S101	堆積土				口	口唇・沈線、渦巻文、波状口縁			13°		椀鉢
13	11	深鉢	S101	2層				胴	遮形円形文		LR縦行	13°		椀鉢
13	12	深鉢	S101	2層				胴			有縦円形文、R斜行	13°		椀鉢
13	13	深鉢	S101	堆積土				胴			LR斜行(縦円)・沈線文(弧状)	13°	外面:煤付着	椀鉢
13	14	深鉢	S101	床面直上				胴			LR斜行(縦円)・縦沈線文	77°		椀鉢
13	15	深鉢	S101	1層				胴			LR縦行、沈線文	13°		椀鉢
13	16	深鉢	S101	堆積土				胴			平行沈線間に円形刺突	77°		椀鉢
13	17	深鉢	S101-S801	3層				口-胴	波状口縁、腰部から左右に伸びる沈線文			13°	外面:煤付着	椀鉢小
13	18	深鉢	S101	2層				口-胴	波状口縁小、口唇・沈線1条、波状口縁			13°		椀鉢
13	19	深鉢	S101-S801	1, 2層				口-胴	波状口縁			13°		椀鉢
13	20	深鉢	S101	堆積土				口-胴	波状口縁			13°		椀鉢
13	21	深鉢	S101	2層				口-胴	口唇・LR口、波状口縁			13°	外面:炭化物	椀鉢
13	22	深鉢	S101	堆積土				口	波状口縁			13°		椀鉢
13	23	深鉢	S101	堆積土				口-胴	平縁小			13°	外面:煤付着	椀鉢
13	24	深鉢	S101	堆積土				口-胴	平縁			13°		椀鉢
13	25	深鉢	S101	堆積土				口-胴	平縁			13°	外面:炭化物付着	椀鉢
13	26	鉢	S101-S801	1, 2層		7.1		胴-底			羽状横文(LR・R縦行)、平底	13°		椀鉢式以降
13	27	深鉢	S101	床面直上		8.2		胴-底			中平・1L斜行と3L縦走で羽状、底部:平底、副代痕小	13°		椀鉢小
13	28	深鉢	S101	堆積土		4.2		底				13°		子腰内1小
17	1	深鉢	S102	堆積土				口-胴	口唇・沈線、波状口縁小			77°		椀鉢
17	2	深鉢	S102	堆積土				口-胴	口唇・沈線、波状口縁小			13°	海崎骨針合	椀鉢
17	3	深鉢	S102	3層				胴	胴部:無文、平行沈線間に刺突列			13°		椀鉢
17	4	深鉢	S102	堆積土				口	波状口縁			13°		椀鉢
21	1	深鉢	S103	3層	C2, 3)			口-胴	平口縁、LR・R斜平行行	條帯にLR押	多筋	77°	編織合	円筒下層d2
21	2	深鉢	S103	3層	(13, 6)			胴-底			R多筋	13°	被熱顕著	円筒下層d
21	3	深鉢	S103	堆積土				口	平縁小、R平行行			13°		円筒下層d
21	4	深鉢	S103	堆積土				口	波状口縁、LR平行行			13°		円筒下層d2
21	5	深鉢	S103	堆積土		8.2		胴-底			R多筋	13°	海崎骨針合	円筒下層d
21	6	深鉢	S103	堆積土				口	1L山形押			77°		円筒下層d
21	7	深鉢	S103	堆積土				口	平縁、LR・R山形押	條帯・横文押E		13°		円筒下層d
26	1	深鉢	S104	堆積土上層				口-胴	平口縁、LR平行行	條帯+上下にL斜行	RまたはLR縦走	77°	外面摩滅	円筒下層d
26	2	深鉢	S104	2層				口-胴	口唇・1L口、LR・R平行行	條帯	R単筋1	13°	編織合	円筒下層d
26	3	深鉢	S104	堆積土				口-胴	平縁、LR・R平行行	條帯	多筋小	77°	外面:炭化物付着顕著	円筒下層d
26	4	深鉢	S104	堆積土下層				口-胴	LR・R・L平行行	LR押	多筋(0度)	13°		円筒下層d
26	5	深鉢	S104	2層				口	口唇・R縦押、平縁、LR・R平行行、平行刺突(角形工具、平載竹管)			13°		円筒下層d
26	6	深鉢	S104	堆積土上層				口	平縁、LR平行行	條帯		13°		円筒下層d
26	7	深鉢	S104	堆積土上層				口	口唇・1L口、平縁、LR平行行	筋曲小		77°	編織合	円筒下層d
26	8	深鉢	S104	堆積土上層				口-胴	口唇・1L口、平縁小、1L山形押、胴部:横円形筋付・上下に地成後に穿孔	横円形筋付・LR押		13°	編織合	円筒下層d2

図	No	遺構	遺構	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	節高 (cm)	部位	口縁部	区画	地文、胴部以下	内面 調整	備考	型式
26	9	深鉢	S104	堆積土上層				口-胴	口唇:L&R縦押, 平鉢, LR平行	隆帯-L&R縦押	LR斜行(縦回)	13°	表面から穿孔途中	内筒下層d
26	10	深鉢	S104	3層				口	LR・丸山形押			??	縦溝含	内筒下層d
26	11	深鉢	S104	堆積土上層				口	底状口縁(唐煎裏配), LR平行押, 逆T字形貼付			13°		内筒下層d
26	12	深鉢	S104	堆積土上層				口	口唇:L&R縦押, 平鉢, LR斜行		LR斜行	13°	縦溝含	内筒下層d
26	13	深鉢	S104	堆積土上層		(10.4)		胴-底			R車筋1	13°	縦溝含, 砂粒(~φ1mm)多, 輪幅幅2~3cm	内筒下層d
26	14	深鉢	S104	堆積土				口-胴	口唇:沈線・突起部過巻状沈線, 底状口縁, LR斜行		LR斜行	??		覆鉢
26	15	深鉢	S104	堆積土上層				口	口唇:沈線, 底状口縁, LR斜行		R&R斜行	??	外面炭化物付着	覆鉢
26	16	深鉢	S104	堆積土上層				口	底状口縁, 沈線		R&R縦走	??	細穿孔	覆鉢
26	17	深鉢	S104	堆積土下層				口-胴	口唇:沈線, 底状口縁, 無文	平行沈線2条	摩滅	13°		覆鉢
26	18	深鉢	S104	堆積土下層				口-胴	口唇:沈線, 底状口縁	平行沈線2条	R&R斜行(縦回)小	13°		覆鉢
26	19	深鉢	S104	堆積土下層				口	口唇:沈線, 底状口縁, LR斜行(縦回)		LR縦回(斜行)	13°		覆鉢
26	20	傘	S104	7層	(14.0)			口-胴	平鉢, 無文		無文, 部位の構成把手から左右に隆帯展開	13°	外縁接合	覆鉢
26	21	傘	S104	5層				胴			沈線文・無文	??		覆鉢小
32	1	深鉢	S105 P113	堆積土				口	R車筋1・丸山形押			13°	縦溝含, 外面煤付着	内筒下層d
32	2	深鉢	S105 P113	堆積土				口	底状口縁小	無	R車筋1	??	縦溝含, 外面煤付着	内筒下層d
32	3	深鉢	S105	堆積土				口	口唇:L沈線2条, 底状口縁, 沈線文		R&R斜行	13°	外面煤付着	覆鉢
32	4	深鉢	S105	床面	(6.0)			胴-底			R&R斜行, 縦沈線	13°	32-5と同一小	覆鉢
32	5	深鉢	S105 P112	堆積土				口-胴	底状口縁, 無文		LR汎, 唐煎文	13°	32-4と同一小	覆鉢
32	6	深鉢	S105 P112	堆積土				口-胴	底状口縁小, 無文		R&R縦走, 沈線文(平行沈線3条)	13°		覆鉢
32	7	深鉢	S105 P112	堆積土				口	口唇:LR回, 底状口縁		R&R縦走	13°	外面煤付着	覆鉢
32	8	深鉢	S105 P112	堆積土				口	底状口縁		摩滅	13°	内面:タール状炭化物付着	覆鉢
33	5	深鉢	S106	堆積土				口	口唇:L沈線, 底状口縁		LR斜行, 沈線文(縦)	13°	口唇部・外面煤付着	覆鉢
33	6	深鉢	S106	堆積土				口	底状口縁		LR斜行	??	口唇部炭化物付着	覆鉢
35	1	深鉢	S107	堆積土				口	平鉢口縁, LR・丸山形押			13°	縦溝含	内筒下層d
35	2	深鉢	S107	堆積土				口	平鉢, LR山形押小			13°	縦溝含	内筒下層d
35	3	深鉢	S107	堆積土				口	平鉢小, LR・R平行押			13°	縦溝含	内筒下層d
35	4	深鉢	S107	堆積土				口-胴	平鉢, LR・R1平行押	隆帯	L車筋1	13°	縦溝含	内筒下層d
35	5	深鉢	S107	堆積土				口-胴	平鉢, LR・L・R平行押	隆帯にLR・R押	摩滅不明	13°	縦溝含	内筒下層d
35	6	深鉢	S107	堆積土				口-胴	口唇:L平鉢, 平鉢, R平行押	無	R車筋1	13°	縦溝含	内筒下層d
35	7	深鉢	S107	堆積土				口	平鉢, LR・R平行押	隆帯にR押		13°	縦溝含	内筒下層d
35	8	深鉢	S107	堆積土				口	摩滅不明		摩滅不明	13°	縦溝含	内筒下層d
35	9	深鉢	S107 P111	堆積土				口-胴	平鉢		LR車筋1	13°	縦溝含	内筒下層d
35	10	深鉢	S107	堆積土				口-胴	平鉢, 丸・丸山形押にLR貼付	基底部, LR	R車筋	13°	縦溝含	内筒下層d
35	11	深鉢	S107	堆積土				口-胴	口唇:L&R縦押, 平鉢, LR平行押	口唇部貼付	LR斜行・原体未編成	13°	縦溝含	内筒下層d
35	12	深鉢	S107	堆積土				口-胴	口唇:L&R回, 平鉢, LR斜行	基底部	LR斜行	13°	縦溝含, 外面炭化物付着	内筒下層d
35	13	深鉢	S107	堆積土				口-胴	LR・L平行押	隆帯にLR押	L車筋1	13°	縦溝含	内筒下層d
35	14	胴	S107	堆積土				口-胴		隆帯にLR貼付	上面:L&R斜行, R斜行, L多筋	13°	縦溝含, φ7mm程の細穿孔	内筒下層d
35	15	深鉢	S107	堆積土				胴			L・R車筋1A	13°	縦溝含	内筒下層d
35	16	深鉢	S107	3層, 堆積土	(10.4)			胴-底			L車筋(角輪), 上付底	13°	縦溝含, 外面炭化物付着	内筒下層d
35	17	深鉢	S107	床面	19.2	7.5	19.7	口-底	口唇:L&R回, 平鉢		LR底文後半ノコ調整小, 平底	13°	内面炭化物	覆鉢
38	1	深鉢	S108	堆積土, 床面直上	(30.0)			口-胴	平鉢, LR・丸山形押, LR縦押	隆帯	L車筋1	13°	縦溝含	内筒下層d
38	2	深鉢	S108	堆積土				口-胴	平鉢小, LR三角形押	隆帯	R車筋(角輪)	13°	輪幅幅4cm	内筒下層d
38	3	不明	S108	床面				胴			R&R斜行または縦走	??		10層内1小

図	No	部種	遺構	『Fy』	層位	口径 (m)	底径 (m)	部高 (m)	部位	口部部	区画	地名、欄部以下	内面 調査	備考	型式
38	4	深鉢小	S108		堆積土				胴			1段横走	①?		後時期
38	5	深鉢小	S108		堆積土				胴			格子状文	①?		十層内1
38	6	深鉢小	S108		堆積土				胴			1段縦走、横円文か	①?		十層内1
42	1	深鉢	S109	①-33, ② ⑤-34, ① SK20-3 層	床底, ⑤, 堆積土	40.0			口-胴	口唇: 丸口, 波状口縁(4 単位), 丸・1段山形押	縁帯に丸押	R多筋(角輪)	①?	外面: 炭化物 付着	内筒下層d2
42	2	深鉢	S109		検出面				口-胴	山形口縁か, 1段2集1編押	屈曲部にR 回	R多筋	①?		内筒下層d
42	3	深鉢	S109		堆積土				口	口唇: 1段横押, 平縁 か, 1R・R平行押か			①?		内筒下層d
42	4	深鉢	S109		床面				口	平縁か, 1平行押			①?		内筒下層d
42	5	深鉢	S109		堆積土				口-胴	口唇: 1段R, 平縁, 1R平行 押	屈縁帯	R多筋	①?		内筒下層d
42	6	深鉢	S109		床面				口	平縁か, 1R平行押			①?		内筒下層d
42	7	深鉢	S109		床面				口-胴	1平行押	屈縁帯	条痕	①?		内筒下層d
49	1	深鉢	SK02		3層	(20.2)			口-胴	平縁, 1R平行押	屈縁帯, 下 端にR押	R単筋1	①?	外面: 炭化物 付着	内筒下層d
49	2	深鉢	SK02		堆積土				口-胴	平縁, 1R・R平行押	屈縁帯	1単筋1か	①?	外面: 炭化, 錆跡 孔有	内筒下層d
49	3	深鉢	SK02		堆積土				口-胴	口唇: R横押, 平縁, 1R平 行押	縁帯に横状 工具側面押	R多筋か	①?		内筒下層d
49	4	深鉢	SK02		堆積土				口-胴	口唇: 丸横押, 平縁, 丸三 角形押	屈縁帯に丸 横押	R多筋	①?		内筒下層d
49	5	深鉢	SK02		堆積土				口-胴	1R平行押			①?	編組合	内筒下層d
49	6	深鉢	SK02		堆積土				口-胴	平縁, 1R平行押		R多筋か	①?	編組合	内筒下層d
49	10	深鉢	SK03		検出面 堆積土		8.1		胴-底			R単筋1, 上付底, 底 部圧痕有(板状)	①?	外面: 炭化物 付着	大木10併行
49	11	深鉢	SK03		堆積土上 層	15.0			口-胴	口唇内面: ヒシ状突起, 平縁		丸筋, 彫字文, 波頭 文	①?	外面: 炭化物 付着	大木10併行
49	12	深鉢	SK03		1層				口	口唇: 沈線, 波状口縁, 沈 線文	筋刻斜行		①?		覆林
50	1	深鉢	SK05		7層	24.7	10.7	32.6	口-底	口唇: 横押(横状工具), 波状口縁(5単位), 波状文 (横状工具-沈線)		横状人趾文(横状工 具-沈線), 平底	①?	内面下部: 炭 化物付着	十層内1新
50	2	深鉢	SK05		底面	(26.0)	11.2	(32.8)	口-底	口唇: 横押(横状工具), 波状口縁(5単位), 彫線・ 波状文, 『3』字布文		瓦線文, 波状文(5単 位), 平底	①?	内面下部: 炭 化物付着	十層内1新
50	3	深鉢	SK05		4, 5層	(33.6)			口-胴	平縁, 太いRの間に1R・R 平行押, 筋刻回	屈縁帯	1多筋	①?		内筒下層d
50	4	深鉢	SK05		2, 4, 5層	(19.2)			口-胴	口唇: 1平行押, 平縁, 1R 平行押	1段横押	1単筋1	①?	編組合	内筒下層d
50	5	深鉢	SK05		1層				口-胴	波状口縁, 1単筋5・瓦波 状押	屈縁帯に1 単筋5押	1多筋	①?	外面: 腐付着	内筒下層d2
50	6	深鉢	SK05		2層				口-胴	波状口縁, 1R三角形押	屈縁帯にR 押	条痕横走	①?	編組合	内筒下層d
50	7	深鉢	SK05		4, 5層				胴-底			R単筋1	①?	編組合	内筒下層d
50	8	深鉢	SK05		1層				胴			R多筋	①?		内筒下層d
51	7	深鉢	SK06		3層				口-胴	1R平行押	縁帯に1R押	R単筋1	①?	編組合	内筒下層d
51	8	深鉢	SK06		堆積土				口	口唇: R横押, 平縁, 1R平 行押			①?	編組合	内筒下層d
52	1	深鉢	SK07		5層				口-胴	平縁, R筋平行押	屈縁帯にR 押	1多筋か	①?	編組合	内筒下層d
52	2	深鉢	SK07		堆積土				口-胴	平縁, 1R・R平行押	屈縁帯	R多筋	①?	編組合	内筒下層d
52	3	深鉢	SK07		2層				口-胴	平縁, 1R・丸山形押・丸 横押	屈縁帯か (角筋)にR 押	R多筋	①?	編組合	内筒下層d
52	4	深鉢	SK07		3層				口-胴	平縁		R単筋1	①?	編組合	内筒下層d
52	9	深鉢	SK08		堆積土				口-胴	平縁, R筋平行押	屈縁帯にR 筋斜行	R多筋	①?	編組合	内筒下層d
52	10	深鉢	SK08		3層				口	無文地に平行沈線3条			①?	外面: 腐付着	後期前半
52	11	深鉢	SK08		堆積土				口	平縁, R筋, 1R・R平行 押			①?	編組合	内筒下層d
52	12	深鉢	SK08		堆積土				口-胴	平縁, 1R平行押	縁帯に1R押		①?	編組合	内筒下層d
52	13	深鉢	SK08		1, 3層				口-胴	1R平行押の間に横筋印筋 のR押	屈曲部	摩滅不明	①?	編組合	内筒下層d
53	7	深鉢	SK13		堆積土				口-胴	平縁, 1R平行押		1R筋斜行か	①?	編組合	内筒下層d
53	8	深鉢	SK13		堆積土				胴		縁帯に1R押	R多筋	①?	編組合	内筒下層d
54	1	深鉢	SK14		堆積土				胴			R多筋	①?	編組合, 外面: 腐付着	内筒下層d
54	2	深鉢	SK14		堆積土				口	1R平行押			①?	編組合	内筒下層d
54	6	深鉢	SK16		堆積土	(20.5)	9.4	24.4	口-底	平縁, 1R・R筋(自巻)・ 丸・R平行押	縁帯に1R回	1R, 丸丸, R多筋(角 輪), 上付底	①?	編組合, 錆跡 孔	内筒下層d
54	7	深鉢	SK16		3, 4層・ 堆積土	(39.0)			口-胴	平縁, 丸・R筋(自巻)変形 押・丸横押	縁帯に丸押 か	R多筋	①?	編組合少, 尚 腐付着, 錆 跡孔	内筒下層d
55	1	深鉢	SK16		堆積土	(18.6)			口-胴	平縁, 1R平行押	太めのR押	1単筋1	①?	編組合	内筒下層d

図	No	遺構	遺構	層位	口径 (m)	底径 (m)	高さ (m)	部位	口縁部	区画	地文、胴部以下	内面 調整	備考	型式	
55	2	深鉢	SK16	堆積土	(22.8)			口-割	平鉢, 1R・R平行行	1R鉢	R多筋		編織含, 外面 に煤付着	円筒下層d	
		深鉢	SK16	堆積土				口-割	平鉢, 1R平行行	無	R多筋	??		円筒下層d	
55	4	深鉢	SK16	堆積土				口	口唇: 1R内, 平鉢, R単筋 1・1R・R平行行					円筒下層d	
55	5	深鉢	SK16	堆積土				口-割	平鉢, 1R(内輪), 1R・ L・R山形押	胴縁帯に1R 付	R多筋		編織含	円筒下層d	
55	6	深鉢	SK16	堆積土				口-割	波状口縁, 1R山形押・朝 突(棒状工具)列, 胴部下 部に穿孔(φ3cm横内形)	胴縁帯にC 字朝突	1多筋		編織含	円筒下層d2	
55	7	深鉢	SK16	堆積土				口	口唇: 4等ミ, 平鉢, 1R波 形押, 朝突(棒状工具)充 積					円筒下層d2	
55	8	深鉢	SK16	堆積土				口	口唇: 既削突少, 平鉢, 既 平行行, 円形朝突列(胴部 部)					円筒下層d	
55	9	深鉢	SK16	堆積土				口-割	口唇: 沈鉢, 波状口縁, 1R 斜行	平行沈鉢3 条	1R斜行または横走	??	口縁外面: 煤 付着	復鉢	
55	13	皿	SK18	底面	7.8	8.2	24.3	口-底	平鉢		平底			外面: 液体状 の黒色付着物	復鉢または 大木0坪行
55	14	深鉢	SK20	3層				口-割	平鉢, 1R・R山形押か	隆帯	R多筋		編織含	円筒下層d	
55	15	深鉢	SK20	3層				口-割	摩滅不明	隆帯	摩滅不明		編織含	円筒下層d	
55	17	深鉢	SK21	堆積土				口-割	平鉢, 1R平行行		1多筋		編織含, 袖部 孔	円筒下層d	
55	18	深鉢	SK21	堆積土				口-割	平鉢, 既R, 1R・既R平行行	隆帯	R多筋		編織含	円筒下層d	
55	19	深鉢	SK21	堆積土				口-割	平鉢, 既R, 1R・R平行行	胴縁帯	1多筋		編織含	円筒下層d	
55	20	深鉢	SK21	堆積土				口	平鉢, 既R・1R・L・R平行 行				編織含	円筒下層d	
55	21	深鉢	SK21	堆積土				口	平鉢, 既R平行行				編織含	円筒下層d	
60	1	深鉢	SV03	1層				口-割	波状口縁, 1R山形押か	唇部	多筋		編織含	円筒下層d	
60	2	深鉢	SV03	1層				口	平鉢, R山形平行行				編織含	円筒下層d	
60	3	深鉢	SV04	1層				口-割	1R・R平行行	胴縁帯	1多筋		編織含	円筒下層d	
60	5	深鉢	SV08	1層				口-割	1R平行行	胴縁帯に1R 付	R多筋		編織含	円筒下層d	
60	6	深鉢	SV08	1層				口-割	1R平行行	胴縁帯に1R 付	R多筋か		編織含	円筒下層d	
60	7	深鉢	SV08	1, 4層	(18.0)	8.5	22.3	口-底	平鉢, R平行行		R単筋1		編織含	円筒下層d	
62	1	深鉢	BE1	R-32	III	(38.0)		口-割	平鉢, 既R平行行か		R多筋		編織含多, 器 山摩滅 下部被熱	円筒下層d1	
62	2	深鉢	BE1	R-32	III	(32.0)		口-割	平鉢, 摩滅不明		R多筋		編織含, 白色 小粒(疑灰岩, 石英などφ1 mm)少, 器山摩 滅	円筒下層d1	
62	3	深鉢	BE1	R-32	III	(20.4)		口-割	平鉢, R平行行	摩滅不明	R単筋1		編織含, 外面: 摩滅	円筒下層d1	
62	4	深鉢	BE1	R-32	III	(21.2)		口-割	平鉢, 既R平行行	隆帯か	R単筋		摩滅	円筒下層d1	
62	5	深鉢	BE1	R-32	III	(20.8)		口-割	平鉢, 既R・1R平行行	隆帯	1多筋		編織含	円筒下層d1	
62	6	深鉢	BE1	R-32	III	(21.8)		口-割	平鉢, 1R平行行	1R付3条	R多筋か(摩滅)		編織含, 胴部 下部被熱, 内 面下部炭化 物付着	円筒下層d1	
62	7	深鉢	BE1	R-32	III	(30.0)		口-割	平鉢, 既R・R・L山形押, L 結同	胴縁帯, 1R 付	1多筋		編織含	円筒下層d1	
62	8	深鉢	BE1	R-32	III	(24.8)		口-割	平鉢, 1R・L山形押, L結同	L結同	R多筋		編織含少	円筒下層d1	
62	9	深鉢	BE1	R-32	III	(13.0)		口-割	平鉢, 1R平行行, 朝突	1R付+朝突	1多筋か		編織含	円筒下層d1	
62	10	深鉢	BE1	R-32	III			口-割	平鉢, 1平行行	隆帯に1R 付	1R付, 単筋1か		編織含	円筒下層d1	
62	11	深鉢	BE1	R-32	III			口-割	平鉢, 1R平行行	隆帯か	R単筋1		編織含	円筒下層d1	
62	12	深鉢	BE1	R-32	III			口-割	平鉢, 1平行行	隆帯か	R多筋		編織含	円筒下層d1	
62	13	深鉢	BE1	R-32	III			口-割	平鉢, 1R平行行	隆帯に1R 付	1多筋		編織含	円筒下層d1	
62	14	深鉢	BE1	R-37	III			口-割	平鉢, 1R・R平行行	隆帯	R多筋か		編織含	円筒下層d1	
62	15	深鉢	BE1	R-47	III	(11.2)		口	平鉢, 1R・R平行行				編織含	円筒下層d1	
64	1	深鉢	R-47	III	(32.0)			口-割	平鉢, 1R・L・R平行行	隆帯	1R付, R単筋1		編織含	円筒下層d	
64	2	深鉢	P-36, O- 47	III, IV	(26.0)			口-割	口唇: 1R付, 平鉢, 1平行 行, 1R付	胴縁帯に1R 付	R単筋1		編織含	円筒下層d	
64	3	深鉢	Q-47	III	(22.6)			口-割	平鉢, 1平行行		1R単筋1	??	編織含	円筒下層d	
64	4	深鉢	Q-32	III	23.0			口-割	平鉢, 1R・1平行行		R単筋1		編織含, 外面: 炭化物付着	円筒下層d	
64	5	深鉢	Q-47・ 48	III	(24.0)			口-割	平鉢, 1R平行行	胴縁帯	1R単筋1		編織含, 外面: 煤付着	円筒下層d	
64	6	深鉢	Q-48	III	(20.0)			口-割	平鉢, 1R平行行	隆帯に既R 付	R単筋1		編織含, 袖部 孔	円筒下層d	

図 No	部種	造形	形式	階位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口頸部	区画	地文、胴部以下	内面調整	備考	型式
64 7	深鉢	Q-48	Ⅲ		(20.2)			口-胴	口径：キズキ、平鉢、1.8平行押	側隆帯にC～4mm程度の幅3mm程度のキズミ	R平鉢1	13°	織込合、外面：ぼけ着	円筒下層d
64 8	深鉢	Q-49、48	Ⅲ		18.5			口-胴	平鉢、皿・R平行押	隆帯にR押	L平鉢1	13°	織込合、補修孔	円筒下層d
64 9	深鉢	Q-49、P-47	Ⅲ		20.2			口-胴	口径：初皿、平鉢、R平行押		R平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
65 1	深鉢	Q-32	Ⅲ		(18.4)	6.7	(21.0)	口-底	平鉢、1.8・R平行押、R縦押		L平鉢1、L平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
65 2	深鉢	Q-32	Ⅲ		(16.0)	9.8	(20.0)	口-底	平鉢、1.8・R平行押、R縦押	側隆帯	R初皿、L平鉢1	13°	織込合、外面：ぼけ着	円筒下層d
65 3	深鉢	Q-37	Ⅲ					口-胴	平鉢、R平行・縦押	隆帯	R平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
65 4	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	平鉢、1.8平行押	隆帯に刺突(修状工具)	R平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
65 5	深鉢	K-53	Ⅱ		(14.0)			口-胴	平鉢、皿斜行(R縦押)、1.8平行押、L縦押	側隆帯にL押	R平鉢1	13°		円筒下層d
65 6	深鉢	P-47	Ⅲ、Ⅳ		(26.0)			口-胴	平鉢、R平行押	側隆帯	L皿斜行か・L平鉢1	13°	外面：ぼけ着	円筒下層d
65 7	深鉢	Q-47	Ⅳ					口-胴	平鉢、1.8平行押	側隆帯	R平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
65 8	深鉢	P-47	Ⅳ					口-胴	口径：刺突、平鉢、1.8平行押	側隆帯にC字刺突	R平鉢1	13°	補修孔	円筒下層d
65 9	深鉢	Q-47	Ⅲ、Ⅳ		(13.4)			口-胴	平鉢、1.8平行押		R平鉢1	13°	織込合少	円筒下層d
65 10	深鉢	Q-48	Ⅲ		(32.0)			口-胴	口径：L初皿、平鉢、R路条体平行押	隆帯にR平鉢1押	R初皿平行押、R平鉢1	19°	織込合	円筒下層d
65 11	深鉢	Q-47、48	Ⅲ		(27.0)			口-胴	口径：L初皿、平鉢、1.8・R平行押	隆帯	R平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
65 12	深鉢	Q-48	Ⅲ、Ⅳ		(17.8)			口-胴	平鉢、1.8・R平行・縦押		R平鉢1	19°	織込合	円筒下層d
65 13	深鉢	Q-48	Ⅲ		(14.4)			口-胴	口径：L初皿、平鉢、1.8平行押	基部	L平鉢1	13°	織込合	円筒下層d
66 1		H-54、55	Ⅲ		(38.0)			口-胴	平鉢、1.8平行押	側隆帯	R多筋(角軸)	13°	織込合、硝災石、石英等の白色小礫φ1mm多含	円筒下層d
66 2	深鉢	L-54、M-54	Ⅲ		(36.0)			口-胴	平鉢、1.8平行押	側隆帯	L多筋	13°	織込合	円筒下層d
67 1	深鉢	L-60	Ⅲ		(34.0)			口-胴	口径：L初皿、平鉢、1.8平行押	隆帯に刺突(修状工具)	R多筋(角軸)	13°	織込合	円筒下層d
67 2	深鉢	P-51	Ⅲ		37.3			口-胴	平鉢、R初、1.8平行押、L.8縦押	隆帯にR路押	L多筋	13°	織込合	円筒下層d
67 3	深鉢	K-55	Ⅱ		(35.4)			口-胴	平鉢、1.8平行押	隆帯にL押	多筋L	13°	織込合	円筒下層d
68 1	深鉢	Q-48	Ⅲ、Ⅳ		(29.0)	(14.8)	(44.8)	口-底	平鉢、皿・R平行押	隆帯にL押5・(厚縁)	R多筋(角軸)、胴上部にL.8.皿平行押	13°	織込合	円筒下層d
68 2	深鉢	H-54、K-54	Ⅲ		(33.0)			口-胴	平鉢、1.8・R・R平行押	側隆帯	R多筋(角軸)	13°	織込合、外面：炭化物付着	円筒下層d
68 3	深鉢	L-53、54	Ⅲ		(28.7)	(11.7)	35.3	口-胴	平鉢、皿平行・縦押	隆帯	L多筋	13°	織込合	円筒下層d
69 1	深鉢	Q-47	Ⅲ		(30.0)			口-胴	平鉢、1.8・R平行押	側隆帯	R多筋	13°	織込合	円筒下層d
69 2	深鉢	Q-48	Ⅲ		(27.0)			口-胴	平行押、1.8平行押	隆帯に刺突	R多筋(角軸)	13°	織込合、外面：炭化物付着	円筒下層d
69 3	深鉢	Q-49	Ⅲ		(29.0)			口-胴	平鉢、1.8・L平行押	隆帯にL押	多筋(角軸)	13°		円筒下層d
69 4	深鉢	Q-47、48	Ⅲ		(26.0)			口-胴	平鉢、皿平行押	側隆帯	L多筋(角軸)	13°	織込合	円筒下層d
70 1	深鉢	Q-49	Ⅲ		(25.0)			口-胴	平鉢、1.8平行・縦押	隆帯	R多筋(角軸)	13°	織込合、石英含	円筒下層d
70 2	深鉢	P-51	Ⅲ		(25.2)	12.0	34.0	口-底	口径：L初皿、平鉢、L・1.8平行押	L押	R多筋(角軸)、上付底	13°	織込合	円筒下層d
70 3	深鉢	L-53	Ⅲ		(25.0)			口-胴	平鉢、皿・L・R平行押	隆帯	R多筋小	13°	織込合、外面：炭化物付着	円筒下層d
70 4	深鉢	H-52	Ⅲ		(25.0)			口-胴	平鉢、R路(角軸)斜押・平押	隆帯にR路押	R多筋	13°	織込合	円筒下層d
70 5	深鉢	Q-46、48	Ⅲ		(20.8)			口-胴	平鉢、1.8平行押	隆帯	L多筋(角軸)	13°	織込合	円筒下層d
71 1	深鉢	L-54	Ⅲ		(19.2)	8.0	22.3	口-底	平鉢、1.8平行押	隆帯にL押	R多筋(角軸)	13°	織込合、外面：炭化物付着	円筒下層d
71 2	深鉢	Q-48	Ⅲ		17.3			口-胴	平鉢、皿・1.8平行押	隆帯にL押	L多筋	13°	織込合、補修孔	円筒下層d
71 3	深鉢	R-45	Ⅲ		18.5	9.7	21.6	口-底	平鉢、L.8・R・R平行押	L押	L多筋、上付底	13°	織込合	円筒下層d
71 4	深鉢	Q-48	Ⅲ		(20.0)			口-胴	平鉢、R初皿・1.8・R平行押	側隆帯	R初皿・R多筋(角軸)	13°	織込合、外面：ぼけ着	円筒下層d
71 5	深鉢		Ⅲ		(16.4)			口-胴	平鉢、皿平行押	基部部	R多筋	13°	織込合	円筒下層d
71 6	深鉢	P-46	Ⅲ、Ⅳ					口-胴	平鉢、1.8平行押		0.02多筋(角軸)小	13°	織込合	円筒下層d
71 7	深鉢	P-50	Ⅲ					口-胴	平鉢、1.8平行押	側隆帯にL.8縦押	R多筋	13°	織込合、外面：ぼけ着	円筒下層d
71 8	深鉢	P-49	Ⅲ					口-胴	口径：R押、平鉢、1.8平行押	隆帯にL押	R多筋	13°	織込合	円筒下層d
71 9	深鉢	P-51	Ⅲ					口-胴	口径：R多筋小、平鉢、R多筋小	側隆帯	R多筋小	13°	織込合、外面：厚炭化物着	円筒下層d

図	No	部種	遺構	J'fy)	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	部位	口縁部	区画	地文、胴部以下	内面 調整	備考	型式
71	10	深鉢	H-54	Ⅲ					口-胴	平鉢, LR・R車輪5平行押	微隆帯にLR R多筋小	13 ⁺	編織合		円筒下層4
71	11	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	平鉢, 皿・R平行押, 8筋凹	隆帯に上下 にLR押	13 ⁺	編織合		円筒下層4
71	12	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	平鉢, LR平行押	R多筋	13 ⁺	編織合, 外面 僅付着		円筒下層4
71	13	深鉢	P-52	Ⅲ					口-胴	口唇: LR凹, 平鉢, LR平行 押	微隆帯にLR 押	13 ⁺	編織合, 外面 僅付着		円筒下層4
72	1	深鉢	K-55	Ⅱ	(20.2)				口-胴	口唇: 衝突(十字), 平 鉢, LR・R平行押	屈曲部にLR 筋凹	13 ⁺	編織合		円筒下層42
72	2	深鉢	Q-45, R- 45	Ⅲ	(19.2)				口-胴	平鉢小, LR平行押	隆帯	R多筋	13 ⁺	編織合	円筒下層42
72	3	深鉢	K-54, 55	I, Ⅱ	16.0				口-胴	口唇: LR横凹, 平鉢, LR・ R筋平行押	隆帯上にLR 押	R多筋	13 ⁺	編織合少量	円筒下層42
72	4	深鉢	Q-46	Ⅲ	(18.0)				口-胴	平鉢, LR平行押	屈曲部にLR 筋凹	R多筋	13 ⁺	編織合, 内面 口縁部: 僅付 着	円筒下層42
72	5	深鉢	Q-46	Ⅲ	(15.0)				口-胴	口唇: LR凹, LR平行押	屈曲部に刺突, LR押	R多筋小	13 ⁺	編織合	円筒下層42
72	6	深鉢	W-54	準積土					口-胴	口唇: 8筋縦押, 平鉢, R筋 平行押	屈曲部下端	R多筋	13 ⁺	編織合	円筒下層42
72	7	深鉢	P-51	Ⅲ	(13.4)				口-胴	平鉢, LR・R平行押	屈曲部下端	LR斜行	13 ⁺	編織合, 外面 僅付着	円筒下層42
72	8	深鉢	Q-48	Ⅲ	(27.0)				口-胴	口唇: LR凹, 平鉢, L筋条 体・LR平行・縦押	隆帯に刺突 LR斜	13 ⁺	編織合		円筒下層4
72	9	深鉢	P-46	Ⅲ, IV	(28.8)	(14.2)	(42.0)		口-底	平鉢, LR・R・L平行押	微隆帯	上半: L車輪1, 下半: L多筋	13 ⁺	編織合, 外面 炭化物付着	円筒下層4
72	10	深鉢	Q-48	Ⅲ	(25.0)				口-胴	平鉢, L・R平行押	隆帯	L車輪1A	13 ⁺	編織合	円筒下層4
72	11	深鉢	T-35	Ⅲ	(21.2)				口-胴	口唇: LR凹, 平鉢, R平 行・縦押	結束部) 種 別状炭文 (LR・皿)	R・L車輪1A	13 ⁺	編織合	円筒下層4
72	12	深鉢	Q-47	Ⅱ	(19.0)				口-胴	平鉢, R平行押	微隆帯にLR 斜行(縦凹)	L車輪1A	13 ⁺		円筒下層4
72	13	深鉢	Q-49	Ⅲ					口-胴	口唇: L押, 平鉢, L筋(角 輪)平行押	隆帯に刺突	L車輪1A	13 ⁺	編織合	円筒下層4
72	14	深鉢	P-51	Ⅲ	16.0				口-胴	口唇: LR凹, 平鉢, R平行 押	隆帯に刺突 (修状工具)	L車輪1A	13 ⁺	編織合, 補修 孔	円筒下層4
72	15	深鉢	K-50	風倒木					口-胴	LR平行押	屈曲部にLR 筋凹	LR斜行, LR車輪1A	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	1	深鉢	P-50	Ⅲ	41.0				口-胴	口唇: L押, 平鉢, LR平行 押	Lの押下端 部	縦炭走	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	2	深鉢	Q-47, P- 46	Ⅲ	(30.5)	11.5	39.4		口-底	口唇: LR押, 平鉢, R平行 押	編織炭原痕 (微隆帯に 編織土を付 けて炭化)	炭痕縦走, 上7筋	13 ⁺	編織, 小織合	円筒下層4
73	3	深鉢	P-51	Ⅲ					口-胴	口唇: L押小, 平鉢, L平行 押		炭痕縦走(口縁文様 の上から編文)	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	4	深鉢	W-54	Ⅲ					口-胴	平鉢, 皿平行押	屈曲部	炭痕縦走	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	5	深鉢	W-54	Ⅲ					口-胴	口唇: LR凹, 平鉢, LR平行 押		炭痕縦走	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	6	深鉢	炭痕						口-胴	口唇: キザミ, 平鉢, 炭痕 横走	隆帯		13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	7	深鉢	Q-47	Ⅲ					口-胴	平鉢小, 厚紙不明		縦走炭痕一胴部上 部: 横走炭痕	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	8	深鉢	Q-49	Ⅲ					口-胴	平鉢, 炭痕横走	炭痕横走	炭痕縦走	13 ⁺	編織合	円筒下層4
73	9	深鉢	W-53	Ⅲ					口-胴	平鉢小, 厚紙不明	隆帯: 隆帯 下に0.3mm 程度の彫刻 突列		13 ⁺	編織合	円筒下層4
74	1	深鉢	Q-48	Ⅲ, IV	(30.4)				口-胴	平鉢, L・R・L山形押	微隆帯にLR 押	R車輪1	13 ⁺	編織合, 内外 面: 炭化物付 着, 炭痕脱落 痕	円筒下層4
74	2	深鉢	P-46	Ⅲ, IV	(27.0)				口-胴	平鉢, 皿山形・縦押	隆帯	R筋凹, R車輪1	13 ⁺	編織合, 内外 面: 炭化物付 着	円筒下層4
74	3	深鉢	Q-47	Ⅱ	(23.5)	(13.5)	(30.4)		口-底	平鉢, LR山形押, 8筋押光 痕, LR縦押	隆帯にLR押	LR車輪1, 上7筋小	13 ⁺	編織合, 補修 孔	円筒下層4
74	4	深鉢	Q-48	Ⅲ, IV	(23.4)				口-胴	平鉢, LR山形押	隆帯にLR押	R車輪1	13 ⁺	編織, 小織合, 炭化物, 粘土 中に炭和物の 編織残存か	円筒下層4
75	1	深鉢	J-54, L- 54	Ⅱ	25.6				口-胴	口唇: LR凹, 平鉢, LR・ 皿・L山形押, LR縦押	隆帯にLR押	R車輪1	13 ⁺	編織合, 内外 面: 炭化物付 着	円筒下層4

国	No	部種	遺構	「f」	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口頸部	区画	地名、胴部以下	内面 調整	備考	型式
75	2	深鉢		風向木	Ⅲ	22.4			口-胴	平縁, 丸山形・縦押	丸押	R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
75	3	深鉢		Q-46	Ⅲ	(22.6)			口-胴	平縁, 丸山形	縁帯に丸押	R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
75	4	深鉢		0-48	Ⅲ, IV	(23.0)			口-胴	平縁, 丸・丸山形・縦押	縁帯に丸押	R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
75	5	深鉢		Q-48	Ⅲ, IV	(25.2)			口-胴	平縁, 丸山形	縁帯に丸押	R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
75	6	深鉢		Q-46	Ⅲ				口-胴	平縁, 丸山形	縁帯に丸押	R単筋1, 丸縁回	13'	編織合	円筒下層4
75	7	深鉢		P-47	Ⅲ, IV	(21.6)			口-胴	平縁, 丸・丸山形押, 丸縁回	無縁帯	R丸縁少・丸多筋	13'	編織合, 外面 口頸部, 内面 中位; 炭化物 層付着	円筒下層4
75	8	深鉢		I-55	I				口-胴	丸山形押	縁部	R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
75	9	深鉢		Q-48	Ⅲ	(21.6)			口-胴	平縁, 丸山形押	R押	丸縁回, R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
75	10	深鉢	S107	南部拡張部	Ⅲ				口-胴	平縁, 丸山形押	無縁帯	R単筋1	13'	編織合	円筒下層4
76	1	深鉢		I-55	Ⅲ	(37.2)			口-胴	丸・丸山形押(変形)	縁帯	1多筋	13'	編織合	円筒下層4
76	2	深鉢		L-54	Ⅲ	(30.8)			口-胴	平縁, 丸・丸山形押, 丸縁回	縁帯に丸押	1多筋	13'	編織合, 内外 面; 炭化物付 着	円筒下層4
76	3	深鉢		0-48	Ⅲ, IV	(28.0)			口-胴	平縁, 丸山形押	縁帯	R多筋	13'	編織合	円筒下層4
76	4	深鉢		K-53 I-52	I				口-胴	平縁, 丸山形押	無縁帯	1多筋	13'	編織合	円筒下層4
76	5	深鉢		Q-47	Ⅲ	(34.3)			口-胴	口唇; 丸縁回, 平縁, 丸山形 押	縁帯にC字 突起	1多筋	13'	編織合	円筒下層4
77	1	深鉢		K-55 J-54	Ⅱ	(28.2)			口-胴	口唇; 丸縁回, 平縁, 丸山形 押	縁帯に丸押	1多筋(角輪)	13'	編織合	円筒下層4
77	2	深鉢		P-51	Ⅲ	(25.8)			口-胴	平縁, 丸・丸山形押	縁帯に丸縁 回	丸縁回, 1多筋(角 輪), 一部丸縁回	??	編織合	円筒下層4
77	3	深鉢		K-55	I	(26.0)			口-胴	平縁, 丸・丸山形押	縁帯に丸押	R多筋	13'	編織合	円筒下層4
77	4	深鉢		N-52	Ⅲ	(20.0)			口-胴	平縁, 丸縁帯付・丸山形 押, 丸縁回	丸押	1多筋	13'	編織合	円筒下層4
77	5	深鉢		N-52	Ⅲ				口-胴	口唇; 丸縁回, 平縁, 丸山形 ・縦押	丸押	R多筋	13'	編織合, 外面 炭化物付着	円筒下層4
77	6	深鉢		J-54	Ⅱ				口-胴	平縁, 丸・丸縁回山形押	縁帯に丸押	1多筋(角輪)	13'	編織合	円筒下層4
77	7	深鉢		I-55	I	(28.4)			口-胴	平縁, 丸山形押	縁帯にC字 突起	R多筋	13'	編織合 部山摩滅	円筒下層42
77	8	深鉢		H-55	I	(26.0)			口-胴	口唇; 丸縁回, 平縁, 丸・丸山形 押	縁帯に丸縁 回	丸縁回, 丸縁回, 1多 筋	13'	編織合	円筒下層42
77	9	深鉢		K-55	I, Ⅱ	(26.0)			口-胴	平縁, 丸山形押	縁帯に丸縁 回	丸縁回, R多筋	13'	編織合	円筒下層42
77	10	深鉢		R-37	Ⅲ				口-胴	平縁, 丸縁回, 丸山形押	縁部	R多筋	13'	編織合	円筒下層42
77	11	深鉢		Q-48	Ⅲ, IV	(20.2)			口-胴	平縁, 丸山形押	縁部に丸押 押小	1多筋(角輪)	摩滅	編織合	円筒下層42
77	12	深鉢		Q-49	Ⅲ				口-胴	平縁, 丸山形押	縁部にC字 突起	1多筋	13'	編織合 補修孔	円筒下層42
77	13	深鉢		H-1-55	I	(16.0)			口-胴	R単筋5・丸山形押	縁部	1多筋	13'	編織合	円筒下層42
77	14	深鉢		P-51	Ⅲ	(16.0)			口-胴	平縁, 丸山形押	縁帯に丸押	多筋1, 補修孔	13'	編織合	円筒下層42
78	1	深鉢		R-45, 46	Ⅲ	(14.8)			口-胴	平縁, 丸山形押小	丸縁回	丸縁少	13'	編織合	円筒下層4
78	2	深鉢	S106	南部拡張部	Ⅲ				口-胴	平縁, 丸山形押	無縁帯に丸押	R押	13'	編織合	円筒下層4
78	3	深鉢		0-48	Ⅲ	(12.0)			口-胴	口唇; 丸縁回, 平縁, 丸山形 押	丸押	丸縁縁走	13'	編織合少	円筒下層4
78	4	深鉢		Q-50	Ⅲ				口-胴	丸山形押小	縁帯	丸縁縁走	13'	編織合僅少	円筒下層4
78	5	深鉢		Q-47	Ⅲ				口-胴	波状口縁, 丸山形押	刺突	13'	編織合 石灰質多含	円筒下層4	
78	6	深鉢		H-54	Ⅲ				口-胴	平縁, 丸山形押	縁帯に丸押	13'	編織合	円筒下層4	
78	7	深鉢		0-48	Ⅲ, IV	(22.0)			口-胴	波状口縁, 丸・丸山形押	丸押	R多筋	13'	編織合, 炭化 した赤色底付	円筒下層42
78	8	深鉢		N-54	Ⅲ	(22.8)			口-胴	波状口縁・頸部二股, 丸山形 押	縁帯に丸縁 回	丸縁回, R単筋1	13'	編織合少	円筒下層42
78	9	深鉢		R-34	Ⅲ	(17.6)			口-胴	波状口縁, 丸山形押, 丸縁 回	縁帯に丸押	R単筋1	13'	編織合, 外面 層付着	円筒下層42
78	10	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	口唇; 波状口縁, 丸山形 ・縦押	縁部に丸押	R単筋1刺突	13'	編織合	円筒下層42
78	11	深鉢		Q-48	Ⅲ	(13.6)	(8.7)	(23.1)	口-底	山形口縁, 丸山形押		R単筋1	13'	編織合	円筒下層42
78	12	深鉢		K-51, 52	Ⅲ	(31.0)			口-胴	波状口縁・頸部二股, 丸山形 ・縦押	無縁帯	1多筋	13'	編織合, 外面 縁部下部; 炭 化物付着	円筒下層42
78	13	深鉢		P-49	Ⅲ	(32.0)			口-胴	波状口縁, 丸・丸山形 ・縦押	縁帯	R多筋(角輪)	13'	編織合	円筒下層42
78	14	深鉢		Q-47	Ⅲ	(28.0)			口-胴	口唇; 丸縁押, 波状口 縁, 丸山形押, 丸縁押	無縁帯に刺 突	R多筋	13'	編織合, 外面; 炭化物付着	円筒下層42
78	15	深鉢		Q-49	Ⅲ	(26.2)			口-胴	波状口縁, 丸山形押	縁帯	R多筋	13'	編織合	円筒下層42
78	16	深鉢		P-51	Ⅲ				口-胴	波状口縁, 丸山形・縦押	縁帯に丸押	丸縁回, 1多筋	13'	編織合	円筒下層42
78	17	深鉢		N-54	Ⅲ				口-胴	波状口縁, 丸山形押	φ2mm程の 円形突起	R多筋	13'	編織合, 外面; 層付着	円筒下層42
78	18	深鉢		N-54	Ⅲ				口-胴	波状口縁, 丸山形・縦押	縁部下部	R多筋	13'	編織合	円筒下層42

図	No	部種	遺構	形式	層位	口径 (m)	底径 (m)	築高 (m)	部位	口縁部	区画	地名、欄部以下	内面 調整	備考	型式
79	1	深鉢	P-51	Ⅲ	(22.8)				口-銅	波状口縁, L山形・縦押	基直部	R多筋	3°	編織合, 外面 口縁部: ター ム状物付着	円筒下層42
79	2	深鉢	Q-49	Ⅲ					口-銅	口唇: キギリ, 波状口 縁, L山形・縦押	熊鷹帯にL R多筋	3°	編織合, 外面 炭化物付着	円筒下層42	
79	3	深鉢	Q-47	Ⅱ					口-銅	波状口縁, 皿・L山形押	L多筋	3°	編織合少	円筒下層42	
79	4	深鉢	Q-48	Ⅲ	(21.0)				口-銅	山形(二股)口縁, L山形 押	L斜行	L単筋1A	3°	編織合, 外面 残付着	円筒下層42
79	5	深鉢	W-54	Ⅲ					口-銅	波状口縁, R平行押	L山形押・ 結束第1種 別状(皿・ L)	R斜行	3°	編織合	円筒下層42
79	6	深鉢	Q-49	Ⅲ					口-銅	口唇: L山形, 波状口縁(片 残れ), L山形押	基直部	L斜行・L横走	3°	編織合, 外面 残付着	円筒下層42
79	7	深鉢	W-52	Ⅲ					口-銅	口唇: C字状押, 波状口 縁, L山形押	基直部	L斜行	3°	編織合	円筒下層42
79	8	深鉢	Q-48, -49	Ⅲ	(21.3)				口-銅	口唇: R山形, 波状口縁, R平 行押		条板縦走	3°	編織合, 欄部 下半は未接合 層平を合成し て作図	円筒下層42
79	9	深鉢	Q-49	Ⅲ					口-銅	波状口縁, L山形・縦押	L斜行	R多筋に条板縦走	3°	編織合少, 風 化した鉄石英	円筒下層42
79	10	深鉢	S106 南部批 部部	Ⅲ					口-銅	波状口縁, L山形押		L斜行	7°	編織合	円筒下層42
79	11	深鉢	K-51	Ⅲ	(26.2)				口-銅	口唇: キギリ, 山形口 縁, L・R平行・縦押	條帯に刺突	条板縦走	3°	編織合	円筒下層42
79	12	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-銅	口唇: L山形, L・R押(溝 部), 波状口縁, R平行押		条板縦走	3°	編織合	円筒下層42
79	13	深鉢	1-56	Ⅲ					口-銅	口唇: 刺突, 波状口 縁, R・L平行・縦押	條帯にR押	条板縦走	3°	編織合	円筒下層42
79	14	深鉢	Q-49	Ⅲ					口-銅	波状(二股), 条板縦走(刺 状)		条板縦走	3°	編織合	円筒下層42
79	15	深鉢	P-49	Ⅲ					口-銅	波状(二股), 条板縦走(刺 状)	基直部	条板縦走	3°	編織合	円筒下層42
79	16	深鉢	P-51	Ⅲ					口	波状口縁, キギリ, R筋(角 輪), L山形押, 透かし穿 孔			3°	編織合	円筒下層42
79	17	深鉢	H-55	Ⅲ					口-銅	波状(二股), L筋条体平行 押	L筋平行押	欄部により不明	3°		円筒下層42
79	18	深鉢	P-51	Ⅲ					口	波状口縁, C字刺突, L山 形押, 穿孔			3°	編織合	円筒下層42
79	19	深鉢	K-47	Ⅲ					口	口唇: L山形, 波状口 縁, R・L山形押, 縦押			3°		円筒下層42
79	20	深鉢	J-56, 57	Ⅲ	(16.0)				口	口唇: L山形, 波状口 縁, L山形押	基直部		3°	編織合	円筒下層42
79	21	深鉢	1-54	Ⅲ					口	口唇: L山形, 波状(二股) 口縁, 基山形押			3°	編織合	円筒下層42
80	1	深鉢	Q-47, 48	Ⅲ	19.6				口-銅	口唇: R筋押, 平縁, 踏差 形押	條帯	結束第1種別状 (L・R), R多筋	3°	編織合	円筒下層42
80	2	深鉢	K-47	Ⅲ	(27.0)				口-銅	平縁, R差形押	條帯に刺突	R単筋1	3°	編織合少	円筒下層42
80	3	深鉢	Q-54	Ⅲ					口-銅	口唇: R筋押, 平縁, L・R 筋条体・L差形押	結束第1種 別状(L・ R)	R多筋	3°	編織合, 外面 炭化物付着	円筒下層42
80	4	深鉢	J-53, 54	Ⅱ, Ⅲ	(23.6)				口-銅	L差形押	條帯にL 押, L結四	L多筋	3°	編織合, 外面 炭化物付着	円筒下層42
80	5	深鉢	Q-54	Ⅲ					口-銅	L差形押	熊鷹帯に刺 突(断面凹 形工具)	R多筋	3°	編織合	円筒下層42
80	6	深鉢	K-56	Ⅲ					口-銅	口唇: キギリ, 波状口 縁, L・L差形押	刺突(断面C 字状工具)	R多筋	3°	編織合	円筒下層42
80	7	深鉢	P-51	Ⅲ	(32.0)				口-銅	平縁, 皿状別状押	條帯	多筋L	3°	編織合	円筒下層42
80	8	深鉢	1-55	I	(31.0)				口-銅	口唇: R筋押, 平縁, 踏差 別状押が上下2段	條帯	L多筋	3°		円筒下層42
80	9	深鉢	P-51	Ⅲ					口-銅	口唇: L山形, 平縁, L山形 形押	熊鷹帯下に 無筋L斜行 (縦四)	L単筋1縦走・一部 斜行	3°	編織合, 外面 残付着	円筒下層42
80	10	深鉢	K-37	Ⅲ					口-銅	口唇: キギリ, 平縁, L山 形形押	基直部	L斜行	3°	編織合, 外面 炭化物付着	円筒下層42
80	11	深鉢	P-50	Ⅲ	(25.6)				口	平縁, 踏差三角形押, 棒状 刺突先端	熊鷹帯		3°	編織合	円筒下層42
81	1	深鉢	Q-48	Ⅲ	(24.5)				口-銅	波状口縁, 踏差(角輪)山形 押	基直部	多筋R(角輪)	3°	編織合	円筒下層42
81	2	深鉢	P-51	Ⅲ	(29.2)				口-銅	波状, 欄部より縦筋付口 縁, L山形押, 欄部より縦 筋付	基直部	多筋	3°	編織合, 外面 全体: 残付着	円筒下層42

図	No	部種	造形	形	階位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口頸部	区画	地文、胴部以下	内面 調整	備考	型式
81	3	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇:キギミ、波状口縁、L山形押、頂部より別部区画帯に接続する貼付	隆帯にL押	8多筋	13%	編織合	円筒下層42
81	4	深鉢	Q-47	Ⅲ					口-胴	口唇:削突、波状口縁、L山形押、頂部より隆帯付	唇曲部、無文帯	1多筋	13%	編織合	円筒下層42
81	5	深鉢	S-34	I	(22.4)				口-胴	口唇:削突、平縁、L8平行押、削突、依状突起		結束1種別状(L8・L8)	13%	編織合	円筒下層42
81	6	深鉢	S-34	Ⅲ	(18.2)				口-胴	口唇:L8山形、L山形、口縁、L山形押、C字削突頂部貼付	C字状削突	L8斜行	13%	編織合	円筒下層42
81	7	深鉢	R-34	Ⅲ	(15.6)				口-胴	口唇:L8山形、波状口縁、頂部下に円形貼付(φ15mm)	唇曲部	L8斜行	13%	編織合、外面:炭化物付着	円筒下層42
81	8	深鉢	Q-47	Ⅲ					口-胴	口唇:L8斜押、波状口縁、L8平行押、削突、頂部より隆帯付	唇曲部	L8斜行	13%	編織合	円筒下層42
81	9	深鉢	T-39	I					口-胴	口唇:削突、波状口縁、L・8平行押の間にC字削突付、頂部から逆字隆帯、隆帯にL・L平行押		L8斜行	13%		円筒下層42
81	10	深鉢	W-54	Ⅲ					口-胴	波状口縁(二筋)、L・L平行押、頂部から隆帯帯、隆帯にL8平行押	唇曲部下に無文帯	L8縦回	13%	編織合少	円筒下層42
81	11	深鉢	W-53	Ⅲ					口-胴	口唇:縁斜押、波状口縁、L山形押、頂部に円形貼付(10mm)、縦貼付	隆帯にL押	摩滅により不明	13%	編織合	円筒下層42
81	12	深鉢	T-37	Ⅲ					口-胴	波状口縁、頂部に桃形貼付		L8斜行	13%	編織合、外面:炭化物付着	円筒下層42
81	13	深鉢	Q-47	Ⅲ	27.0				口-胴	口唇:L8山形、平縁、L8平行押、円凹文(18mm)・周部に削突	隆帯上に削突列、その下にL8押	8多筋	13%	編織合	円筒下層42
81	14	深鉢	L-53	Ⅲ	(30.4)				口-胴	平縁、縦C字状隆帯、隆帯上にL縦押、隆帯内にL山形押		L8とL8の結束2種別状縦回の上から、L8縦回	13%	編織合小	円筒下層42
82	1	深鉢	Q-49	Ⅲ					口	波状口縁、L山形押、削突列、頂部から隆帯帯、頂部下腹部に桃形形透かし	唇曲部にC字状削突列	不明	13%	編織合	円筒下層42
82	2	深鉢	Q-47	Ⅲ					口	口唇:C字状削突、波状口縁、L山形押、頂部から隆帯帯(無厚帯)	C字状削突		13%	編織合	円筒下層42
82	3	深鉢	I-54	I					口	波状口縁、L山形押、頂部から隆帯帯			13%	編織合	円筒下層42
82	4	深鉢	K-55	I	(15.4)				口-胴	波状口縁、L8斜行	隆帯	L単筋1	13%		円筒下層42
82	5	深鉢	S-35	Ⅲ	(15.2)				口-胴	平縁(折返口縁)		L8斜行	13%		円筒下層42
82	6	深鉢	W-53	Ⅲ	(21.2)				口-胴	平縁		縁条痕	13%	編織合	円筒下層4
82	7	深鉢	Q-47	Ⅲ	(25.2)				口-胴	平縁		縁条痕走	13%	編織合多	円筒下層4
82	8	深鉢	P-51	Ⅲ					口-胴	平縁、無文帯		縁条痕走	13%	編織合	円筒下層4
82	9	深鉢	P-49	Ⅲ	(10.0)				口-胴	口唇:削突、平縁、削突列	隆帯	8多筋	13%	編織合	円筒下層4
82	10	深鉢	P-51	Ⅲ	(14.0)				口-胴	波状口縁(唇単位)、無文		無文	13%	編織合	円筒下層42
82	11	深鉢	K-53	Ⅱ					胴		隆帯	1多筋	13%	編織合	円筒下層4
82	12	深鉢	Q-47	Ⅲ					胴		隆帯に削突	縁条痕走	13%	編織合	円筒下層4
82	13	深鉢	P-52	Ⅲ		(7.0)			胴-底			縁条痕、上1底	13%	編織合	円筒下層4
83	1	深鉢	W-57	Ⅲ					胴			縁条帯、L8縦回一帯結回	13%	編織合	円筒下層4
83	2	深鉢	J-56	Ⅲ					胴			縁条走	13%	編織合、外面:炭化物付着、横断面四角形の器形	円筒下層4
83	3	深鉢	O-54	Ⅲ					胴			縁条痕筋	13%	編織合、横断面四角形の器形	円筒下層4
83	4	深鉢	P-51	Ⅲ	(17.0)				胴			磨産文(断面凹字工具)、隆帯に同様の工具で削突	13%	編織合	大木6系か
83	5	深鉢	Q-47	Ⅲ					口	山形口縁か、頂部に突起、口縁に円形透かし	L8斜行		13%		円筒上層0
84	1	深鉢	W-44, 45 Q-44, 45 S-45	Ⅲ	(53.7)	12.0	(65.0)		口-底	口唇:頂部に溝巻状沈縁、波状口縁(二山一対)		L8斜行、沈縁文(部状)、上1底	13%		復林
85	1	深鉢	Q-48	Ⅲ	(31.5)	10.0	(47.7)		口-底	口唇:頂部に溝巻状沈縁、波状口縁		縁条走、弧線一帯(文字→波状巻縁、平底)	13%		復林
85	2	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇:沈縁、波状口縁		L8斜行、横断面状沈縁文の上に逆字文	13%		復林

図	No	器種	遺構	形状	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口頸部	区画	地名、副部以下	内面 調整	備考	型式	
85	3	深鉢		1-54	Ⅲ	(17.6)			口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線(浮彫的)、波状口縁		Ⅷ斜行、渦巻曲線文	13 ⁺		風化した数石英含	復林
85	4	深鉢		R-45 Q-45, 46	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、渦巻曲線文	13 ⁺		種子残存あり	復林
85	5	深鉢		Q-48	Ⅲ				胴			Ⅷ斜行、渦巻曲線文	13 ⁺			復林
85	6	深鉢		H-57	Ⅲ				胴			Ⅷ斜行、渦巻曲線文	13 ⁺		風化した数石英含	復林
85	7	深鉢		H-57	Ⅲ				胴			Ⅷ横走か、渦巻曲線文	13 ⁺			復林
85	8	深鉢		R-30	I	(17.0)			口-胴			Ⅷ斜行、渦巻文	13 ⁺			復林
85	9	深鉢		R-56	Ⅲ				口-胴			Ⅷ斜行、渦巻文	13 ⁺			復林
85	10	深鉢		1-56	Ⅲ	(16.8)			口-胴	口唇：渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ斜行(縦印)、縦の渦巻文か	13 ⁺			復林
85	11	深鉢		Q-48	Ⅲ				胴			渦巻文、縦走・横走沈線文	13 ⁺			復林
85	12	深鉢		J-56	Ⅲ				口-胴	波状口縁、渦巻状沈線		Ⅷ斜行、渦巻文か	13 ⁺			復林
85	13	深鉢		1-54	Ⅲ				胴			Ⅷ斜行、渦巻文	13 ⁺			復林
85	14	深鉢		K-59 J-55, 56 L-59	Ⅲ	(34.6)			口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		重層弧線文(3層)	13 ⁺		石灰岩片含	復林
85	15	深鉢		Q-49	Ⅲ	(29.8)			口-胴	頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、重層弧線文	13 ⁺			復林
86	1	深鉢		K- J-59	Ⅲ	(28.6)			口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、重層弧状文	13 ⁺		外面：埋付者	復林
86	2	深鉢		J-48, 49 L-48 K-48	Ⅱ, Ⅲ	(27.0)			口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、重層弧状文(3層)	13 ⁺			復林
86	3	深鉢		Q-49	Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、重層弧状文	13 ⁺			復林
86	4	深鉢		P-51	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、波状口縁	平行沈線	Ⅷ斜行、重層弧状文	13 ⁺		外面：埋付者	復林
86	5	深鉢		J-59	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、重層弧状文	13 ⁺			復林
86	6	深鉢		Q-47	Ⅲ				口-胴	波状口縁	3条の横走沈線	Ⅷ斜行、重層弧状文	13 ⁺			復林
86	7	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	波状口縁		Ⅷ斜行・縦走、重層弧線文か	13 ⁺		外面：灰化物付着	復林
86	8	深鉢		K-55	I				胴			Ⅷ横走、重層弧状文	13 ⁺			復林
86	9	深鉢		L-54	Ⅲ				胴			Ⅷ斜行、重層弧状文	13 ⁺			復林
86	10	深鉢・鉢		H-57	Ⅲ				口-胴	平縁		Ⅷ斜行、縁部で縦区画内に渦巻文模倣	13 ⁺		大きく揺れる器形か	復林
86	11	深鉢		Q-47, 48	Ⅲ	18.3	7.3	22.3	口-底	口唇：沈線、波状口縁(2割対)	3本沈線	Ⅷ横走(3本横線と2本波線が交互に3年位)	13 ⁺		横断面楕円形の器形、底部穿孔、鋸跡孔	復林
86	12	深鉢		Q-30	I				口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(弧状)	13 ⁺			復林
86	13	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に突起、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(縦)	13 ⁺			復林
86	14	深鉢		Q-45	Ⅲ				口-胴	波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文	13 ⁺			復林
86	15	深鉢		R-30	I				口	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(弧状)	13 ⁺			復林
86	16	深鉢		P-52	Ⅲ				口	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁か		Ⅷ斜行、沈線文(弧状)	13 ⁺			復林
86	17	深鉢	表掘		Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(弧状)	13 ⁺		摩滅	復林
86	18	深鉢		R-47	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(弧状)	13 ⁺			復林
86	19	深鉢		O-54	Ⅲ				口	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ横走か、沈線文(縦)	13 ⁺			復林
86	20	深鉢		Q-30	I				口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ, 沈線文(縦)	13 ⁺			復林
86	21	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ, 沈線文(縦)	13 ⁺			復林
87	1	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に突起、沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(縦)	13 ⁺			復林
87	2	深鉢		O-52	Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ横走、沈線文(縦)	13 ⁺			復林
87	3	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、波状口縁		Ⅷ斜行、沈線文(横)	13 ⁺		石英多含	復林
87	4	深鉢		Q-48	Ⅲ				口-胴	口唇：頂部に渦巻状沈線、波状口縁		Ⅷ横走、沈線文(横)	13 ⁺			復林
87	5	深鉢		R-47	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、平縁、胴部：平行沈線間に突起列(φ2→φ3)		Ⅷ斜行、沈線文(横)	13 ⁺			復林
87	6	深鉢		Q-47	Ⅲ				口-胴	口唇：沈線、波状口縁か		Ⅷ斜行、沈線文(横)	13 ⁺			復林
87	7	深鉢		K-55	I				口-胴	口唇：沈線		Ⅷ斜行、沈線文(横)	13 ⁺			復林
87	8	深鉢		H-54	I				口-胴	口唇：沈線、平縁か		Ⅷ斜行、沈線文(横)	13 ⁺			復林

図	No	器種	遺構	J'lyt'	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口頸部	区画	地名、胴部以下	内面 調整	備考	型式	
87	9	深鉢	J-57	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	10	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ縦走		13' 7		復鉢	
87	11	深鉢	0-53	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ縦走		13' 7	石英多含	復鉢	
87	12	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	13	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	14	深鉢	L-59	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	15	深鉢	Q-46	Ⅲ					口-胴	口唇：沈澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	16	深鉢	K-59	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈 澱、波状口縁	Ⅲ縦回		13' 7		復鉢	
87	17	深鉢	K-59	Ⅲ					口-胴	口唇：沈澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	18	深鉢	H-56	Ⅲ					口-胴	口唇：沈澱、波状口縁	Ⅲ縦回		13' 7	外面：炭化物 付着	復鉢	
87	19	深鉢	J-56	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に円形刺突・ 沈澱、波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	20	深鉢	W-53	Ⅲ	(20, 8)				口-胴	口唇：胴部に刺突、波状 口縁	Ⅲ縦走		13' 7	石英多含	復鉢	
87	21	深鉢	L-54	Ⅲ					口-胴	口唇：胴部に渦巻状沈澱 を十字溝し、波状口縁	Ⅲ縦走		13' 7		復鉢	
87	22	深鉢	L-52	Ⅱ					口-胴	波状口縁、胴部に刺突	Ⅲ縦回		13' 7		復鉢	
87	23	深鉢	H-55	I					口-胴	波状口縁、胴部に円形刺 付	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	24	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	波状口縁、胴部に押	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
87	25	深鉢	I-55	I					口-胴	波状口縁、胴部に押	Ⅲ縦回		13' 7		復鉢	
87	26	深鉢	Q-47	Ⅲ					口-胴	波状口縁、胴部に円形刺 付	摩滅				復鉢	
88	1	深鉢	Q-48	Ⅱ	19. 5	10. 0	(28. 6)		口-底	波状口縁(4単位)、無文帯	Ⅲ斜行、平底		13' 7		復鉢	
88	2	深鉢	Q-48	Ⅲ	(18. 0)				口-胴	波状口縁(4単位か)	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
88	3	深鉢	L・W-52	I, Ⅱ	(18. 0)				口-胴	波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
88	4	深鉢	J-57	Ⅲ					口-胴	波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7	内外面：炭化 物付着	復鉢	
88	5	深鉢							口-胴	波状口縁	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
88	6	深鉢	Q-48	Ⅲ	(15. 8)				口-胴	波状口縁か	Ⅲ縦回		13' 7		復鉢	
88	7	深鉢	Q-47	Ⅲ					口-胴	平縁か	地文回方向 の変化		13' 7		口唇部：ター ル状物質付着	復鉢
88	8	深鉢	表保						口-胴	平縁か	Ⅲ縦走		13' 7		復鉢	
88	9	深鉢	J-56	Ⅲ					口-胴	平縁か	別状(Ⅲ斜行、横走)		13' 7		復鉢	
88	10	深鉢	0-52, P- 52		19. 0				口-胴	半円形突起と低い山形突 起が交互、半円形突起下 に細円形透かし、内外面 に沈澱	Ⅲ斜行		7?'	石英多含、外 面：炭化物付 着	復鉢	
88	11	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇：沈澱、波状口縁か	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
88	12	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴	口唇：沈澱、波状口縁か	Ⅲ縦回、横走(斜行)		13' 7		復鉢	
88	13	深鉢	Q-48	Ⅲ					口	波状口縁の胴部に円形穿 孔	Ⅲ斜行		13' 7		復鉢	
88	14	深鉢	Q-48	Ⅲ					口	波状口縁の胴部に取手			13' 7		復鉢	
88	15	深鉢	Q-48	Ⅲ					口	波状口縁の胴部に取手			13' 7		復鉢	
88	16	鉢	0-44	Ⅲ		6. 7			胴-底		Ⅲ斜行、上7底		13' 7	外面：炭化物 付着	復鉢	
88	17	鉢	Q-49	Ⅲ	(10. 3)				口-胴	平縁	沈澱間刺突 列	Ⅲ斜行、渦巻文	13' 7		復鉢	
88	18	鉢	Q-48	Ⅲ	(9. 4)				口	平縁	沈澱間刺突 列		13' 7		復鉢	
88	19	深鉢か	W-54	Ⅲ					胴-胴	沈澱間刺突 列	Ⅲ斜行、渦巻文か		13' 7		復鉢	
88	20	深鉢か	W-56	Ⅲ					胴	沈澱間刺突 列			13' 7		復鉢	
89	1	深鉢	N-44	I					口-胴		Ⅲ斜行、三角形区 画文		13' 7		後期初頭 新設品	
89	2	深鉢	表保						口-胴		Ⅲ斜行、三角形モ チーフ(磨治技法)		13' 7		後期初頭 新設品	
89	3	深鉢	Q-48	Ⅲ					口-胴		Ⅲ縦走、渦巻文		13' 7		後期初頭 新設品	
89	4	深鉢か	P-51	Ⅲ					口	波状口縁か、無文帯	沈澱文、無刺か		13' 7	外面：炭化物 付着	十層内1占	
89	5	深鉢	N-47	Ⅲ	(24. 2)	8. 3	30. 6		口-底	波状口縁、沈澱文(円・楕 圓形文(口縁)の連続)	沈澱文(縦目)、平底		13' 7	外面：炭化物 付着	十層内1占	
89	6	深鉢	H-26, S- 26	I					口-胴	平縁、沈澱文(横槽形文)	Ⅲ単筋5		13' 7		十層内1占	
89	7	浅鉢か	W-47	Ⅱ					胴		入証文		13' 7		十層内1占	
89	8	深鉢	W-47	Ⅱ					胴		渦巻文		13' 7		十層内1占	

図	No	器種	遺構	J'Fy)	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	部位	口縁部	区画	地名、副部以下	内面 調整	備考	型式
89	9	鉢か皿		L-48	II				胴			細條帯	13'f		中期後葉～ 後期前葉
89	10	皿		N-55	III				胴			彫付(渦巻文)	13'f		中期後葉～ 後期前葉
89	11	台付鉢		S-39	II	18.2			口+台	口縁：連続する突起、肥厚する突起遺部に継ぎ目と、胴部：沈線間列目縁が2段			13'f	外面：黒色、 ターール状物質 付着	後期上、 17層内VI 群、前後
90	1	深鉢		R-35	I				口-胴	突起(2胴1対か)、人組三又文か			13'f		大淵B2
90	2	深鉢		R-36	I				口-胴	人組三又文か		L形	13'f		大淵B2
90	3	深鉢・ 鉢		W-49	II				口	突起(胴位換りによる作出)、沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	4	深鉢・ 鉢		W-48	II				口	沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	5	鉢		W-48, 49	II	(28.4)			口-胴	口唇：斜位換り、突起口縁(2胴1対)、沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	6	鉢		W-48	II				口-胴	突起口縁(2胴1対)、沈線間列突列		縦線行か	13'f		大淵C1
90	7	鉢		W-48	II	(15.2)			口-胴	突起口縁(沈線により作出された2胴1対突起)、連続横位換り、沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	8	鉢		W-48, 49	II	(15.2)			口-胴	突起口縁(2胴1対)、沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	9	鉢		W-49	II	(11.4)			口-胴	沈線間列突列か		L形	13'f		晩期前半 (B-C1か)
90	10	鉢		W-48	II	(13.2)			口-胴	小波状口縁、沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	11	鉢		W-48, 49	II	(12.4)			口-胴	小波状口縁(押圧で作出)、沈線間列突列	器底部下端	L形	13'f	口部内外: 炭化物付着	大淵C1
90	12	浅鉢		W-49	II	(18.2)			口-胴	小波状口縁(押圧で作出)、沈線間列突列		L形	13'f		大淵C1
90	13	浅鉢		W-49	II	20.2	5.0	7.5	口-底	平縁、沈線間列突列		L形、雲形文(配文と充填文)	13'f	外面全面：黒色 漆塗布か	大淵C1
90	14	浅鉢		W-48, 49	II	(22.8)			口-胴	口唇：人組状の彫出、連続突起口縁(2胴1対)		L形、雲形文(配文と充填文)	器部 剥落	内外面：黒漆 塗布か	大淵C1
90	15	台付鉢		W-48, 49	II		7.8		胴+台			胴部:L形、台部:横 位沈線、無文帯、沈 線間列突列、L形			大淵C1
90	16	台付鉢		R-36	I		(7.2)		台			台部：沈線、L形			大淵C1
90	17	台付鉢		W-49	II		(8.0)		台			台部：横位沈線、無 文帯、沈線間列突 列、L形			大淵C1
91	1	皿		W-49	II	(12.2)			口-胴	突起(2胴1対が2段)、沈線間列突列			13'f		大淵C1
91	2	皿		W-49	I				口-胴	沈線		L形	13'f		大淵C1
91	3	皿		W-48	II				胴	沈線間列突列、沈線		L形	13'f		大淵C1
91	4	鉢					6.2		胴-底			無文帯か	L形	13'f	晩期前～中 葉
91	5	深鉢		W-48, 49	II				口-胴	小波状口縁		無文	13'f		晩期前～中 葉
91	6	皿		H-56	III	(6.4)			口-胴			無文	13'f		晩期前～中 葉
91	7	深鉢		R-29, Q-29	I, II, III	(26.0)			口-胴	小波状口縁か(成型時のゆれか)		L形	13'f	外面：炭化物 付着	晩期前～中 葉
91	8	深鉢		R-37	カタラン				胴			L形	13'f		晩期前～中 葉
91	9	深鉢		L-57	III	(17.0)			口-胴	胴位2胴1対の突起口縁、三又文、内面に沈線		縦線目	13'f		大淵B2～A'
91	10	皿		P-51	III				胴	底木丁字文が2段(上は木方文、下はゴジ文)			13'f		大淵A3
91	11	浅鉢	表録						口	雲形丁字文		L形	13'f		大淵A'

表10 剥片石器観察表

図	No	遺構名	出土位置	S番	層位	器種	器種	備考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
14	13S101	K-00	S××	堆積土	剥片	石鏃	無垢土基		26	17	5	1.3	珩質頁岩	
14	2S101	SK01	I-01	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	48	17	6	1.6	珩質頁岩	
14	3S101	K-50	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	22	14	5	1.1	珩質頁岩		
14	4S101	I-00	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	33	17	6	2.3	珩質頁岩		
14	5S101	J-50	S××	Bセク2	剥片	石鏃	有垢土基	34	13	6	1.7	珩質頁岩		
14	6S101	J-00	S××	Aセク2	剥片	石鏃	有垢土基	42	16	8	3.5	珩質頁岩		
14	7S101	I-01	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	40	18	11	6.0	珩質頁岩	未成品?	
14	8S101	I-01	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	52	17	9	8.2	珩質頁岩	珩質頁岩あり	
14	9S101	K-50	S××	Aセク3	剥片	石鏃	有垢土基	47	23	11	7.3	珩質頁岩	石鏃?	
14	10S101	J-51	S××	堆積土	剥片	石鏃	大	107	29	12	34.9	珩質頁岩		
14	11S101	J-51	S××	堆積土	剥片	石鏃	大	96	28	12	30.2	珩質頁岩		
14	12S101	J-00	S××	床面直土	剥片	石鏃	大	88	27	13	27.4	珩質頁岩		
14	13S101	I-01	S××	堆積土	剥片	石鏃	中	75	21	10	13.9	珩質頁岩		
14	14S101	J-00	S××	Aセク2	剥片	石鏃	3割線 片面	34	49	26	48.1	珩質頁岩		
14	15S101	I-01	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 急 片面	35	43	12	13.9	珩質頁岩	鋭縁剥離あり	
14	16S101	J-50	S××	床面直土	剥片	スクレイパー	4割線 急 片面	50	73	18	63.8	珩質頁岩		
14	17S101	J-50	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	2割線 緩急 片	28	19	11	5.7	珩質頁岩		
14	18S101	J-50	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	4割線 両面	49	23	9	8.1	珩質頁岩		
14	19S101	J-01	S××	堆積土上段	剥片	二次加工剥片	3割線 両面	82	32	17	44.2	珩質頁岩	石鏃未成品?	
17	5S102	I-01	S××	Aセク3	剥片	石鏃	無垢土基	28	15	4	1.1	珩質頁岩		
17	6S102	I-02	S××	床面直土	剥片	石鏃	無垢土基	37	15	8	3.2	珩質頁岩		
17	7S102	I-51	S××	壁面下段	剥片	石鏃	有垢土基	30	19	5	1.8	珩質頁岩		
17	8S102	I-52	S××	ベルト3	剥片	石鏃	有垢土基	30	15	8	1.8	珩質頁岩		
17	9S102	I-01	S××	壁面下段	剥片	石鏃	有垢土基	36	17	5	2.2	珩質頁岩		
17	10S102	I-02	S××	ベルト3	剥片	石鏃	有垢土基	30	16	8	4.4	珩質頁岩		
17	11S102	I-02	S××	堆積土下段	剥片	石鏃	大	88	29	10	23.9	珩質頁岩		
17	12S102	I-52	S××	ベルト3	剥片	石鏃	大	78	25	11	19.9	珩質頁岩		
17	13S102	H-52	S××	床面直土	剥片	石鏃	小	65	26	9	13.9	珩質頁岩		
17	14S102	I-52	S××	堆積土	剥片	石鏃	4割線 片面 折曲	22	33	19	10.5	珩質頁岩		
17	15S102	H-02	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 緩 両面	34	48	18	25.1	珩質頁岩	鋭縁剥離あり	
17	16S102	SP01	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	3割線 緩 片	15	16	6	1.6	珩質頁岩		
17	17S102	I-51	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 両面	31	19	8	5.6	珩質頁岩	鋭縁剥離あり	
17	18S102	H-02	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	4割線 両面	41	21	6	5.4	珩質頁岩	未成品?	
21	8S103	L-48	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	35	14	5	2.0	珩質頁岩		
21	9S103	L-48	S××	堆積土	剥片	石鏃	1割線 片面	47	77	50	178.0	珩質頁岩		
21	10S103	L-48	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 緩 両面	65	32	14	18.2	珩質頁岩		
21	11S103	L-48	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	1割線 片/両	39	32	11	15.7	珩質頁岩		
27	1S104	T-34	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	18	20	10	3.9	珩質頁岩		
27	2S104	T-34	S××	堆積土下層	剥片	石鏃	有垢土基	27	16	8	1.9	珩質頁岩		
27	3S104	T-34	S××	堆積土上層	剥片	石鏃	有垢土基	(22)	13	3	(1.3)	珩質頁岩		
27	4S104	T-34	S××	堆積土	剥片	石鏃	(28)	13	4	(1.2)	珩質頁岩			
27	5S104	T-33	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	(42)	16	8	(3.9)	珩質頁岩		
27	6S104	T-34	S××	堆積土	剥片	石鏃	大	90	32	16	38.3	珩質頁岩		
27	7S104	T-34	S××	堆積土下層	剥片	石鏃	大	26	69	11	23.6	珩質頁岩		
27	8S104	T-34	S××	堆積土上層	剥片	石鏃	中	47	45	11	16.4	珩質頁岩		
27	9S104	EW-ベルト	S××	9	剥片	石鏃	2割線 片面 対	61	77	24	90.3	珩質頁岩		
27	10S104	T-34	S××	2	剥片	スクレイパー	2割線 急 片面	49	16	10	6.2	珩質頁岩	石鏃?	
27	11S104	T-03	S××	堆積土上層	剥片	スクレイパー	3割線 急 片面 鋭角	24	15	6	1.7	珩質頁岩	石鏃?	
27	12S104	S××	1	剥片	二次加工剥片	2割線 片面	33	36	10	11.0	珩質頁岩	石鏃? 被熱		
27	13S104	EW-ベルト	S××	9	剥片	二次加工剥片	2割線 両面	86	44	16	51.0	珩質頁岩	石鏃?	
32	9S105	Q-41	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	44	19	11	5.5	珩質頁岩		
32	10S105	Q-41	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	32	13	5	1.4	珩質頁岩		
32	11S105	R-41	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	37	17	4	1.3	珩質頁岩		
32	12S105	S××	6	剥片	石鏃	片面 鋭	40	22	5	3.5	珩質頁岩	鋭縁あり		
32	13S105	S××	床面直土	剥片	石鏃	大	92	28	11	26.6	珩質頁岩			
32	14S105	S××	5	剥片	スクレイパー	1割線 急 片面	50	35	16	26.0	珩質頁岩			
32	15S105	P111	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 緩 片面	38	16	7	3.9	珩質頁岩		
32	16S105	石鏃研	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	3割線 両面	38	47	20	42.2	珩質頁岩		
32	17S105	S××	6	剥片	二次加工剥片	4割線 両面	46	21	8	7.7	珩質頁岩	未成品?		
32	7S106	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	43	16	7	3.0	珩質頁岩			
33	8S106	底薬付	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 急 片面	87	59	16	60.2	珩質頁岩	被熱?	
33	18S107	底薬付	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	33	17	9	5.2	珩質頁岩		
33	19S107	底薬付	S××	堆積土	剥片	石鏃	中	77	35	13	33.7	珩質頁岩		
33	20S107	R-31	S××	堆積土	剥片	石鏃	緩	84	23	8	12.0	珩質頁岩		
33	21S107	P111	S××	堆積土	剥片	石鏃	2割線 両面 対	49	30	21	25.2	珩質頁岩		
33	22S107	底薬付	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 緩 片面	45	29	7	9.9	珩質頁岩		
33	23S107	底薬	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 急 片面	38	42	18	24.4	珩質頁岩		
33	24S107	R-31	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	2割線 両面	25	27	10	5.2	珩質頁岩	未成品?	
33	25S107	底薬	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	4割線 片面	34	18	6	2.9	珩質頁岩	石鏃未成品?	
33	1S108	R-34	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	(32)	15	5	(2.1)	珩質頁岩		
33	2S108	R-34	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	26	17	8	3.7	珩質頁岩		
33	3S108	P112	S××	堆積土	剥片	石鏃	片面 急	38	16	6	1.3	珩質頁岩	鋭縁あり	
33	4S108	S××	床面	剥片	石鏃	中	71	24	11	16.0	珩質頁岩			
33	5S108	R-34	S××	堆積土	剥片	石鏃	緩	51	16	10	5.9	珩質頁岩		
33	6S108	底薬	S××	堆積土	剥片	石鏃	5割線 片面	42	54	31	74.8	珩質頁岩		
33	7S108	P111	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	1割線 急 片面	43	43	14	24.3	珩質頁岩		
33	8S108	底薬付	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	2割線 急 片面	37	30	12	11.4	珩質頁岩	石鏃?	
33	9S108	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	2割線 緩急 片面	37	18	5	2.7	珩質頁岩			
33	10S108	底薬付	S××	堆積土	剥片	二次加工剥片	2割線 両面 直	62	60	24	62.9	珩質頁岩		
33	11S108	S××	床面	剥片	二次加工剥片	3割線 両面	25	16	7	1.8	珩質頁岩	石鏃未成品?		
42	8S109	S××	堆積土	剥片	石鏃	有垢土基	(96)	16	7	(3.2)	珩質頁岩			
42	9S109	S××	堆積土	剥片	石鏃	3割線 片面	73	75	38	221.1	珩質頁岩			
42	10S109	研	S××	床面	剥片	スクレイパー	1割線 急 片面	27	16	5	1.6	珩質頁岩	アスファルト付着?	
42	11S109	研	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	2割線 片面	32	20	5	3.8	珩質頁岩	石鏃?	
42	12S109	研	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	4割線 急 両面	67	30	10	17.6	珩質頁岩		
42	7S102	R-48	S××	堆積土	剥片	石鏃	大	87	31	12	24.0	珩質頁岩		
42	8S102	K-48	S××	堆積土	剥片	スクレイパー	2割線 急 片/両	52	20	11	10.4	珩質頁岩		

図	No	遺構名	出土位置	S番号	単位	階層	形種	備考	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(kg)	石材	備考
49	9/SK02	K-54	S××	堆積土	測片	二次加工測片	4個縁 両面		48	19	10	7.8	珠質頁岩	
49	12/SK04	K-54	S××	堆積土	測片	石硯	2個縁 片/両直		44	38	30	54.2	珠質頁岩	
49	14/SK04	K-54	S××	堆積土	測片	二次加工測片	4個縁 両面		45	15	9	4.9	珠質頁岩	石硯生成品
49	15/SK04	K-54	S××	堆積土	測片	スタレイバー	1個縁 縁片面		41	66	10	16.3	珠質頁岩	
51	1/SK05	K-54	S××	1	測片	石硯	有基丸基		33	14	5	1.3	珠質頁岩	
51	2/SK05	K-54	S××	1	測片	石硯	有基丸基		21	41	9	4.9	珠質頁岩	積み部あり
51	3/SK05	K-54	S××	4	測片	石硯	3個縁 その他		21	41	49	44.8	珠質頁岩	
51	4/SK05	K-54	S××	2	測片	スタレイバー	2個縁 縁色片面		70	52	12	37.8	珠質頁岩	
51	5/SK05	K-54	S××	2	測片	スタレイバー	2個縁 色片面 縁		39	33	14	16.7	珠質頁岩	石硯?
51	6/SK05	K-54	S××	5	測片	二次加工測片	4個縁 両面		25	12	3	1.0	珠質頁岩	石硯生成品?
51	9/SK06	K-54	S××	8	測片	石硯	有基丸基		38	13	4	1.6	珠質頁岩	
51	10/SK06	K-54	S××	8	測片	石硯	有基丸基		34	50	7	12.9	珠質頁岩	
51	11/SK06	J-54	S××	堆積土	測片	石硯	2個縁 両面 直縁		38	26	17	18.1	珠質頁岩	
51	12/SK06	J-54	S××	堆積土	測片	スタレイバー	1個縁 色片面		37	36	11	12.7	珠質頁岩	
52	5/SK07	K-52	S××	1	測片	石硯	無基丸基		27	14	5	1.4	珠質頁岩	
52	6/SK07	K-52	S××	1	測片	石硯	無基丸基		55	16	7	3.8	珠質頁岩	
52	7/SK07	K-52	S××	1	測片	スタレイバー	2個縁 色片面		58	49	15	38.5	珠質頁岩	
52	8/SK07	K-52	S××	1	測片	二次加工測片	4個縁 両面		38	13	4	1.5	珠質頁岩	石硯生成品?
52	14/SK08	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	大		57	49	14	34.9	珠質頁岩	
52	15/SK08	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	2個縁 両面 対		57	77	25	107.9	珠質頁岩	
52	16/SK08	K-52	S××	堆積土	測片	スタレイバー	1個縁 色片面		33	39	17	15.5	珠質頁岩	
53	1/SK10	K-52	S××	2	測片	石硯	無基丸基		27	15	5	1.5	珠質頁岩	
53	2/SK10	K-52	S××	2	測片	石硯	無基丸基		(38)	17	6	1.7	珠質頁岩	
53	3/SK10	K-52	S××	2	測片	石硯	有基丸基		28	16	4	1.5	珠質頁岩	
53	4/SK10	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	有基丸基		39	16	8	3.8	珠質頁岩	
53	5/SK10	K-52	S××	堆積土	測片	スタレイバー	1個縁 縁片面		41	58	24	42.1	珠質頁岩	
53	6/SK10	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	2個縁 片面 直		61	78	43	134.4	珠質頁岩	
53	9/SK13	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	4個縁 その他		72	118	22	284.2	珠質頁岩	
53	10/SK13	K-52	S××	堆積土	測片	スタレイバー	2個縁 色片面		38	22	12	8.1	珠質頁岩	
54	3/SK14	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	無基丸基		(96)	10	7	(6.5)	珠質頁岩	
54	10/SK16	K-52	S××	堆積土	測片	スタレイバー	2個縁 色片面 直縁		47	38	10	14.5	珠質頁岩	
55	11/SK17	K-52	S××	1	測片	石硯	無基丸基		39	19	7	4.8	珠質頁岩	
55	12/SK17	K-52	S××	1	測片	石硯	2個縁 片面		37	45	12	19.5	珠質頁岩	
55	16/SK20	K-46	S××	3	測片	スタレイバー	1個縁 縁片面		31	33	9	13.7	珠質頁岩	
55	22/SK21	K-52	S××	堆積土	測片	石硯	小		27	15	6	1.9	珠質頁岩	
55	23/SK21	K-52	S××	堆積土	測片	スタレイバー	3個縁 色片面		76	43	11	32.6	珠質頁岩	
60	8/SY08	S-32	S××	2	測片	石硯	無基丸基		46	14	6	2.8	珠質頁岩	
63	1/SY1	S-30	S××	1	測片	石硯	基部あり		85	30	13	29.9	珠質頁岩	
63	2/SY-1	S-30	S××	1	測片	スタレイバー	3個縁 色片面		70	46	12	23.4	珠質頁岩	
92	1	S-31	S××	1	測片	石硯	無基丸基		26	18	4	1.5	珠質頁岩	
92	2	S-48	S××	1	測片	石硯	無基丸基		72	13	6	2.7	珠質頁岩	
92	3	S-48	S××	1	測片	石硯	無基丸基		(32)	12	4	(1.1)	珠質頁岩	調整部周辺の
92	4	S-30	S××	1	測片	石硯	無基丸基		69	16	9	5.1	珠質頁岩	調整部中央まで
92	5	T-37	S××	1	測片	石硯	有基丸基		32	15	4	1.2	珠質頁岩	
92	6	H-54	S××	1	測片	石硯	有基丸基		30	17	4	1.3	珠質頁岩	
92	7	T-34	S××	1	測片	石硯	有基丸基		29	18	6	2.2	珠質頁岩	
92	8	S-31	S××	1	測片	石硯	有基丸基		(32)	11	4	0.9	珠質頁岩	
92	9	Q-29	S××	1	測片	石硯	有基丸基		(51)	14	5	(1.6)	珠質頁岩	
92	10	J-55	S××	1	測片	石硯	有基丸基		42	18	5	2.0	珠質頁岩	
92	11	P-43	S××	1	測片	石硯	有基丸基		(40)	22	7	(4.5)	珠質頁岩	
92	12	Q-28	S××	1	測片	石硯	有基丸基		28	16	3	0.9	珠質頁岩	
92	13	T-36	S××	1	測片	石硯	有基丸基		33	21	11	4.8	珠質頁岩	
92	14	P-28	S××	1	測片	石硯	有基丸基		(32)	19	7	(4.0)	珠質頁岩	
92	15	Q-29	S××	1	測片	石硯	有基丸基		22	11	4	0.4	珠質頁岩	
92	16	Q-29	S××	1	測片	石硯	有基丸基		26	10	4	0.6	珠質頁岩	
92	17	T-37	S××	1	測片	石硯	有基丸基		32	15	5	1.4	珠質頁岩	
92	18	R-28	S××	1	測片	石硯	有基丸基		41	15	5	2.5	珠質頁岩	
92	19	Q-44	S××	1	測片	石硯	有基丸基		45	15	7	2.9	珠質頁岩	
92	20	Q-48	S××	1	測片	石硯	有基丸基		(53)	20	8	(6.3)	珠質頁岩	
92	21	J-53	S××	1	測片	石硯	有基丸基		(66)	18	12	(5.9)	珠質頁岩	
92	22	Q-49	S××	1	測片	石硯	両面		50	9	6	2.3	珠質頁岩	
92	23	Q-28	S××	1	測片	石硯	両面		32	9	5	1.0	珠質頁岩	
92	24	H-56	S××	1	測片	石硯	大		164	38	20	109.7	珠質頁岩	
92	25	Q-45	S××	1	測片	石硯	大		94	38	26	76.5	珠質頁岩	
92	26	S-48	S××	1	測片	石硯	小		107	45	17	83.9	珠質頁岩	
92	27	S-16	S××	1	測片	石硯	大		71	27	12	21.8	黒曜石	
93	1	M-52	S××	1	測片	石硯	大		63	31	13	27.6	珠質頁岩	
93	2	R-45	S××	1	測片	石硯	中		72	24	11	16.2	珠質頁岩	
93	3	R-34	S××	1	測片	石硯	中		71	26	11	20.0	珠質頁岩	
93	4	J-49	S××	1	測片	石硯	中		69	23	14	18.4	珠質頁岩	
93	5	S-53	S××	1	測片	石硯	小		68	23	13	12.6	珠質頁岩	
93	6	S××	S××	1	測片	石硯	小		57	18	8	8.4	珠質頁岩	
93	7	S-30	S××	1	測片	石硯	大		122	40	28	116.5	珠質頁岩	
93	8	H-54	S××	1	測片	石硯	大		92	57	25	99.4	珠質頁岩	
93	9	J-55	S××	1	測片	石硯	中		87	36	13	51.2	珠質頁岩	
93	10	S-31	S××	1	測片	石硯	中		76	44	12	25.3	珠質頁岩	
93	11	S-48	S××	1	測片	石硯	小		75	28	14	27.4	珠質頁岩	
93	12	Q-48	S××	1	測片	石硯	小		69	26	13	20.9	珠質頁岩	
94	1	Q-48	S××	1	測片	石硯	縁		108	44	13	51.9	珠質頁岩	
94	2	Q-48	S××	1	測片	石硯	縁		84	44	12	30.4	珠質頁岩	
94	3	H-54	S××	1	測片	石硯	縁		41	30	5	5.3	珠質頁岩	
94	4	S-30	S××	1	測片	石硯	縁		80	34	13	21.8	珠質頁岩	
94	5	S-53	S××	1	測片	石硯	縁		69	29	12	18.9	珠質頁岩	
94	6	H-54	S××	1	測片	石硯	縁		87	29	17	35.6	珠質頁岩	
94	7	Q-48	S××	1	測片	石硯	縁		55	81	16	68.3	珠質頁岩	
94	8	S-53	S××	1	測片	石硯	縁		38	68	12	26.9	珠質頁岩	
94	9	R-33	S××	1	測片	石硯	縁		96	54	14	30.9	珠質頁岩	

図	No	遺構名	出土位置	S番号	層位	部種	附種	備考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
94	10	Q-47	S×S	■	剥片	石巻	塊		52	46	10	19.7	珩質頁岩	
94	11	Q-48	S×S	■	剥片	石巻	塊		35	46	10	15.9	珩質頁岩	
94	12	S-32	S×S	1	剥片	石巻	塊		41	49	9	10.6	珩質頁岩	
95	1	Q-44	S×S	表様	剥片	石巻	1側縁 両面		89	151	66	993.4	珩質頁岩	
95	2	Q-49	S×S	■	剥片	石巻	1側縁 両面		49	103	45	234.7	珩質頁岩	
95	3	I-49	S×S	1	剥片	石巻	1側縁 両面		47	61	40	101.1	珩質頁岩	
96	1	P-51	S×S	■	剥片	石巻	2側縁 片面 直		46	49	22	43.1	珩質頁岩	
96	2	Q-47	S×S	■	剥片	石巻	2側縁 片/両 直		40	48	28	59.1	珩質頁岩	
96	3	I-55	S×S	■	剥片	石巻	2側縁 両面 対		61	38	31	67.1	珩質頁岩	
96	4	I-54	S×S	■	剥片	石巻	3側縁 その他		38	52	30	70.4	珩質頁岩	
96	5	I-57	S×S	■	剥片	石巻	3側縁 その他		78	89	20	199.3	珩質頁岩	
96	6	Q-28	S×S	1	剥片	石巻	3側縁 その他		27	24	10	5.9	珩質頁岩	
96	7	Q-32	S×S	■	剥片	石巻	3側縁 その他		51	41	24	50.4	珩質頁岩	
97	1	P-43	S×S	■	剥片	石巻	3側縁 両面		63	82	78	479.9	珩質頁岩	
97	2	Q-47	S×S	■	剥片	石巻	4側縁 両面		98	63	31	152.5	珩質頁岩	
97	3	I-54	S×S	■	剥片	石巻	4側縁 両面		55	49	28	77.6	珩質頁岩	
97	4	Q-47	S×S	■	剥片	石巻	4側縁 片面		37	42	19	22.8	珩質頁岩	
98	1	Q-46	S×S	■	剥片	スタレイバー	1側縁 縦 片面		58	58	16	34.4	珩質頁岩	
98	2	T-31	S×S	1	剥片	スタレイバー	1側縁 縦 片面		56	35	11	11.4	珩質頁岩	
98	3	S-31	S×S	1	剥片	スタレイバー	1側縁 縦 片面		65	31	13	22.0	珩質頁岩	微細割離あり
98	4	Q-48	S×S	■	剥片	スタレイバー	1側縁 縦 両面		96	42	12	43.6	珩質頁岩	
98	5	T-54	S×S	■	剥片	スタレイバー	1側縁 色 両面		81	67	18	104.1	珩質頁岩	微細割離あり
98	6	I-55	S×S	1	剥片	スタレイバー	1側縁 色 片面		54	46	15	38.5	珩質頁岩	
98	7	T-27	S×S	■	剥片	スタレイバー	1側縁 色 片面		51	71	10	29.0	珩質頁岩	
98	8	Q-48	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 縦 片面 直		66	35	9	15.1	珩質頁岩	
98	9	N-54	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 縦 片面 直		49	50	10	19.4	珩質頁岩	
98	10	N-55	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 色 片面		62	28	13	17.6	珩質頁岩	
98	11		S×S		剥片	スタレイバー	2側縁 色 片面 直		82	32	21	49.9	珩質頁岩	微細割離あり
98	12	P-49	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 色 片/両 直		40	40	14	22.0	珩質頁岩	
98	13	S-32	S×S	1	剥片	スタレイバー	2側縁 色 片/両		44	20	6	6.2	微石炭	
98	14	Q-49	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 色 片/両		61	38	7	11.1	珩質頁岩	
99	1	Q-47	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 色 両面		77	44	14	50.1	珩質頁岩	
99	2	N-53	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 色 両面		59	27	13	16.9	珩質頁岩	石鏽?
99	3	P-51	S×S	■	剥片	スタレイバー	2側縁 色 両面		54	23	7	6.4	珩質頁岩	石鏽?
99	4	I-51	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 色 片面		28	45	22	39.3	珩質頁岩	
99	5	Q-47	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 縦 片面		68	67	13	40.9	珩質頁岩	石鏽未成品?
99	6	P-50	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 色 片面		76	82	24	114.5	珩質頁岩	
99	7	Q-48	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 色 片面		50	37	9	12.4	珩質頁岩	
99	8	N-45	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 色 片面		24	33	8	4.7	珩質頁岩	
99	9	I-54	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 色 片面		54	25	9	9.2	珩質頁岩	
99	10	N-54	S×S	1	剥片	スタレイバー	3側縁 色 片面		94	28	19	31.8	珩質頁岩	石鏽? 微細割離あり
99	11	N-53	S×S	■	剥片	スタレイバー	3側縁 色 両面		102	45	19	87.2	珩質頁岩	
99	12	I-56	S×S	■	剥片	スタレイバー	4側縁 色 片面		50	44	6	14.9	珩質頁岩	
99	13	Q-48	S×S	■	剥片	二次加工剥片	2側縁 端		33	49	15	27.5	珩質頁岩	

表11 礎石器観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置	部位	種類	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
15	1	S101	1-51	堆積土	礎石器	磨石	144	89	35	587.7	安山岩	2面入り・側面入り
17	19	S102	1-52	床面直上	礎石器	磨製石斧	108.5	73.5	57.0	163.3	緑色岩	
17	20	S102	1-52	南壁部床面	礎石器	部石	186	76	39	613.6	安山岩	4面入り・表面に凹
18	1	S102	1-52	床面	礎石器	台石	200	240	540	3,281.7	安山岩	片面に凹削
22	1	S103		床面	礎石器	磨石	161	121	42	1,195.5	安山岩	長軸端部に割縁状、2面入り
28	1	S104	7-33	堆積土下層	礎石器	磨製石斧	85	36	14	64.6	緑色岩	
28	2	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	169	120	50	1,390.1	安山岩	2面入り・被熱痕有り
28	3	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	148	98	35	763.5	安山岩	2面入り
28	4	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	162	114	51	1,417.9	安山岩	2面入り
28	5	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	175	125	57	1,815.3	安山岩	2面入り
28	6	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	178	94	48	1,077.5	安山岩	2面入り・被熱痕有り
29	1	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	153	110	48	1,090.3	安山岩	2面入り
29	2	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	157	100	38	857.9	安山岩	2面入り・被熱痕有り
29	3	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	194	104	51	1,510.4	安山岩	2面入り・被熱痕有り
29	4	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	162	106	41	1,101.5	安山岩	2面入り・被熱痕有り・凹
29	5	S104	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	172	115	50	1,206.8	安山岩	2面入り・被熱痕有り
29	6	S104		伊1層	礎石器	磨石	(45)	(73)	33	114.5	安山岩	自然の跡のみ(穿孔目のみ)・1面入り
30	1	S104		床面直上	礎石器	半円状扁平打製石器	161	90	25	497.0	花崗閃緑岩	
30	2	S104		7層	礎石器	台石	242	388	108	11,110.0	安山岩	
30	3	S104	石溝伊	伊石	礎石器	台石	188	136	53.0	1,861.2	安山岩	
30	4	S104		7層	礎石器	台石	240	120	70	3,138.8	安山岩	
30	5	S104	7-34	堆積土	礎石器	台石	261	220	36	2,452.1	安山岩	
32	18	S105		床面	礎石器	磨石	160	99	46	1,107.7	安山岩	2面入り
32	19	S105	9-10	堆積土	礎石器	磨石	178	90	53	1,300.3	安山岩	2面入り
33	1	S105		床面	礎石器	磨石	158	89	59	1,228.1	安山岩	2面入り
33	2	S105		3層	礎石器	部石	165	77	49	420.5	安山岩	2面入り・凹
33	3	S105	石溝伊	伊石	礎石器	磨石	140	99	48	883.8	安山岩	2面入り・被熱痕有り
33	4	S105	石溝伊	伊石	礎石器	砥石	77.5	85.5	34	54.7	軽石	
36	1	S107	8-30	堆積土	礎石器	磨石	152	77	54	1,027.3	安山岩	2面入り
36	2	S107	床面直上	堆積土	礎石器	磨石	158	82	42	864.5	安山岩	2面入り・側面入り・凹
36	3	S107	8-30	堆積土	礎石器	磨石	164	69	54	968.2	安山岩	2面入り
36	4	S107	床面直上	堆積土	礎石器	磨石	160	79	49	1,070.2	花崗閃緑岩	側面磨、長軸端部に割縁
36	5	S107		床面直上	礎石器	台石	258	169	94	5,320.0	安山岩	表面に凹削あり
39	12	S108		床面	礎石器	磨石	179	80	66	1,516.6	安山岩	1面入り
39	13	S108		床面	礎石器	磨石	168.5	87.5	60	1,224.6	安山岩	1面入り
43	1	S109		礎部面	礎石器	台石	420	550	186	48,090.0	安山岩	
43	2	S109		床面	礎石器	半円状扁平打製石器	(113)	82	36	475.9	花崗閃緑岩	
43	3	S109		床面直上	礎石器	台石	180	346	62	4,920.0	滝沢岩	
43	4	S109	伊1	粘土直層	礎石器	台石	221	388	98	16,440.0	安山岩	
43	5	S109	伊2	床面	礎石器	台石	355	505	140	32,000.0	安山岩	被熱痕有り
44	1	S109	伊2	床面	礎石器	台石	361	404	73	16,000.0	安山岩	
44	2	S109	伊2	床面	礎石器	台石	255	409	109	16,440.0	安山岩	被熱痕有り
44	3	S109	伊2	床面	礎石器	台石	350	475	110	27,400.0	安山岩	
49	16	S804		堆積土	礎石器	台石	(269)	86.5	5,368.1	安山岩		
49	17	S804		1層	礎石器	浮子	40	55	35	5.5	軽石	
54	4	S814		堆積土	礎石器	部石	187	126	82	2,777.2	花崗閃緑岩	
54	5	S814		1層	礎石器	台石	363	323	88	18,880.0	安山岩	
63	3	RL-01	8-30	竪	礎石器	磨石	83.5	71	66	531.0	安山岩	全面入り
63	4	RL-01	8-30	竪	礎石器	磨石	61	46	37	145.0	安山岩	全面入り
63	5	RL-01	8-30	竪	礎石器	磨石	49	44	39	106.0	安山岩	2面入り
63	6	RL-01	8-30	竪	礎石器	磨石	52	50.5	22	83.6	安山岩	2面入り
63	7	RL-01	8-30	竪	礎石器	磨石	69	60	19.5	119.2	安山岩	2面入り

国図 番号	建物 番号	建構名	出土位置	層位	種類	設備	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
	100	1 遺構体	B-27	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	135	41	27	230.1	緑色岩	
	100	2 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	100	44	25	169.9	緑色岩	刀部欠損
	100	3 遺構体		I	礎石部	磨製石斧	(127)	69	30	292.2	花崗閃緑岩	刀部欠損
	100	4 遺構体	Q-32	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	153	66	34	641.0	安山岩	刀部一部→右側面欠損
	100	5 遺構体	Q-47	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(135)	61	26	280.5	安山岩	
	100	6 遺構体	F-33	I	礎石部	磨製石斧	(168)	52	28	267.3	安山岩	基部欠損
	100	7 遺構体	Q-47	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	832	69	26	162.3	安山岩	基部欠損
	100	8 遺構体	L-54	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	653	55	30	190.1	緑色岩	基部欠損
	100	9 遺構体	1-56	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(59)	50	14	72.5	緑色岩	基部欠損
	100	10 遺構体	B-65	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(56)	42	11	40.9	緑色岩	基部欠損
	100	11 遺構体	Q-47	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(53)	36	23	45.0	緑色岩	基部欠損
	100	12 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(113)	(34)	(15)	102.5	緑色岩	刀部欠損
	100	13 遺構体	S-41	I	礎石部	磨製石斧	(66)	52	28	172.8	安山岩	刀部欠損
	100	14 遺構体	Q-47	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(70)	29	14	76.0	緑色岩	刀部欠損
	100	15 遺構体	Q-47	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(70)	(60)	15	66.1	緑色岩	刀部欠損
	101	1 遺構体	X-8	I	礎石部	磨製石斧	(67)	(69)	(20)	149.8	安山岩	刀部欠損
	101	2 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	832	53	(23.5)	141.2	安山岩	刀部欠損
	101	3 遺構体	Q-49	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(74)	68	27	220.9	安山岩	刀部欠損
	101	4 遺構体	S-27	I	礎石部	磨製石斧	(51)	(25)	(14)	35.3	緑色岩	刀部中心中間部欠損
	101	5 遺構体	T-26	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(19.0)	(20)	(14)	7.0	緑色岩	刀部
	101	6 遺構体	T-51	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(26)	(22)	(11.0)	5.60	泥岩	刀部
	101	7 遺構体	B-54	I	礎石部	磨製石斧	(23)	(23)	(16)	6.7	花崗閃緑岩	刀部
	101	8 遺構体	Q-46	Ⅲ→IV	礎石部	磨製石斧	(24)	(20)	(4.5)	2.8	緑色岩	刀部
	101	9 遺構体	T-52	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	117	59.5	32.3	335.4	花崗閃緑岩	未成品・剥離破と敲打痕あり
	101	10 遺構体	K-53	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	143	85	30	470.9	花崗閃緑岩	未成品
	101	11 遺構体	S-31	I	礎石部	磨製石斧	81	52	21	203.7	緑色岩	右側面材・右側面に一欠の痕
	101	12 遺構体	T-26	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	(40)	(40)	24	38.1	緑色岩	右側面材・右側面に一欠の痕
	101	13 遺構体	T-29	Ⅲ→Ⅳ	礎石部	磨製石斧	(102)	(117)	8	114.0	黄緑岩	
	101	14 遺構体	K-51	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	60	(70)	15	68.6	安山岩	
	101	15 遺構体	T-51	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	50	44	11	20.8	泥岩	
	101	16 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	93	87	80	801.9	安山岩	全面欠損
	101	17 遺構体	S-34	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	63.5	65	60	341.1	安山岩	全面欠損
	101	18 遺構体	B-29	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	39	36	31.5	61.8	安山岩	全面欠損
	101	19 遺構体	Q-29	I	礎石部	磨製石斧	39	35	22	41.7	安山岩	2面欠損
	101	20 遺構体	S-31	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	46	44	15	41.1	安山岩	2面欠損
	102	1 遺構体	S-32	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	46	44	19	46.6	安山岩	2面欠損
	102	2 遺構体	S-30	I	礎石部	磨製石斧	55	48	26	78.7	安山岩	2面欠損
	102	3 遺構体	B-34	I	礎石部	磨製石斧	63	51	31	143.7	安山岩	2面欠損
	102	4 遺構体	B-27	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	58	50	26	107.7	安山岩	2面欠損
	102	5 遺構体	B-66	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	55	54	22	194.3	安山岩	2面欠損
	102	6 遺構体	Q-54	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	81	73	24	234.6	安山岩	2面欠損
	102	7 遺構体	T-29	I	礎石部	磨製石斧	90	74	33	264.1	安山岩	2面欠損
	102	8 遺構体	B-34	I	礎石部	磨製石斧	75	64	45	259.2	安山岩	2面欠損
	102	9 遺構体	S-40	I	礎石部	磨製石斧	74	69	27	201.3	安山岩	2面欠損
	102	10 遺構体	T-31	I	礎石部	磨製石斧	76	71	36	276.4	安山岩	2面欠損
	102	11 遺構体	K-54	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	87	72	40	318.4	安山岩	2面欠損
	102	12 遺構体	B-57	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	110	91	31	319.3	安山岩	2面欠損
	102	13 遺構体	B-31	I	礎石部	磨製石斧	110	113	40	772.2	安山岩	2面欠損
	102	14 遺構体	Q-42	I	礎石部	磨製石斧	95	89	58	745.9	安山岩	2面欠損
	103	1 遺構体	S-28	I	礎石部	磨製石斧	103	93	67	892.0	安山岩	2面欠損
	103	2 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	102	94	60	742.1	安山岩	2面欠損
	103	3 遺構体	B-54	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	97	84	36	259.9	安山岩	2面欠損
	103	4 遺構体	S-28	I	礎石部	磨製石斧	110	63	22	337.3	安山岩	2面欠損
	103	5 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	132	71	54	754.9	安山岩	2面欠損
	103	6 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	139	65	66	680.7	安山岩	2面欠損
	103	7 遺構体	S-40	I	礎石部	磨製石斧	108	76	62	587.0	安山岩	2面欠損
	103	8 遺構体	T-36	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	74	28	22	59.0	安山岩	2面欠損
	103	9 遺構体	S-40	I	礎石部	磨製石斧	109	7	3	254.0	安山岩	2面欠損
	103	10 遺構体	Q-27	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	128	87	27	459.5	安山岩	2面欠損、磨蝕痕あり
	104	1 遺構体	Q-44	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	126	62	30	282.1	安山岩	2面欠損
	104	2 遺構体	K-53	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	141	89	37	641.4	安山岩	2面欠損
	104	3 遺構体	Q-48	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	85	59	37	274.6	安山岩	2面欠損
	104	4 遺構体	Q-30	I	礎石部	磨製石斧	128	83	47	653.3	安山岩	2面欠損
	104	5 遺構体	S-34	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	152	90	60	1,187.8	安山岩	2面欠損
	104	6 遺構体	T-26	Ⅲ	礎石部	磨製石斧	167	94	68	1,905.1	安山岩	2面欠損

古野(2)遺跡

図面 番号	建物 番号	遺構名	出土位置	層位	種類	設備	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
104	7	遺構名	1-05	I	礎石部	礎石	116	98	42	622.7	安山岩	2面×9
105	1	遺構名	Y-14	II	礎石部	礎石	94	79	36	311.7	安山岩	2面×9
105	2	遺構名	K-02	II	礎石部	礎石	101.0	103	59	822.3	安山岩	2面×9
105	3	遺構名	S-34	II	礎石部	礎石	127	99	46	751.8	安山岩	2面×9
105	4	遺構名	S-33	II	礎石部	礎石	178	79	35	996.0	安山岩	2面×9・焼痕有り
105	5	遺構名	P-49	II	礎石部	礎石	136	38	34	196.2	安山岩	2面×9
105	6	遺構名	P-41	II	礎石部	礎石	97	55	54	423.2	安山岩	全面×9
105	7	遺構名	K-03	II	礎石部	礎石	112	52	25	245.4	花崗閃緑岩	長軸端部に敲打痕
105	8	遺構名	J-53	II	礎石部	礎石	167	55	30	448.9	花崗閃緑岩	長軸端部に敲打痕
105	9	遺構名	P-51	II	礎石部	礎石	134	49	24	208.2	花崗閃緑岩	長軸端部に敲打痕
106	1	遺構名	Q-48	II	礎石部	礎石	80	76	35	347.0	花崗閃緑岩	側面に敲打痕
106	2	遺構名	S-30	I	礎石部	礎石	104	82	63.0	730.5	チャート	長軸端部に敲打痕
106	3	遺構名	S-53	II	礎石部	礎石	126.5	72	53.4	719.9	花崗閃緑岩	長軸両端部に敲打痕
106	4	遺構名	Q-31	II	礎石部	礎石	107	74	27	292.6	安山岩	2面×9・面
106	5	遺構名	K-04	II	礎石部	礎石	(76)	78	32	293.8	安山岩	2面×9・面
106	6	遺構名	R-28	II	礎石部	礎石	94	72	60	536.9	安山岩	2面×9・面
106	7	遺構名	Q-53	II	礎石部	礎石	108	98	31	632.2	安山岩	2面×9・面
106	8	遺構名	J-05	I	礎石部	礎石	148	76	53	867.0	安山岩	2面×9・面
106	9	遺構名	K-54	II	礎石部	礎石	83	85	45	974.9	安山岩	2面×9・面・自然の窪(穿孔見小)
107	1	遺構名	Q-48	II	礎石部	礎石	172	104	56	1,396.4	安山岩	2面×9・面
107	2	遺構名	Q-48	II	礎石部	礎石	165	62	50	678.6	安山岩	2面×9・面
107	3	遺構名	P-51	II	礎石部	礎石	123	75	35	441.3	安山岩	2面×9・面
107	4	遺構名	P-51	II	礎石部	礎石	114	52	28	240.4	安山岩	2面×9・面・焼痕有り
107	5	遺構名	S-29	I	礎石部	礎石	162	97	56	996.4	安山岩	2面×9・面・長軸端部に敲打痕
107	6	遺構名	R-28	II	礎石部	礎石	146.5	92	50	712.3	安山岩	2面×9・面・長軸端部に敲打痕
108	1	遺構名	Q-24	II	礎石部	礎石	141	82	5	1,040.5	安山岩	2面×9・面・長軸両端部に敲打痕
108	2	遺構名	S-14	I	礎石部	礎石	164	69	50	875.0	安山岩	7面×9・片面に面・長軸両端部に敲打痕
108	3	遺構名	S-27	I	礎石部	礎石	121	90	29	558.5	花崗閃緑岩	全面×9・長軸端部と側面に互角に敲打痕
108	4	遺構名	P-49	II	礎石部	中円状扁平打製石器	151	58	21	296.3	安山岩	
108	5	遺構名	Q-32	II	礎石部	中円状扁平打製石器	135	83	19	273.2	安山岩	
109	1	遺構名	R-48	II	礎石部	中円状扁平打製石器	159	81	30.9	599.1	安山岩	
109	2	遺構名	S-32	II	礎石部	中円状扁平打製石器	123	78	34	526.6	安山岩	2面×9
109	3	遺構名	P-43	I	礎石部	中円状扁平打製石器	156	88	32	647.6	花崗閃緑岩	裏面に敲打痕
109	4	遺構名	S-34	II	礎石部	中円状扁平打製石器	90	69	36	197.2	安山岩	
109	5	遺構名	J-54	II	礎石部	中円状扁平打製石器	174	109	48	1,115.5	安山岩	
109	6	遺構名	K-54	II	礎石部	块人扁平打製石器	162	75	31	583.4	花崗閃緑岩	
109	7	遺構名	S-30	I	礎石部	块人扁平打製石器	158	86	52	583.1	安山岩	
109	8	遺構名	Q-30	I	礎石部	块人扁平打製石器	147	73	26	312.7	安山岩	
109	9	遺構名	S-30	I	礎石部	块人扁平打製石器	165	82	36	597.5	安山岩	
110	4	遺構名	Q-48	II	礎石部	块人扁平打製石器	157	86	31	653.1	花崗閃緑岩	
110	5	遺構名	Q-48	II	礎石部	块人扁平打製石器	199	77	41	539.4	花崗閃緑岩	
110	6	遺構名	S-30	I	礎石部	块人扁平打製石器	151	82	41	730.4	花崗閃緑岩	
111	1	遺構名	Q-48	II	礎石部	块人扁平打製石器	117	76	26	291.7	花崗閃緑岩	
111	2	遺構名	L-53	I	礎石部	块人扁平打製石器	126	76	32	522.7	安山岩	
111	3	遺構名		I	礎石部	块人扁平打製石器	165	104	50	1,194.2	安山岩	2面×9
111	4	遺構名	1-50	II	礎石部	块人扁平打製石器	142	67	21	265.5	花崗閃緑岩	
111	5	遺構名	L-51	II	礎石部	台石	211	150	54	2,292.8	安山岩	
111	6	遺構名	P-51	II	礎石部	台石	127	144	55	1,247.3	安山岩	
111	7	遺構名	R-55	II	礎石部	台石	131	154	43	1,337.8	安山岩	
112	1	遺構名	R-28	II	礎石部	台石	166	222	56	2,707.2	安山岩	
112	2	遺構名	R-56	II	礎石部	台石	249	229	74	5,830.0	安山岩	
112	3	遺構名	Q-35	II	礎石部	台石	414	156	107	10,940.9	安山岩	
112	4	遺構名	R-55	II	礎石部	台石	198	236	78	4,795.7	安山岩	
112	5	遺構名	S-15	II	礎石部	台石	300	420	110	18,900.0	安山岩	
113	1	遺構名	S-30	I	礎石部	台石	236	191	92	2,945.8	安山岩	
113	2	遺構名	S-42	I	礎石部	台石	(178)	292	67	4,609.3	安山岩	
113	3	遺構名	K-53	I	礎石部	台石	190	291	89	1,318.4	安山岩	焼痕有り
113	4	遺構名	Q-55	II	礎石部	台石	125	153	28	790.3	花崗閃緑岩	
113	5	遺構名	S-30	I	礎石部	台石	181	243	80	3,508.8	安山岩	
113	6	遺構名	S-31	II	礎石部	礎石	65.5	57.5	29.5	24.6	礎石	

表12 土製品観察表

図	No	遺構名 (F+)	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	備考	胎土	時期			
写真	1	S101	摩羅土	2.9	2.3	2.2	14.0	不明土製品				土偶の一部か					
写真	2	S104	摩羅土	2.1	2.4	1.6	7.0	成焼粘土				粗面瓦板					
写真	3	S107	摩羅土	2.2	3.0	2.0	6.9	成焼粘土				粗面瓦板					
写真	4	S107	摩羅土	2.9	3.1	2.2	13.6	成焼粘土				表面凸部					
写真	5	S109a	摩羅土	1.4	2.3	1.2	2.9	成焼粘土				粗面瓦板					
写真	6	S109b	摩羅土	1.6	2.1	1.0	2.8	成焼粘土				粗面瓦板、つまみ					
写真	6	S109b	摩羅土	1.2	1.3	0.8	0.9	成焼粘土									
51	13	SK06	I	5.9	5.1	1.1	36.7	土器片利用 土製品(円形)	底部分利用	平底部		内面ミガキ	側面磨り加工				
56	1	SK21	摩羅土	5.2	4.9	1.0	23.2	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	縄文あり(摩羅に より厚体不明)		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維少 円筒下層d			
56	2	SK21	摩羅土	3.8	4.2	1.1	19.1	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	L多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
56	3	SK21	摩羅土	4.5	4.0	1.0	13.9	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	摩羅		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
60	4	S107	摩羅土	4.7	3.8	1.0	21.4	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	1.7多筋(摩羅)		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
60	9	S108	I	4.1	5.1	1.4	24.0	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	ミガキ		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
114	1	遺構外 Q-47	Ⅲ	10.7	7.0	4.2	176.3	土偶	頸・頭	目の周りに沈線文(右 眼は十字溝しか、口 の所に横走沈線、頸部 に横走沈線、表面質用 に2重縦線、乳房の間に 線弧状沈線、弧状沈 線から屈沈線、L斜行 一横沈線一弧沈線		頸・頸部に 穿孔し頸部から頸部 にかけて3本、頸部乳 房横と上方に斜めに 入る。上方からの動 きか(粘土粒の動き き)、工具の繊維織 有、頸部下下に折 り一弧沈線		穿孔し頸部から頸部 にかけて3本、頸部乳 房横と上方に斜めに 入る。上方からの動 きか(粘土粒の動き き)、工具の繊維織 有、頸部下下に折 り一弧沈線	石英含 非発色 炭粉含 物(赤 銅試 か)	複林式	
115	1	遺構外 Q-46	Ⅲ	6.0	4.8	1.2	36.4	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	L多筋		内面ミガキ	側面磨り加工、穿孔 有	繊維石英 円筒下層d			
115	2	遺構外 Q-47	Ⅲ	4.5	5.3	1.0	23.4	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R多筋		内面ミガキ	側面磨り加工、穿孔 有	繊維 円筒下層d			
115	3	遺構外 Q-47	Ⅲ	5.6	7.2	1.0	41.8	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	L厚筋1		内面ミガキ	側面磨り加工、穿孔 途中(外面)	繊維石英 円筒下層d			
115	4	遺構外 O-48	Ⅲ-Ⅳ	5.6	5.0	1.0	25.2	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R厚筋1		内面ミガキ	側面磨り加工、穿孔 途中2か所(外面)	繊維 円筒下層d			
115	5	遺構外 Q-47	Ⅲ	6.9	6.3	0.8	45.6	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R厚筋1A、炭化物少量 付着		内面ミガキ	側面磨り加工、断面 に溝状の加工あり (断面L字形)	繊維 円筒下層d			
115	6	遺構外 L-52	I	6.0	4.8	1.0	29.6	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	7	遺構外 Q-46	Ⅲ	5.0	4.8	0.8	22.5	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	8	遺構外		6.2	5.1	1.1	41.1	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	9	遺構外 Q-48	Ⅲ	4.7	4.7	0.9	20.2	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	L多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	10	遺構外 表採		4.8	4.2	1.1	17.1	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	L多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	11	遺構外 H-55	Ⅲ	4.2	5.6	0.9	24.8	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	縄文あり?(摩羅に より不明)		内面ミガキ	摩羅感強い	繊維少 円筒下層d			
115	12	遺構外 Q-46	Ⅲ	4.2	4.2	0.8	19.6	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R厚筋1		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	13	遺構外 K-55	I	4.7	5.0	0.7	15.8	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	縄文あり?(摩羅に より不明)		内面ミガキ	側面磨り加工、内面 炭化物少	繊維少 円筒下層d			
115	14	遺構外 Q-48	Ⅲ	3.7	3.7	0.7	9.8	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	R多筋		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	15	遺構外 Q-32	I	2.5	2.9	0.9	7.3	土器片利用 土製品(円形)	側面片利用	多筋(摩羅に より厚体不明)		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	16	遺構外 Q-47	Ⅲ	4.0	5.3	1.2	27.2	土器片利用 土製品(円形)	底部分利用	平底部		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
115	17	遺構外 Q-47	Ⅲ	6.3	7.2	1.3	62.4	土器片利用 土製品(円形)	底部分利用	平底部		内面ミガキ	側面磨り加工	繊維 円筒下層d			
116	1	遺構外 L-54	Ⅲ	15.0	8.0	1.0	152.8	土器片加工品	口-頸	波状口縁か、口 縁-LR・RR・R・L山形 律、区画:面縁体LIR 律、頸部LR多筋		内面ミガキ	側面打ち欠き、土器片 利用土製品の裏材片 か	繊維 円筒下層d			
116	2	遺構外 Q-47	Ⅲ	13.3	8.3	1.1	107.3	土器片加工品	口-頸	平縁、口縁-LR平律、L 字羽突利、区画:縁体 LIR律、RR・LR律、頸 部-R厚筋1		内面ミガキ	側面打ち欠き、土器片 利用土製品の裏材片 か	繊維 円筒下層d			
116	3	遺構外 K-52	Ⅲ	6.6	8.0	1.3	72.9	土器片加工品 (磨り)	側面片利用	R厚筋1		内面ミガキ	磨り2小穴、端部 の1か所は磨り途中	繊維 円筒下層d			
116	4	遺構外 表採		7.2	8.6	0.9	47.9	土器片利用 土製品(三角)	側面片利用	曲線弧状文か(3本沈 線)、縦走		内面ミガキ	側面磨り加工	複林			

図	No	遺構名	F'Y'	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	備考	新土	時期
116	5	遺構外	K-50	Ⅲ	6.3	8.2	1.1	50.7	土器片利用 土製品(三角)	銅部片 利用	有難透登文か、真田	内面ミガキ	側面磨り加工		覆鉢
116	6	遺構外	L-46	Ⅲ	5.1	6.1	1.1	33.6	土器片利用 土製品(三角)	銅部片 利用	透登文、L線切痕	内面ミガキ	側面磨り加工		覆鉢
116	7	遺構外	Q-47	Ⅲ	6.3	6.0	0.8	32.6	土器片利用 土製品(三角)	銅部片 利用	透登文か、L線切痕	内面ミガキ			覆鉢
116	8	遺構外	Q-47	Ⅲ	5.2	5.9	0.7	21.3	土器片利用 土製品(三角)	銅部片 利用	方形の区画文か(3本沈 線)、L線切痕	内面ミガキ	側面磨り加工		覆鉢
116	9	遺構外	L-54	Ⅲ	12.4	9.0	1.0	113.6	土器片加工品	口-頸	口唇：沈線、銅部：有 難透登文か、L線切痕	内面ミガキ	側面打ち欠き、土器 片利用土製品(三角 形)の未完成品か		覆鉢
116	10	遺構外		I	1.5	4.9	0.6	5.8	ミニチュア 土器(厚鉢)	銅-底	ナツ	ミガキ			
写真	7	遺構外	H-55	I	1.5	2.0	1.3	3.2	焼成粘土				指頭圧痕		
写真	8	遺構外	I-55	I	3.2	4.1	1.2	9.4	焼成粘土				指頭圧痕		
写真	9	遺構外	J-51	Ⅲ	1.6	2.6	16.0	4.5	焼成粘土				指頭圧痕		
写真	10	遺構外	L-54	Ⅲ	2.9	3.3	2.4	12.4	焼成粘土				指頭圧痕、平皿面		
写真	11	遺構外	M-48	Ⅱ	2.1	2.6	1.3	4.3	焼成粘土				指頭圧痕	繊維少	円筒下層d
写真	12	遺構外	M-48	Ⅱ	3.1	3.9	1.4	13.8	焼成粘土				φ10mmの植物圧痕、 器面剥落跡	繊維少	円筒下層d
写真	13	遺構外	P-46	Ⅲ-IV	2.4	2.8	1.6	8.6	焼成粘土				指頭圧痕		円筒下層d
写真	14	遺構外	-	表探	2.3	2.7	1.3	7.4	焼成粘土				繊維一握残存、平皿 面、工具痕	繊維	円筒下層d
写真	15	遺構外	H-54	Ⅲ	2.8	4.1	2.1	9.1	焼成粘土				指頭圧痕		
写真	16	遺構外	H-54	Ⅲ	1.4	2.3	1.6	3.3	焼成粘土				指頭圧痕、平皿面		
写真	17	遺構外	H-54	Ⅲ	1.5	2.0	0.9	1.7	焼成粘土				指頭圧痕		
写真	18	遺構外	M-48	Ⅱ	1.6	2.9	1.3	4.3	焼成粘土				指頭圧痕、工具痕		
写真	19	遺構外	L-54	Ⅲ	1.7	3.5	2.2	7.6	焼成粘土				平皿面、表面凸凹		
写真	20	遺構外	表探		1.5	2.4	1.3	3.0	焼成粘土				指頭圧痕、おじれ		

表13 石製品観察表

図	遺物 番号	遺構名	F'Y'	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	時期
30	6	S104	T-34	甲種土 土層	棒状籠	131.5	40.0	31.0	266.3	流紋岩	柱状節理	
117	1	遺構外	K-55	I	棒状耳飾	35.5	21.3	3.0	5.0	燧石に 定型的貫 貫石	形態：三角形、断面：扁平形(水ノ江 2019)。平皿面から外 縁部に向かって細くなる。二次穿孔。未穿孔の二次穿孔あり。 切込目と長軸方向の溝状痕があるため類似技法か、縦溝 に類似あり。側面「く」字形。	円筒下層d
117	2	遺構外	M-53	Ⅲ	三角形雲板	51.5	47.0	5.6	16.7	流紋岩	板状節理、二次加工あり	覆鉢式か
117	3	遺構外	M-48	I	不明石製品	57.0	42.0	44.0	92.0	安山岩	自然穿孔、縦行、磨り	
117	4	遺構外	S-30	I	棒状籠	302.0	63.0	52.0	1,553.3	流紋岩	柱状節理	
117	5	遺構外	Q-48	Ⅲ	棒状籠	256.0	72.0	55.0	1,253.3	流紋岩	柱状節理	
117	6	遺構外	Q-35	Ⅲ	棒状籠	238.0	63.0	64.0	994.2	流紋岩	柱状節理	
117	7	遺構外	J-51	I	棒状籠	244.0	72.0	64.0	1,608.4	流紋岩	柱状節理	
117	8	遺構外	T-35	Ⅲ	棒状籠	476.0	69.0	45.0	1,313.0	流紋岩	柱状節理、折痕	
117	9	遺構外	Q-46	Ⅲ	棒状籠	127.0	42.0	34.0	238.7	流紋岩	柱状節理、二次加工あり	
117	10	遺構外	K-57	Ⅲ	棒状籠	134.0	50.0	36.0	292.1	流紋岩	柱状節理、破断により割離	
117	11	遺構外	J-55	Ⅱ	棒状籠	130.0	36.0	33.0	199.9	流紋岩	柱状節理	
117	12	遺構外	Q-47	Ⅲ	棒状籠	176.0	35.0	32.0	280.3	流紋岩	柱状節理、折痕	

表14 古代土器観察表

図番号	遺物番号	遺構名	出土位置	層位	種類	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考(底面調整)	時期
199	1	遺構外	P-51	Ⅲ	土師器	甕	底部	—	—	(4.1)	ケズリ	ナゲ	砂底	
199	2	遺構外	N-27	Ⅲ	灰倉器	甕	胴部	—	—	(2.1)	ロクロ・刻書?	ロクロ		五所川原?
199	3	遺構外	J-55	I	灰倉器	甕	胴部	—	—	(3.5)	ロクロ	ロクロ		五所川原?
199	4	遺構外	R-36	I	灰倉器	甕	胴部	—	—	(3.5)	タタキ	ナゲ		五所川原?

表15 近世・近代陶磁器観察表

図番号	遺物番号	遺構名	出土位置	層位	種類	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考(底面調整)	時期	
120	1	遺構外	Q-24	Ⅲ	陶器	碗	口縁部	—	—	(1.3)	ロクロ・旋輪(脚縁輪)	ロクロ・旋輪(灰オリーブ輪)		脚縁輪・肥前IV期	
120	2	遺構外	S-42	I	陶器	鉢	胴部	—	—	(1.6)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)・無釉	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)・磨目文・捺目文		三島平・肥前IV期	
120	3	遺構外	M-48	I	陶器	碗	底部	—	(4.3)	(2.4)	ロクロ・旋輪(明オリーブ灰輪)	ロクロ・旋輪(明緑文)	高台内磨削・付高台か?	青磁・肥前Ⅴ期	
120	4	遺構外	O-44	I	陶器	袋物	胴部	—	—	(3.8)	ロクロ・旋輪(灰白輪)	ロクロ・無釉		青磁・肥前IV期	
120	5	遺構外	S-42	I	陶器	徳利	胴部/底部	—	7.4	(10.4/6.1)	ロクロ・旋輪(灰白輪)	ロクロ・旋輪(陶輪)	ロクロ・旋輪(陶輪)・磨目文・捺目文	近代(明治)	
120	6	遺構外	Q-24	Ⅲ	陶器	甕	胴部	—	—	(8.4)	ロクロ・旋輪(足底輪)	ロクロ・旋輪(陶輪)			
120	7	遺構外	P-39	I	陶器	甕	胴部	—	—	(5.8)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)		肥前IV期	
120	8	遺構外	O-38	Ⅲ	陶器	鉢鉢	口縁部	—	—	(4.8)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)			
120	9	遺構外	T-38	I	陶器	鉢鉢	胴部	—	—	(4.3)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)・捺目		瀬戸	
120	10	遺構外			表瓦	陶器	鉢鉢	胴部	—	(3.8)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)	捺目			
120	11	遺構外	M-47	Ⅱ	陶器	鉢鉢	胴部	—	—	(1.9)	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)・捺目	ロクロ・旋輪(にぶい陶輪)・捺目			
120	12	遺構外	Q-29	I	陶器	鉢鉢	胴部	—	—	(2.7)	ロクロ・無旋輪	無旋輪・捺目		明治?	
120	13	遺構外	L-51	Ⅱ	陶器	鉢鉢	底部	—	(10.0)	(2.9)	ロクロ・無旋輪	捺目	回転糸切	肥前Ⅴ期	
120	14	遺構外	H-52	I	磁器	碗	口縁部	—	—	(2.9)	脚縁・花弁?	花弁?		肥前IV期	
120	15	遺構外	R-27	I	磁器	碗	口縁部	—	—	(2.7)	脚縁	捺目		肥前Ⅴ期	
120	16	遺構外	M-46	Ⅱ	磁器	碗	口縁部	—	—	(2.5)	花	捺目		肥前IV期	
120	17	遺構外	O-44・P-45	Ⅲ・I	磁器	碗	口縁～底	(9.6)	(3.8)	4.9	脚縁・花弁?	脚縁		肥前Ⅴ期～明治	
120	18	遺構外	Q-23	Ⅲ	磁器	碗	口縁～底	(10.2)	—	(5.2)	脚縁・花弁	脚縁・書文		肥前Ⅴ期	
120	19	遺構外	L-53	I	磁器	碗	口縁～底	(10.4)	—	(5.1)	脚縁・花弁	脚縁・捺		肥前Ⅴ期	
120	20	遺構外	R-24	I	磁器	碗	口縁～底	—	—	(5.3)	花弁	捺目		肥前IV期	
120	21	遺構外	N-46	I	磁器	碗	胴部	—	—	(4.0)	捺木?(コンニャク印)			肥前IV期	
120	22	遺構外	T-36	I	磁器	碗	胴部	—	—	(2.8)	菊			肥前Ⅴ～Ⅶ期	
120	23	遺構外	S-32	I	磁器	碗	底部	—	(4.0)	(2.7)	脚縁・網目文			肥前IV期	
120	24	遺構外	S-41	I	磁器	碗	胴部～底	—	—	(2.9)				肥前IV期	
120	25	遺構外	S-41	I	磁器	小杯	胴部	—	—	(2.6)	脚縁・捺?・花弁?			肥前Ⅴ期	
120	26	遺構外	T-36	I	磁器	盃	口縁部	(9.6)	—	(1.3)	脚縁・草?			肥前Ⅴ期	
120	27	遺構外	S-36	I	磁器	皿	口縁部	—	—	(3.1)	脚縁・捺?(家?)・口	脚縁		肥前Ⅴ期	
120	28	遺構外	I-55	I	磁器	皿	底部	—	(7.4)	(1.9)	脚縁	脚縁・花?		肥前IV期	
120	29	遺構外	S-42	I	磁器	皿	底部	—	—	(1.6)		脚縁・不明	靴の目跡高台		肥前Ⅴ期
120	30	遺構外	S-32	I	磁器	碗	底部	—	(2.7)	(1.3)	脚縁・花弁?	円錐・花弁?	後高台	肥前Ⅴ期～明治	
120	31	遺構外	S-33	I	磁器	皿	底部	—	—	(0.4)	五弁花			肥前IV期	
120	32	遺構外	R-39	I	磁器	袋物	胴部	—	—	(2.6)		無釉・ロクロ	コンブス風?		肥前Ⅴ期
120	33	遺構外	K-47	I	磁器	徳利	胴下半	—	(6.0)	(15.5)	草木	無釉・ロクロ		肥前Ⅴ期～明治	

表16 近世ガラス観察表

図番号	遺物番号	遺構名	出土位置	層位	種類	器種	外径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	外面調整	時期
120	34	遺構外	R-36	I	ガラス玉	丸玉	8.1	7.1	2.2	0.6	淡黄色(不透明)・巻きかけ技法	近世か?

表17 近世銭貨観察表

図番号	遺物番号	遺構名	出土位置	層位	種類	銭種	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内縁内径 (mm)	外縁厚 (mm)	文字面厚 (mm)	重量 (g)	外面調整(文様)	時期	
120	35	遺構外	Q-29	I	銅貨	寛永通寶	—	—	(8.07)	(6.52)	(0.97)	(0.56)	(0.7)	寛永通寶1期(古寛永)	寛永13年(1636)初鋳

表18 近世金属製品観察表

図番号	遺物番号	遺構名	出土位置	層位	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	時期
120	36	遺構外	Q-39	I	銅製品	煙管(煙管)	(5.2)	2.2	—	(11.6)	ラウ遺存。第5段階(18世紀後半)。銅製?火皿に金色物質を被せた?	
120	37	遺構外	O-48	Ⅱ	銅製品	簪	13.3	1.1	0.2	11.4	松葉巻。銅製?	



津軽海峡方面から古野(2)遺跡を望む(北→)



台地縁辺平坦地に竪穴建物跡・斜面落ち際に土坑群・急斜面に捨て場を形成(南→)

写真1 遺跡の立地・地形と縄文時代前・中期の遺構群



古野(2)遺跡 調査区南側 空撮 (写真上方が北)

写真2 遺跡南側 調査区



第8号(左)・9号(中央)・4号(右)竪穴建物跡 完掘 (南→)



基本層序1 A-Bライン (南東→)



基本層序2 C-Dライン (北→)



基本層序3 E-Fライン (南西→)

写真3 竪穴建物跡調査状況・基本層序



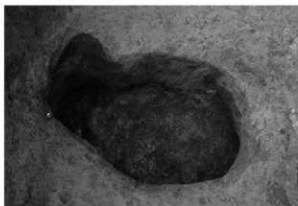
第1号竖穴建物跡 A-A' 断面 (南西→)



第1号竖穴建物跡 B-B' 断面 (南東→)



第1号竖穴建物跡内土坑1 断面 (南東→)

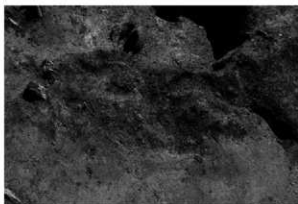


第1号竖穴建物跡内土坑1 完掘 (南東→)

写真4 第1号竖穴建物跡 (1)



第1号竪穴建物跡内土坑1 土器出土 (北東から)



第1号竪穴建物跡 炉1 (SF1) 完掘 (西から)



第1号竪穴建物跡柱穴3 完掘 (南西→)



第1号竪穴建物跡柱穴5 完掘 (西→)



第1号竪穴建物跡 完掘 (南東→)

写真5 第1号竪穴建物跡(2)



第2号竖穴建物跡 A-A' 断面 (南東→)



第2号竖穴建物跡 B-B' 断面 (西→)



第2号竖穴建物跡 炉 検出 (南西→)

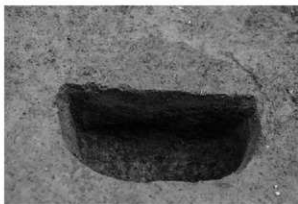


第2号竖穴建物跡 遺物(18-1)出土 (東→)

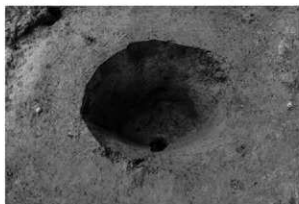
写真6 第2号竖穴建物跡(1)



第2号竖穴建物跡柱穴1 断面(南西から)



第2号竖穴建物跡柱穴2 断面(東から)



第2号竖穴建物跡柱穴1 完掘(北から)



第2号竖穴建物跡柱穴2 完掘(北から)



第2号竖穴建物跡 完掘(南東から→)

写真7 第2号竖穴建物跡(2)



第3号竖穴建物跡 完掘 (北→)

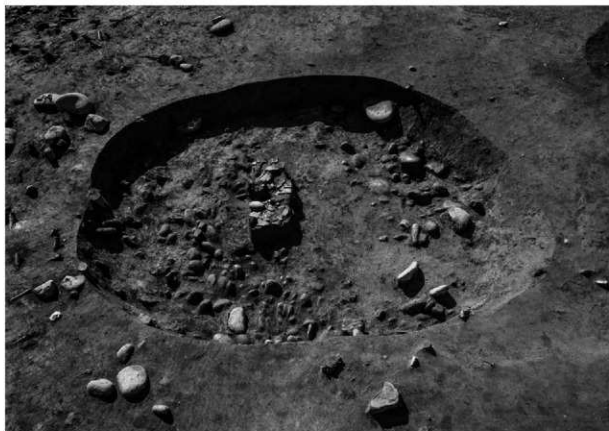


第3号竖穴建物跡 B-B'断面 (西→)



第3号竖穴建物跡 A-A'断面 (南→)

写真8 第3号竖穴建物跡(1)



第3号竖穴建物跡 遺物出土状況 (北→)



第3号竖穴建物跡 3層出土遺物(21-1) (北東→)



第3号竖穴建物跡 3層出土遺物(21-1) (西→)



第3号竖穴建物跡 炉跡 断面 (北→)



第3号竖穴建物跡 炉跡 完掘 (北→)

写真9 第3号竖穴建物跡(2)



第4号竖穴建物跡 A-A' 断面・石围炉検出状況 (西→)



第4号竖穴建物跡 B-B' 断面・石围炉検出状況 (北→)



第4号竖穴建物跡 遺物出土状況(26-201ほか) (北→)



第4号竖穴建物跡 炭化物出土状況 (西→)

写真10 第4号竖穴建物跡(1)



第4号竖穴建物跡 石囲炉断面 (北西→)



第4号竖穴建物跡 石囲炉火床面 (北西→)



第4号竖穴建物跡 石囲炉完掘 (南西→)



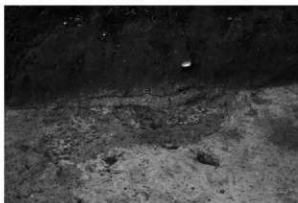
第4号竖穴建物跡 石囲炉・旧炉跡 (南西→)



第4号竖穴建物跡 炉石除去 (南西→)



第4号竖穴建物跡 炉石除去 (北西→)



第4号竖穴建物跡 口一ム被覆部 (西→)

写真11 第4号竖穴建物跡(2)



第4号竖穴建物跡 柱穴1断面(南東→)



第4号竖穴建物跡 柱穴2断面(南東→)



第4号竖穴建物跡 柱穴4断面(南東→)



第4号竖穴建物跡 柱穴5断面(南東→)



第4号竖穴建物跡 完掘(南西→)

写真12 第4号竖穴建物跡(3)



第5号竖穴建物跡 A-A' 断面 (南東→)



第5号竖穴建物跡 B-B' 断面 (北東→)

写真13 第5号竖穴建物跡(1)



第5号竖穴建物跡 石囲炉焼土検出 (北西→)



第5号竖穴建物跡 石囲炉焼土断面 (北西→)



第5号竖穴建物跡 柱穴2 断面 (北西→)



第5号竖穴建物跡 柱穴3 断面 (南東→)



第5号竖穴建物跡 柱穴4 断面 (西→)

写真14 第5号竖穴建物跡(2)



第5号竖穴建物跡 完掘 (南西→)



第5号竖穴建物跡 同志社中学校生徒 見学状況 (南西→)

写真15 第5号竖穴建物跡(3)



第6号竖穴建物跡 断面・完掘（西→）



第7号竖穴建物跡 A-A' 断面（北→）



第7号竖穴建物跡 B-B' 断面（東→）

写真16 第6号竖穴建物跡・第7号竖穴建物跡(1)



第7号竖穴建物跡 床面検出(東→)



第7号竖穴建物跡 地床枠検出(東→)



第7号竖穴建物跡 遺物出土状況(北西→)



第7号竖穴建物跡 遺物出土状況(西→)



第7号竖穴建物跡 完掘(東→)

写真17 第7号竖穴建物跡(2)



第8号竖穴建物跡 D-D' 断面 (東→)



第8号竖穴建物跡 柱穴1 断面 (東→)



第8号竖穴建物跡 柱穴1 完掘 (北→)



第8号竖穴建物跡 完掘 (東→)

写真18 第8号竖穴建物跡



第9号竖穴建物跡 C-C' 断面 (東→)



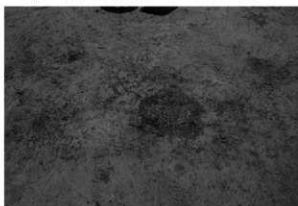
第9号竖穴建物跡 炉1 (SF1) 断面 (西→)



第9号竖穴建物跡 炉1 (SF1) 完掘 (南→)



第9号竖穴建物跡 炉1 (SF1) 焼土面断面 (南→)



第9号竖穴建物跡 炉2 (SF2) 完掘 (南→)

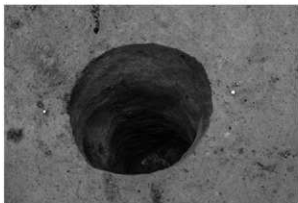
写真19 第9号竖穴建物跡(1)



第9号竖穴建物跡 礫石器出土(南→)



第9号竖穴建物跡 柱穴1 完掘(南→)



第9号竖穴建物跡 柱穴2 完掘(北→)



第9号竖穴建物跡 柱穴4 完掘(南→)

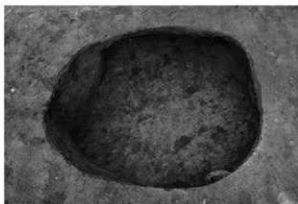


第9号竖穴建物跡 完掘(東→)

写真20 第9号竖穴建物跡(2)



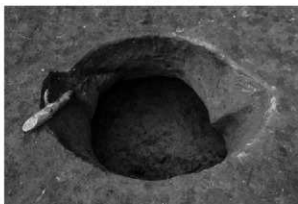
第1号土坑 断面 (東→)



第1号土坑 完掘 (東→)



第2号土坑 完掘 断面 (南東→)



第2号土坑 完掘 (南東→)



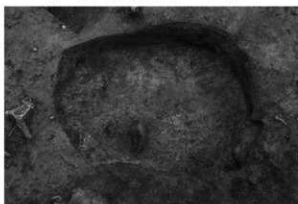
第3号土坑 遺物出土(左:49-10・右:49-11)(西→)



第3号土坑 遺物出土(49-10)(東→)



第3号土坑 断面 (南→)



第3号土坑 完掘 (南東→)

写真21 第1・2・3号土坑



第4号土坑 断面 (北東→)



第4号土坑 完掘 (北東→)



第5号土坑 断面 (南西→)



第5号土坑 完掘 (西→)



第5号土坑 遺物出土状況(左:50-2・右:50-1) (西→)

写真22 第4・5号土坑



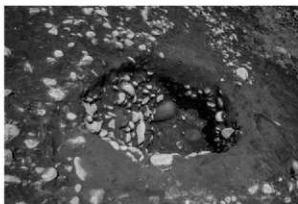
第6号土坑 断面 (南西→)



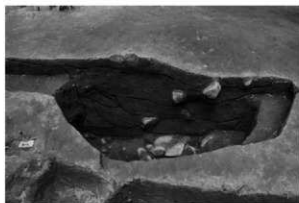
第6土坑 完掘 (南西→)



第7号土坑 断面 (南西→)



第7土坑 完掘 (南西→)



第8号土坑 断面 (南西→)



第8土坑 完掘 (南西→)



第10号土坑 断面 (南西→)



第10土坑 完掘 (南西→)

写真23 第6・7・8・10号土坑



第11号土坑 断面 (東→)



第11号土坑 完掘 (東→)



第12号土坑 断面 (北東→)



第12号土坑 完掘 (北東→)



第13号土坑 断面 (北西→)



第13号土坑 完掘 (北西→)



第14号土坑 断面 (東→)



第14号土坑 遺物出土(54・4・5) (東→)

写真24 第11・12・13・14号土坑



第15号土坑 断面 (北東→)



第15号土坑 完掘 (北東→)



第16号土坑 断面 (南西→)



第16号土坑 完掘 (南西→)



第17号土坑 断面 (東→)



第17号土坑 完掘 (東→)



第18号土坑 断面 (南西→)



第18号土坑 完掘 (南西→)

写真25 第15・16・17・18号土坑



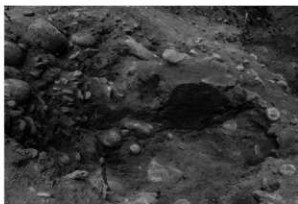
第18号土坑 完掘 (南東→)



第18号土坑 遺物出土(55-13) (南東→)



第18号土坑 遺物出土(55-13) (北東→)



第19号土坑 断面 (南西→)



第19号土坑 完掘 (南西→)



第20号土坑 断面・完掘 (西→)



第21号土坑 断面 (南西→)

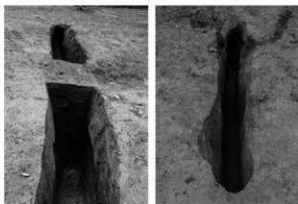


第21号土坑 完掘 (南西→)

写真26 第18・19・20・21号土坑



第1号溝状土坑 断面・完掘(南東→)



第2号溝状土坑 断面(左)・完掘(右)(西→)



第3号溝状土坑 断面(北東→)



第4号溝状土坑 断面(北東→)



溝状土坑群

写真27 第1・2・3・4号溝状土坑



第5号溝状土坑
断面(東→)



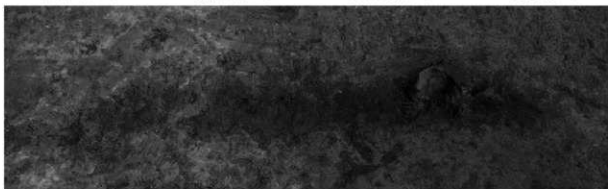
第6号溝状土坑
完掘(北西→)



第7号溝状土坑
断面(南東→)



第8号溝状土坑
完掘(東→)



第8号溝状土坑 検出面遺物(図60-5)出土状況(北→)



第10号溝状土坑(左)・第9号溝状土坑(右) 完掘(東→)

写真28 第5・6・7・8・9・10号溝状土坑



第10号溝状土坑
断面(東→)



第11号溝状土坑
断面(南東→)



第12号溝状土坑・第12号土坑(左上) 完掘(北→)



第13号溝状土坑 完掘(北西→)



第13号溝状土坑 断面(北西→)



第14号溝状土坑 断面(南→)



第15号溝状土坑 断面・完掘(南東→)

写真29 第10・11・12・13・14・15号溝状土坑



R-30 遺物集中ブロック 作業状況 (西→)



R-30 遺物 (62-8) 出土状況 (南→)



R-30 遺物集中ブロック 作業状況 (南→)



R-30 遺物集中ブロック 作業状況 (南→)



R-30 遺物集中ブロック 検出状況 (南→)

写真30 R-30遺物集中ブロック



N-47 遺物(89-5)出土状況(東→)



S-39 遺物(89-11)出土状況(東→)



Q-43周辺 斜面落ち際の調査状況(北東→)



斜面調査状況(南西→)



Q-47周辺 捨て場の調査状況(北東→)



調査区南端付近斜面 調査状況(南西→)



K-57周辺 斜面調査状況(西→)

写真31 遺構外・斜面調査状況



第2号(左)・第1号(右)焼土遺構 断面 (南東→)



第1号焼土遺構 完掘 (南東→)



溝状土坑 調査状況 (南→)



第4号壑穴建物跡 調査状況 (南→)



風間浦中学校生徒 見学状況 (北東→)



風間浦村長 視察状況 (南→)



現地見学会 開催状況 (北→)



地形・地質 現地鑑定状況 (北西→)

写真32 焼土遺構・調査風景ほか

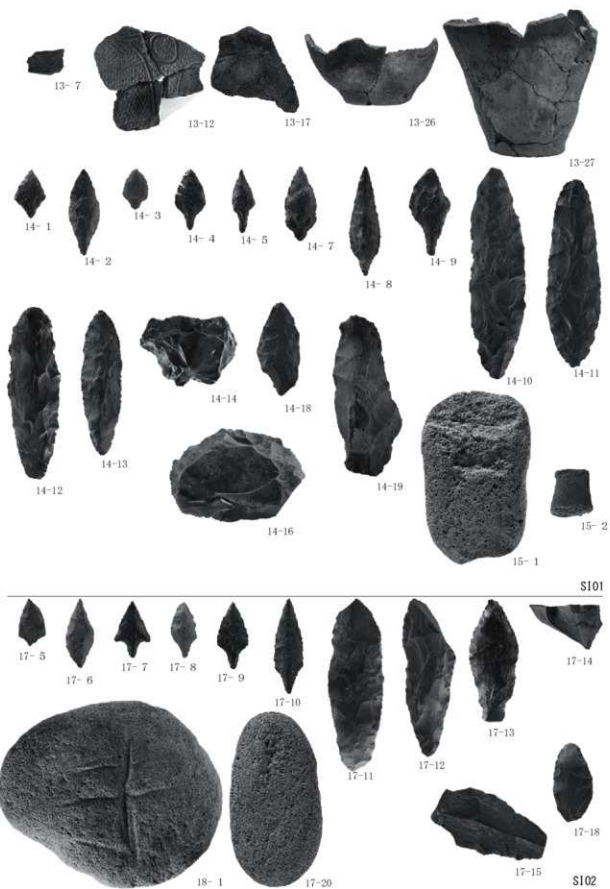


写真33 遺構内出土遺物(縄文時代・1)

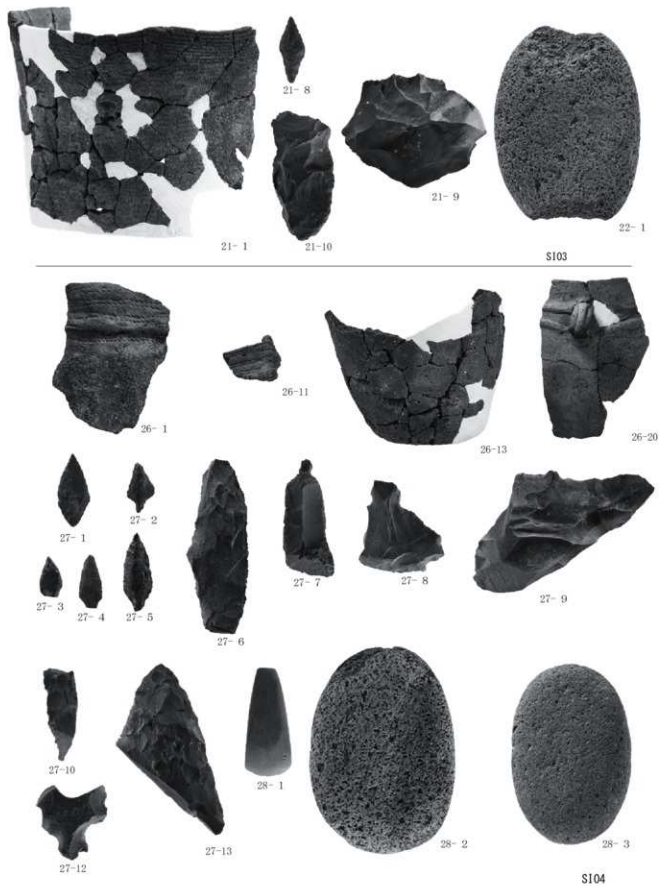


写真34 遺構内出土遺物(縄文時代・2)

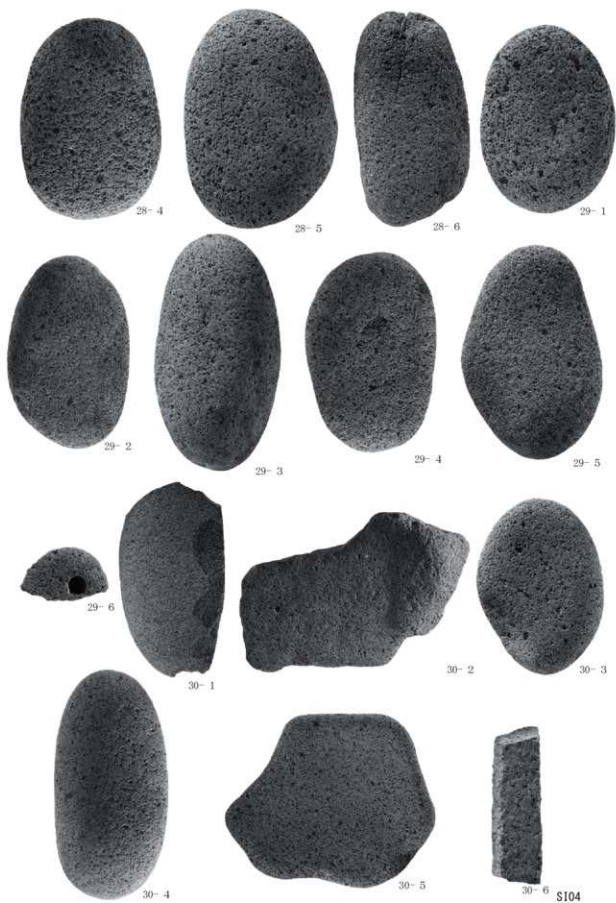


写真35 遺構内出土遺物(縄文時代・3)

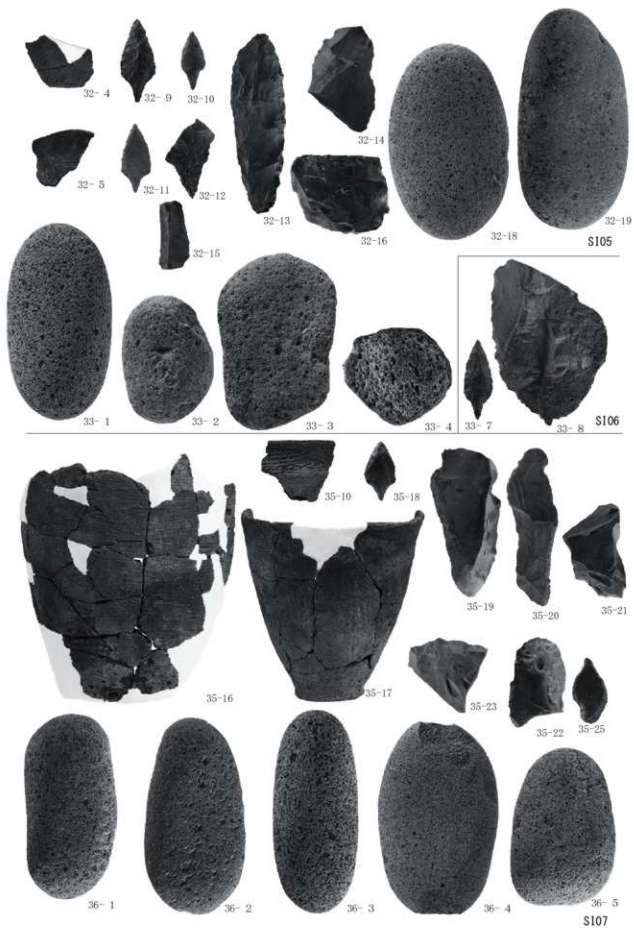


写真36 遺構内出土遺物(縄文時代・4)

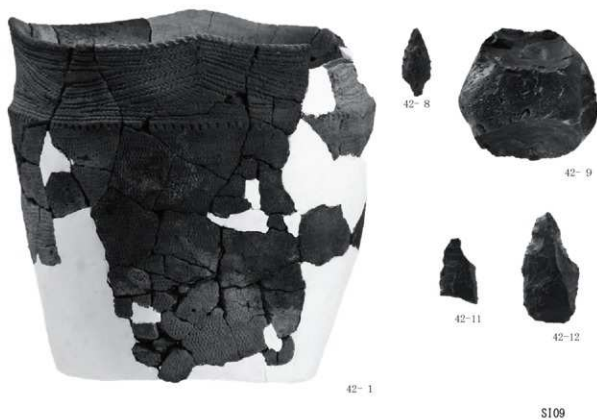
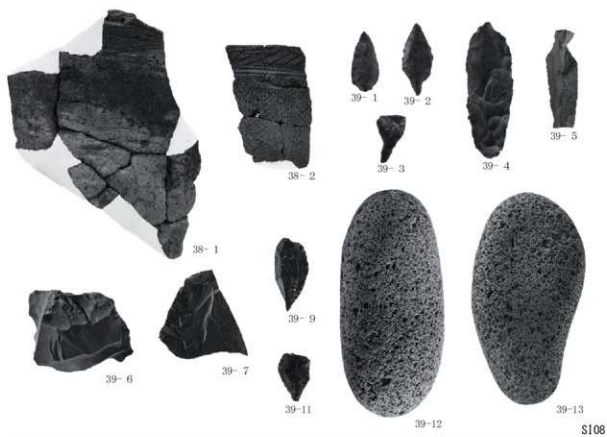


写真37 遺構内出土遺物(縄文時代・5)

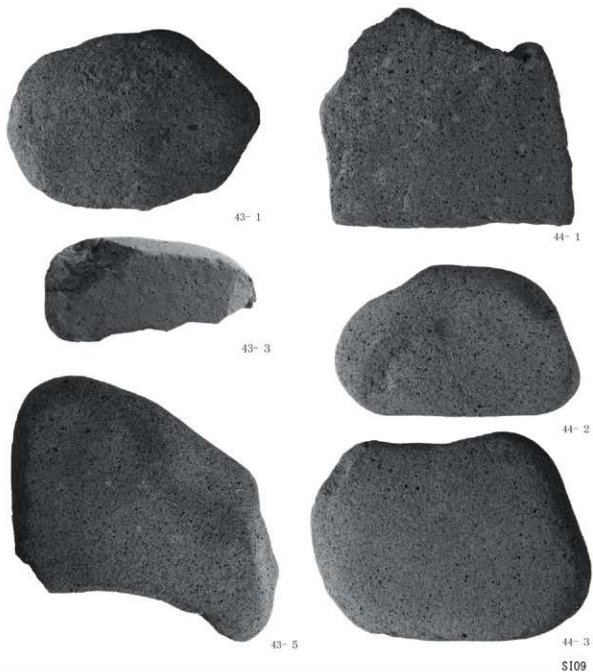


写真38 遺構内出土遺物(縄文時代・6)

SK02

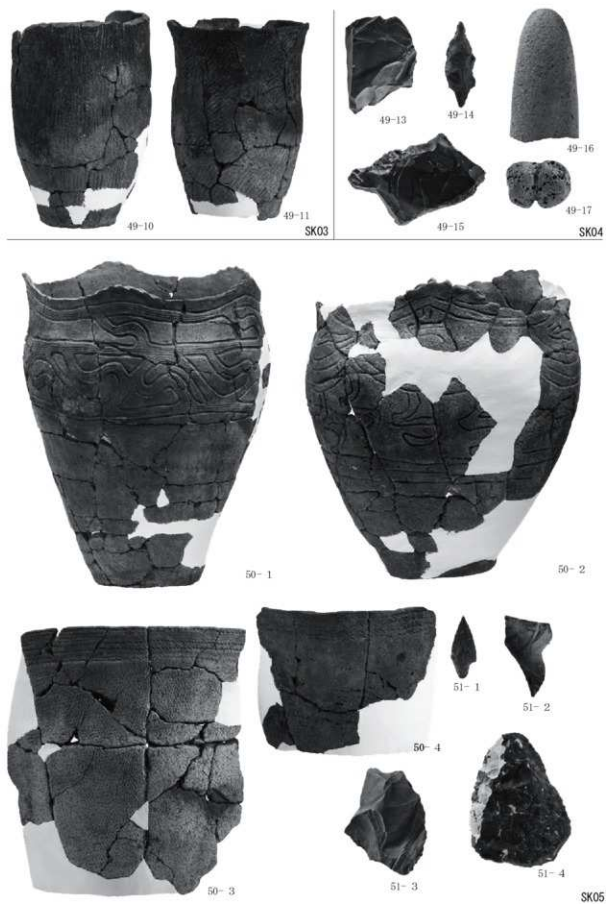


写真39 遺構内出土遺物(縄文時代・7)

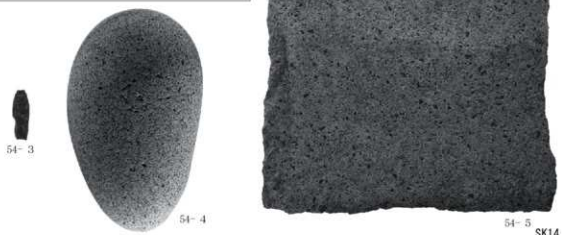


写真40 遺構内出土遺物(縄文時代・8)

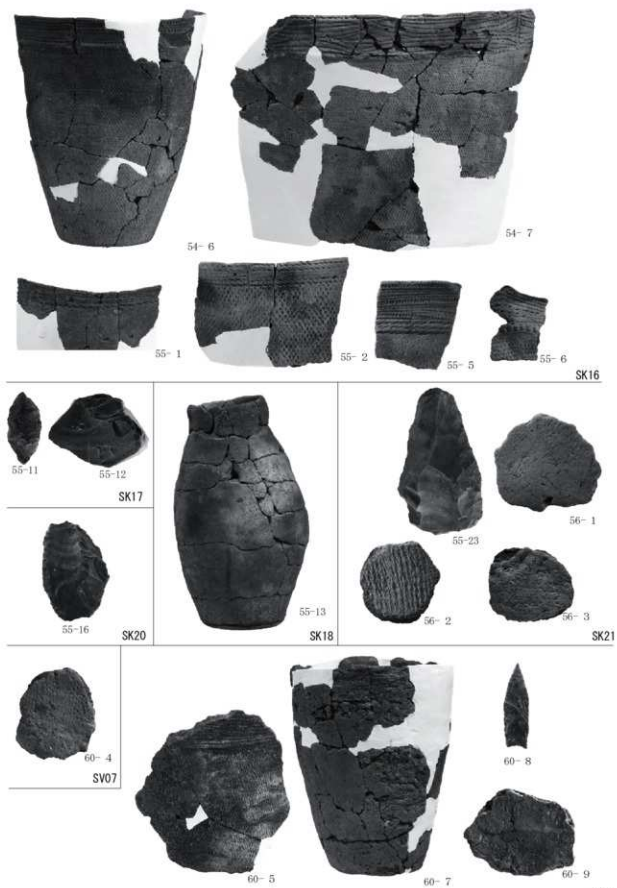


写真41 遺構内出土遺物(縄文時代・9)

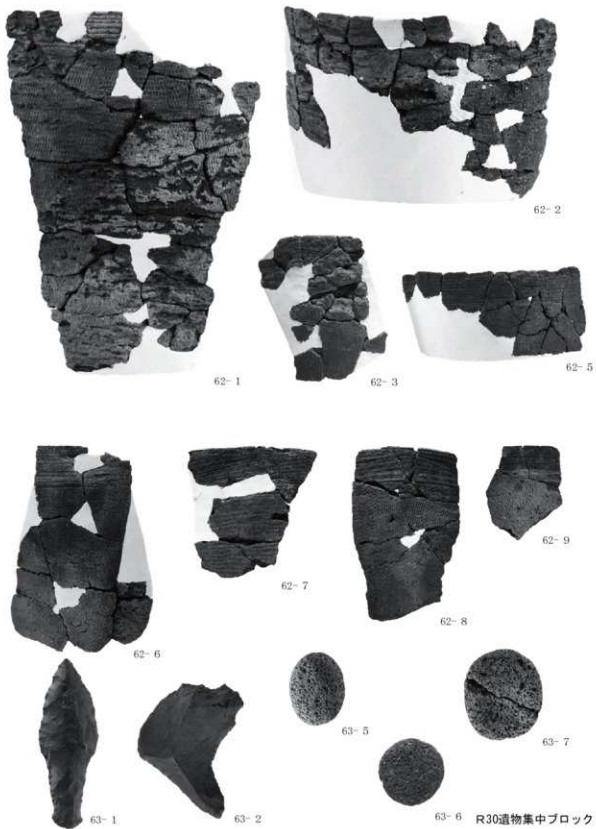


写真42 遺構内出土遺物(縄文時代・10)

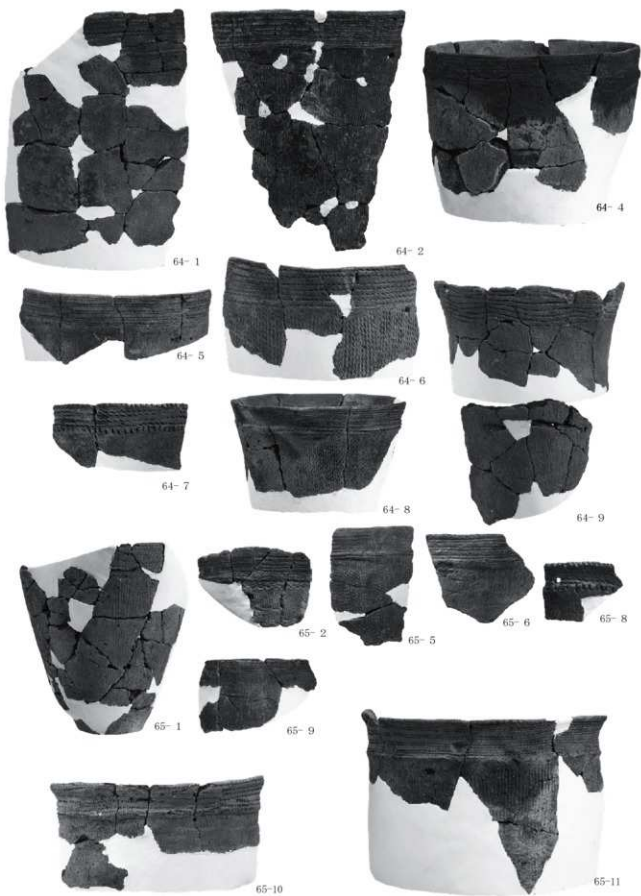


写真43 遺構外出土遺物(縄文時代・1)

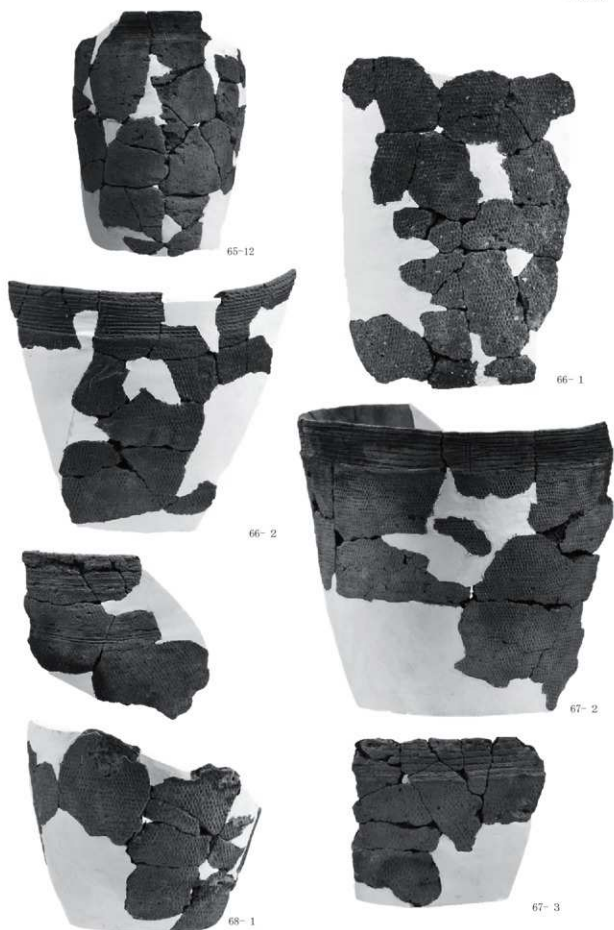


写真44 遺構外出土遺物（縄文時代・2）



68-2



68-3



69-1



69-2



69-3



69-4

写真45 遺構外出土遺物(縄文時代・3)

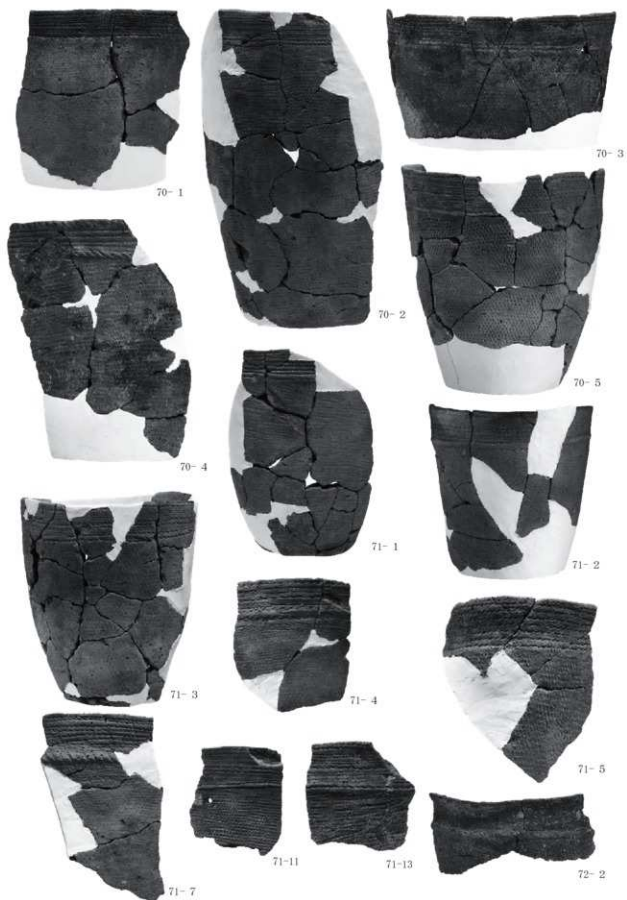


写真46 遺構外出土遺物（縄文時代・4）

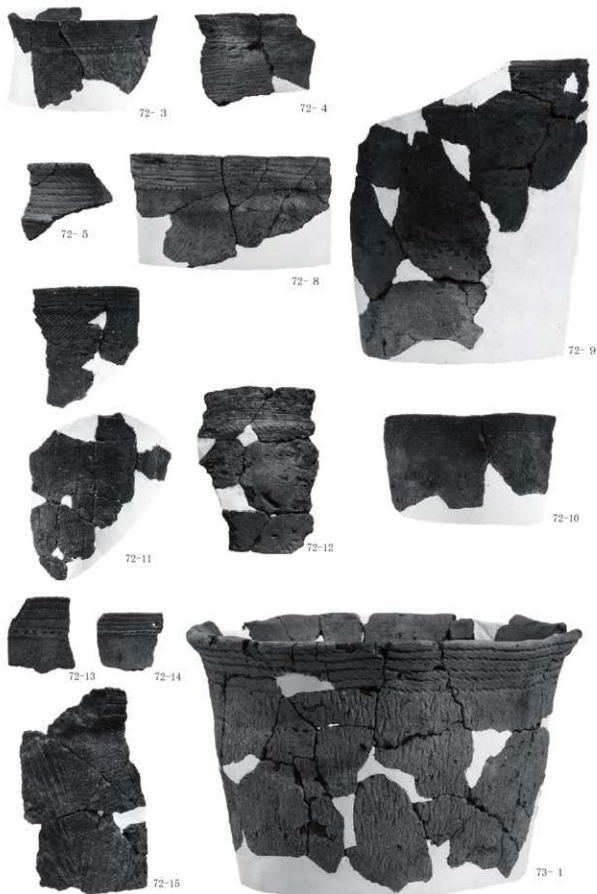


写真47 遺構外出土遺物(縄文時代・5)



写真48 遺構外出土遺物（縄文時代・6）



写真49 遺構外出土遺物(縄文時代・7)



76-2



76-3



76-5



77-1



77-2



77-3



77-5



77-7



77-8



77-12



77-11



77-13



77-14



78-6



78-8



78-7

写真50 遺構外出土遺物（縄文時代・8）

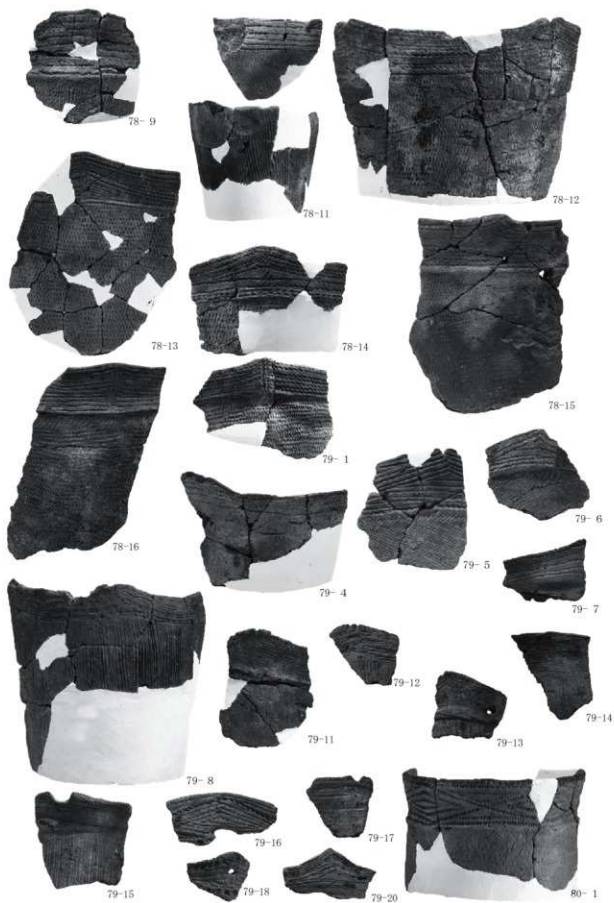


写真51 遺構外出土遺物(縄文時代・9)

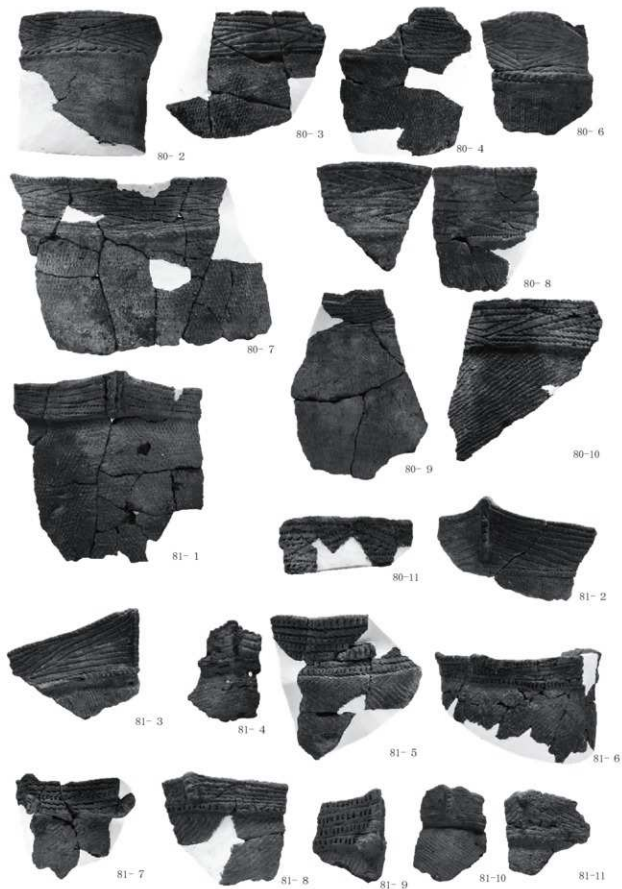


写真52 遺構外出土遺物（縄文時代・10）

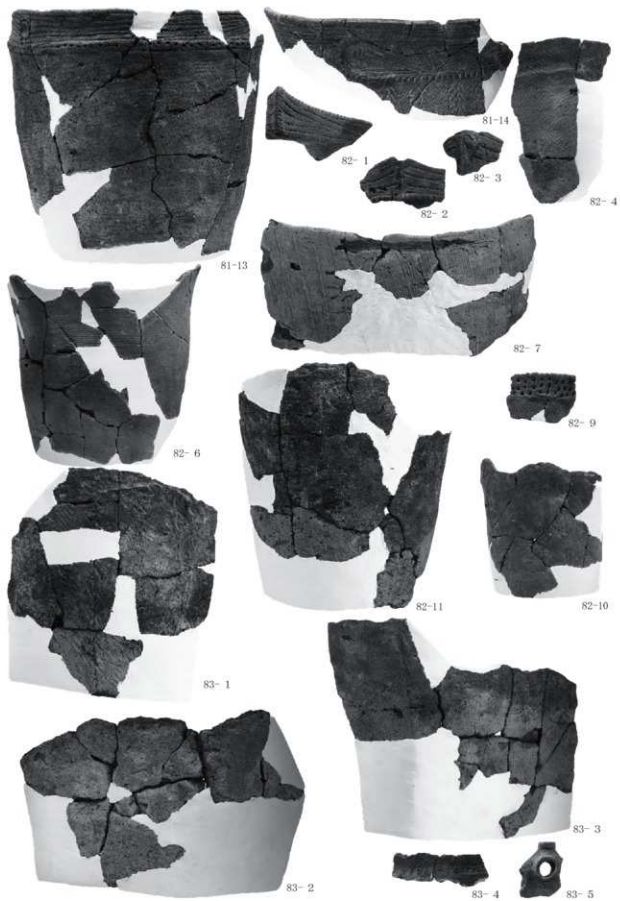


写真53 遺構外出土遺物(縄文時代・11)

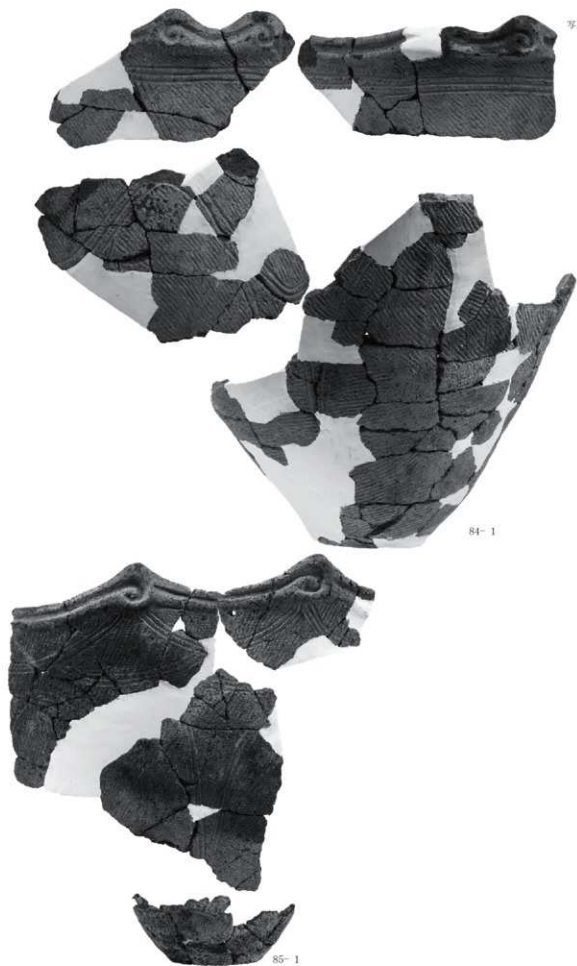


写真54 遺構外出土遺物（縄文時代・12）

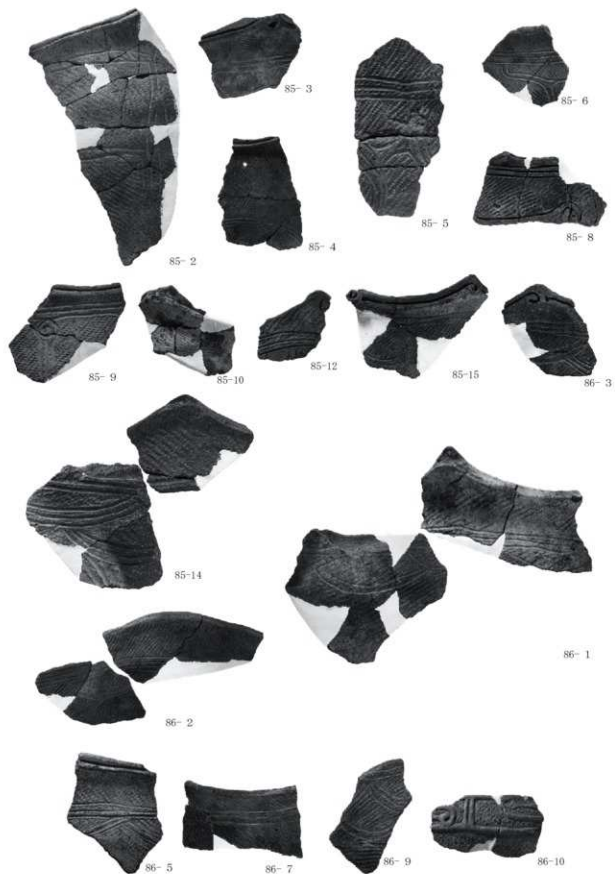


写真55 遺構外出土遺物(縄文時代・13)

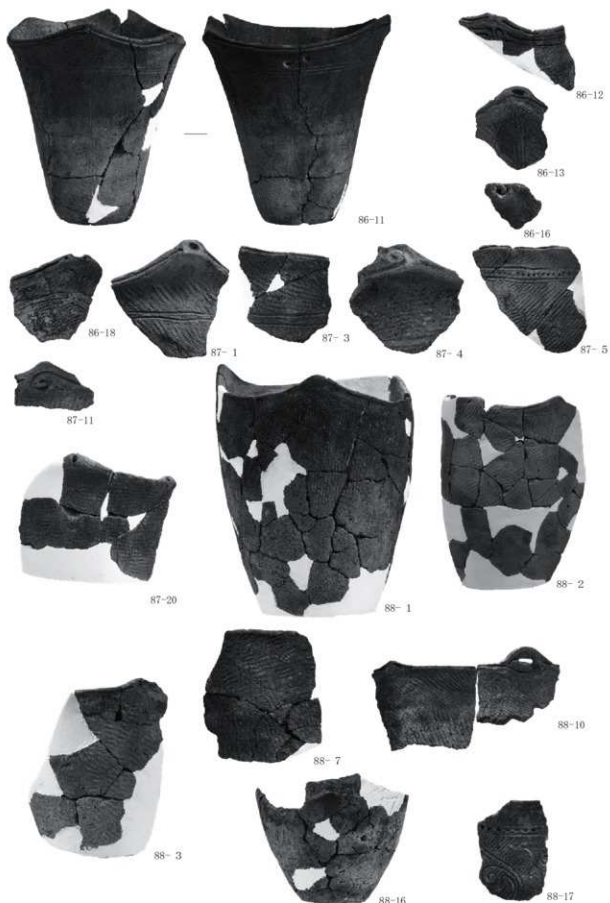


写真56 遺構外出土遺物（縄文時代・14）

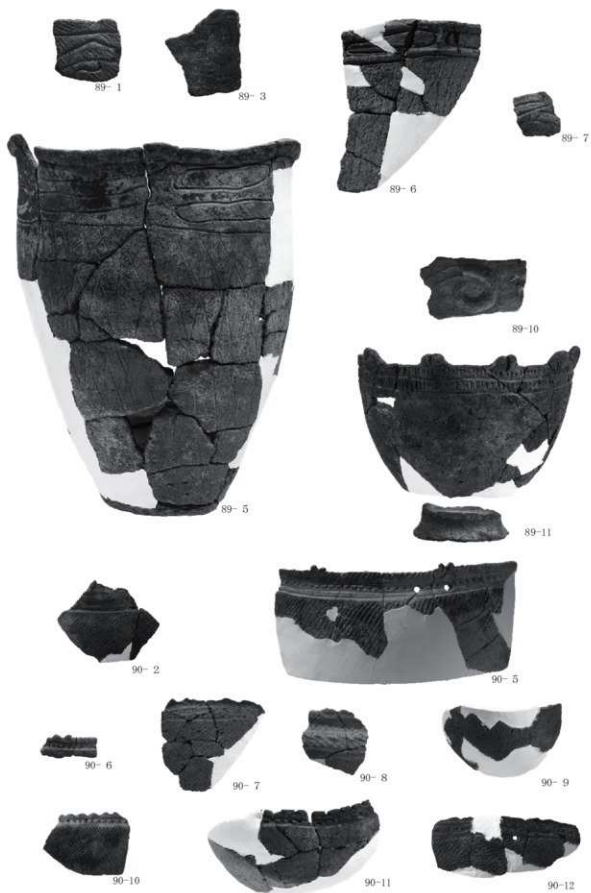


写真57 遺構外出土遺物(縄文時代・15)



写真58 遺構外出土遺物（縄文時代・16）

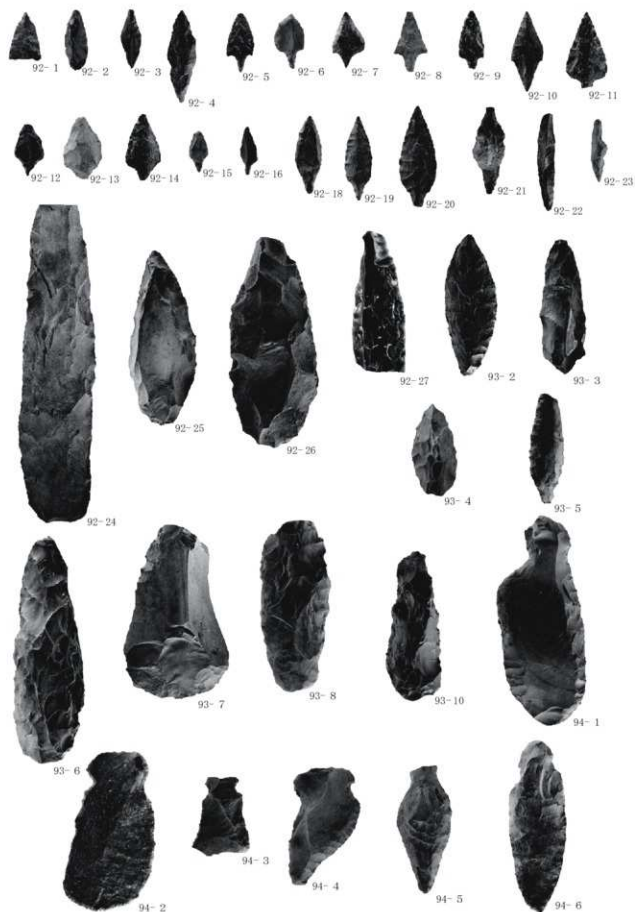


写真59 遺構外出土遺物(縄文時代・17)

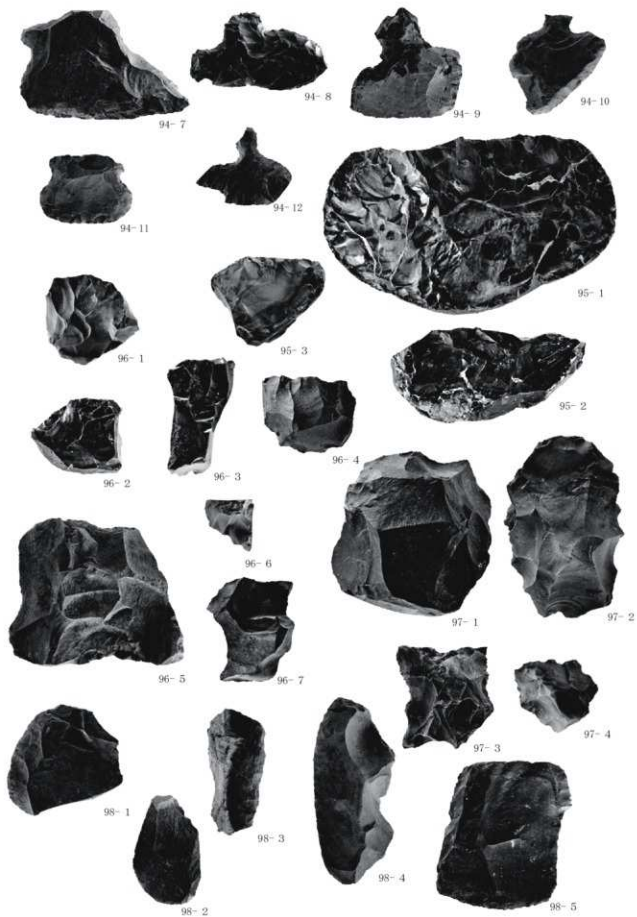


写真60 遺構外出土遺物(縄文時代・18)

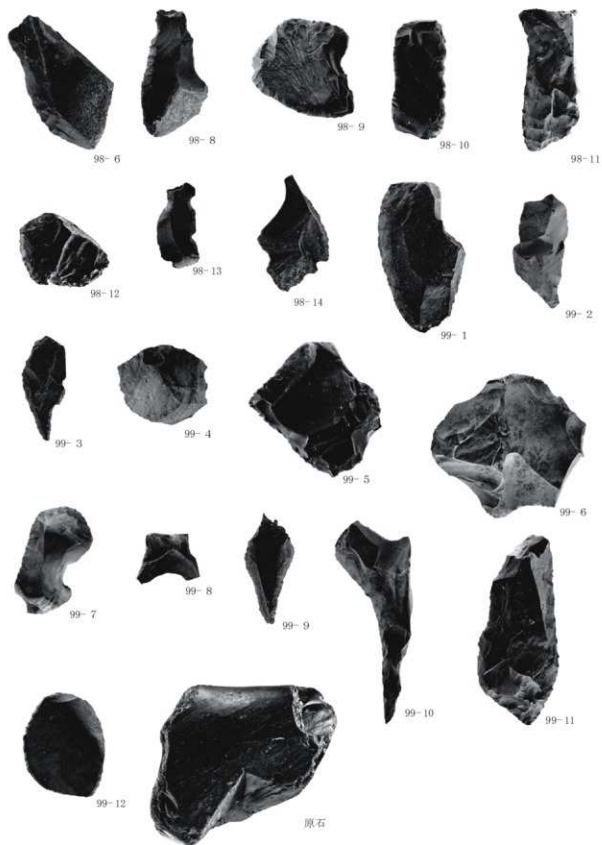


写真61 遺構外出土遺物(縄文時代・19)



写真62 遺構外出土遺物(縄文時代・20)

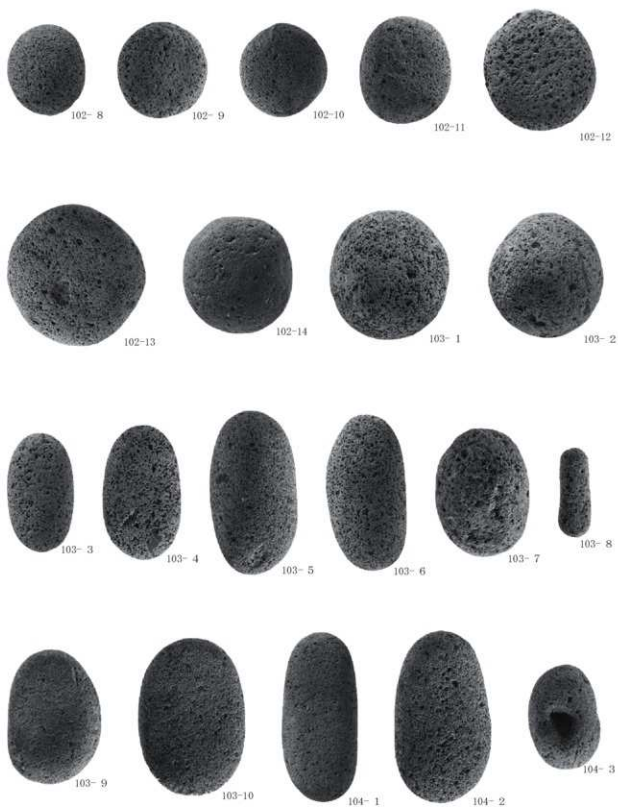


写真63 遺構外出土遺物(縄文時代・21)

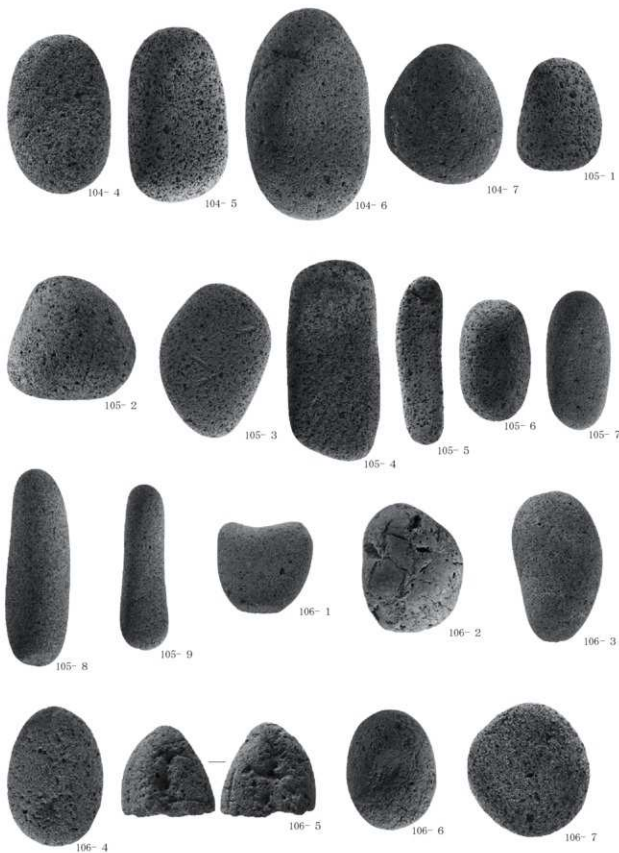


写真64 遺構外出土遺物(縄文時代・22)



写真65 遺構外出土遺物(縄文時代・23)

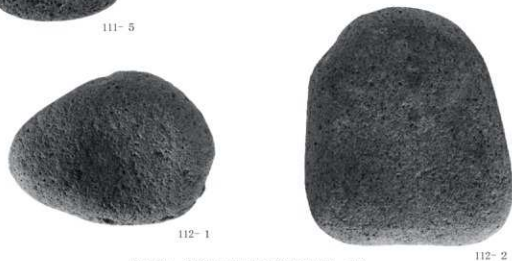
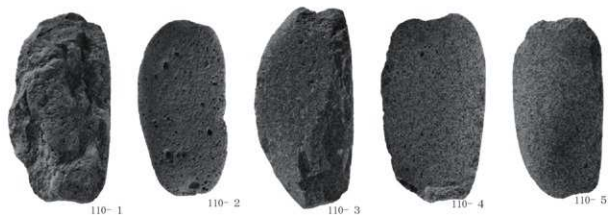


写真66 遺構外出土遺物(縄文時代・24)

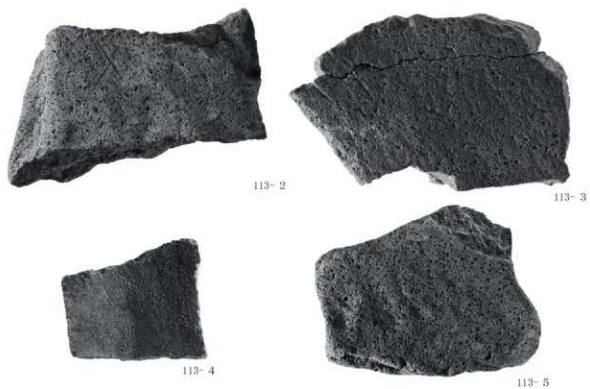
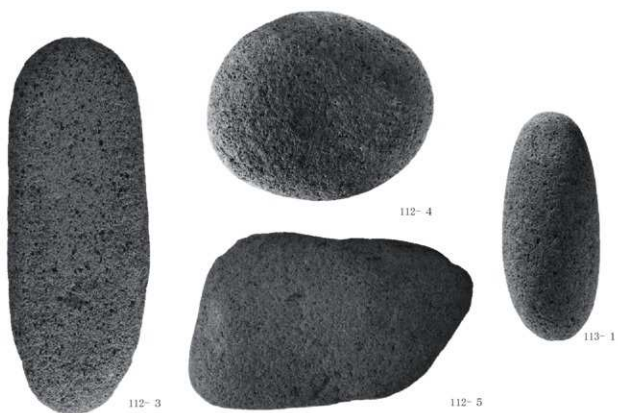


写真67 遺構外出土遺物(縄文時代・25)

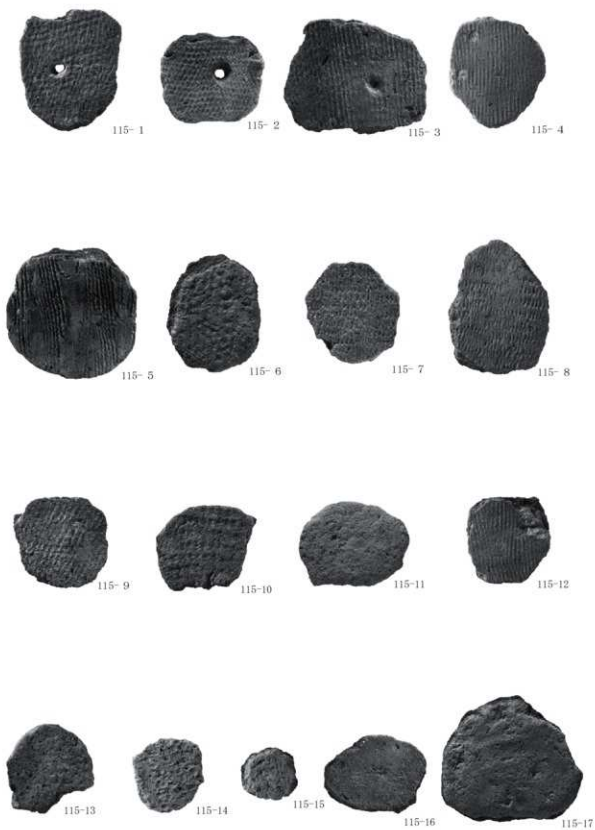


写真68 遺構外出土遺物(縄文時代・26)

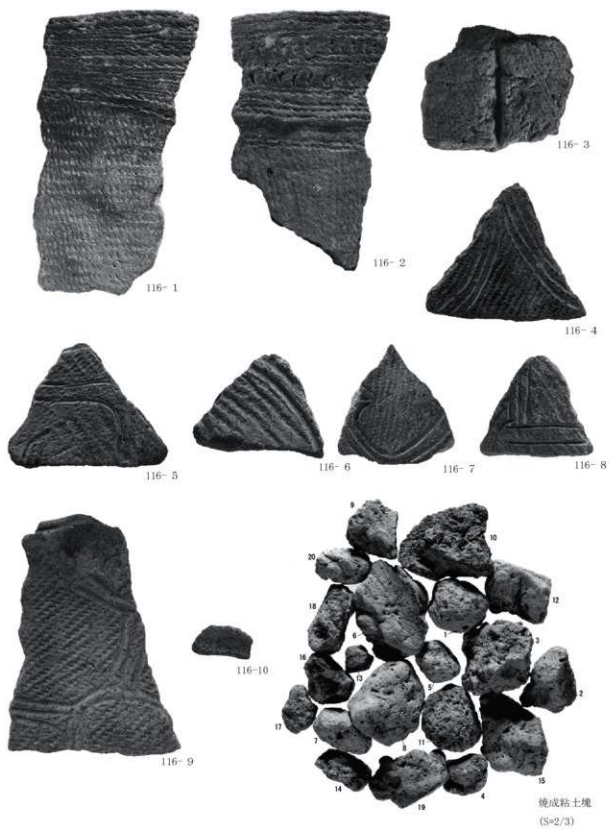


写真69 遺構外出土遺物(縄文時代・27)

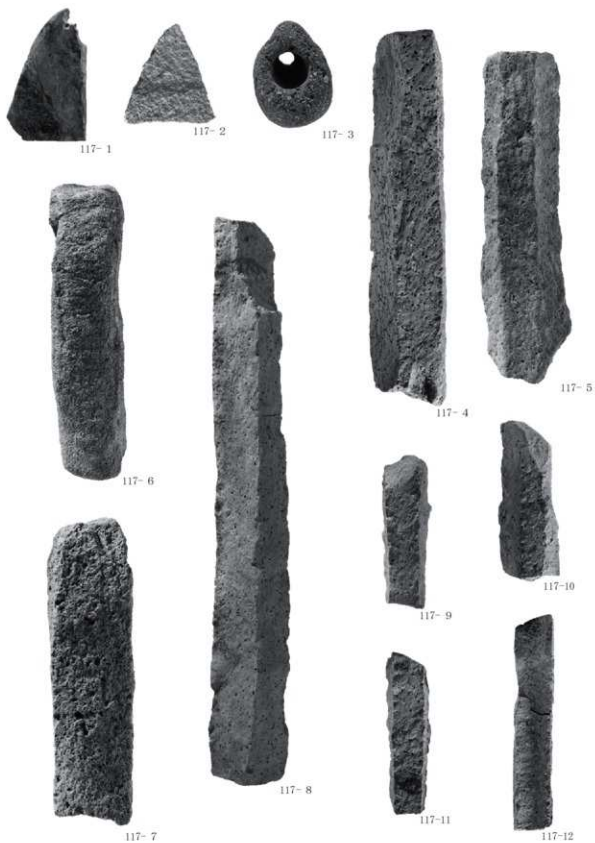


写真70 遺構外出土遺物(縄文時代・28)



写真71 遺構外出土遺物(古代・近世・近代)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふるのかっこにいせき							
書名	古野（2）遺跡							
副書名	下北地域広域避難路確保対策事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第621集							
編著者名	永嶋豊、長谷川大旗、平山明寿、藤田祐							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2021年3月10日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道庁番号	北緯	東経	20180612～ 20181019 20190424～ 20190809	4,130	記録保存調査
古野（2）遺跡	青森県下北郡風間浦村大字易国間字古野地内	02425	425021	41° 29′ 18″	140° 59′ 17″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古野（2）遺跡	集落	縄文時代	堅穴建物跡 9棟 土坑 20基 溝状土坑 15基 遺物集中区 1箇所	縄文土器・石器・土製品・石製品		縄文時代前期後葉・中期後葉の集落跡を検出した。 斜面には縄文時代前期後葉・中期後葉の遺物が主体となる捨て場を確認した。縄文時代前期後葉の秩状耳飾や中期後葉の土偶が出土した。		
		古代・中・近世・近代	焼土遺構 2基	土師器・須恵器・陶器・磁器 ・銭貨・ガラス玉ほか		平場南端からは中世の可能性のある焼土遺構2基を検出した。		
要約	<p>遺跡は、津軽海峡に臨む下北半島の先端部、目滝川左岸の標高37～45mほどの海成段丘上に位置する。</p> <p>遺構・遺物は平坦面と斜面とで確認され、平場で縄文時代前期後葉・中期後葉の集落跡が検出された。斜面からは縄文時代後期前葉の土坑や縄文時代前期後葉・中期後葉の捨て場が確認され、他の時期の混在が少ないまとまった量の土器群が得られた。捨て場からは縄文時代前期後葉の秩状耳飾のほか中期後葉の土偶が出土し、本州北端における当該期の貴重な類型となった。この他、R-30グリッドでは縄文時代前期後葉（円筒下層d1式期）の遺物集中区が確認された。</p> <p>剥片石器は約1万7千点が出土し、遺跡内で石器製作が行われていたとみられ、近隣にある大間層の頁岩が石材と想定される。</p> <p>礎石器は周辺で採集される安山岩を主体とし、同じ下北半島で採集可能な花崗閃緑岩、北海道平取町額平川産と想定される緑色岩のような搬入石材を利用した石器製作が確認された。</p> <p>古代以降は、中世と考えられる焼土遺構が確認され、古代の土師器・須恵器、近世・近代の陶器、磁器、銭貨、ガラス玉等が出土した。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第621集

古野(2)遺跡

—下北地域広域避難路確保対策事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2021年3月10日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印刷 青森オフセット印刷株式会社
〒030-0802 青森県青森市本町2丁目11-16
TEL 017-775-1431 FAX 017-775-1435

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部当たり16,170円(うち県負担8,085円)です。

